

332  
5485



\* 0056828000 \*

0056828-000

393. 2-S a 85ウ

ナポレオンの政戦両略研究

佐藤堅司・著

愛宕書房

昭和19

AJD

393.2

SA 85

32.12.24

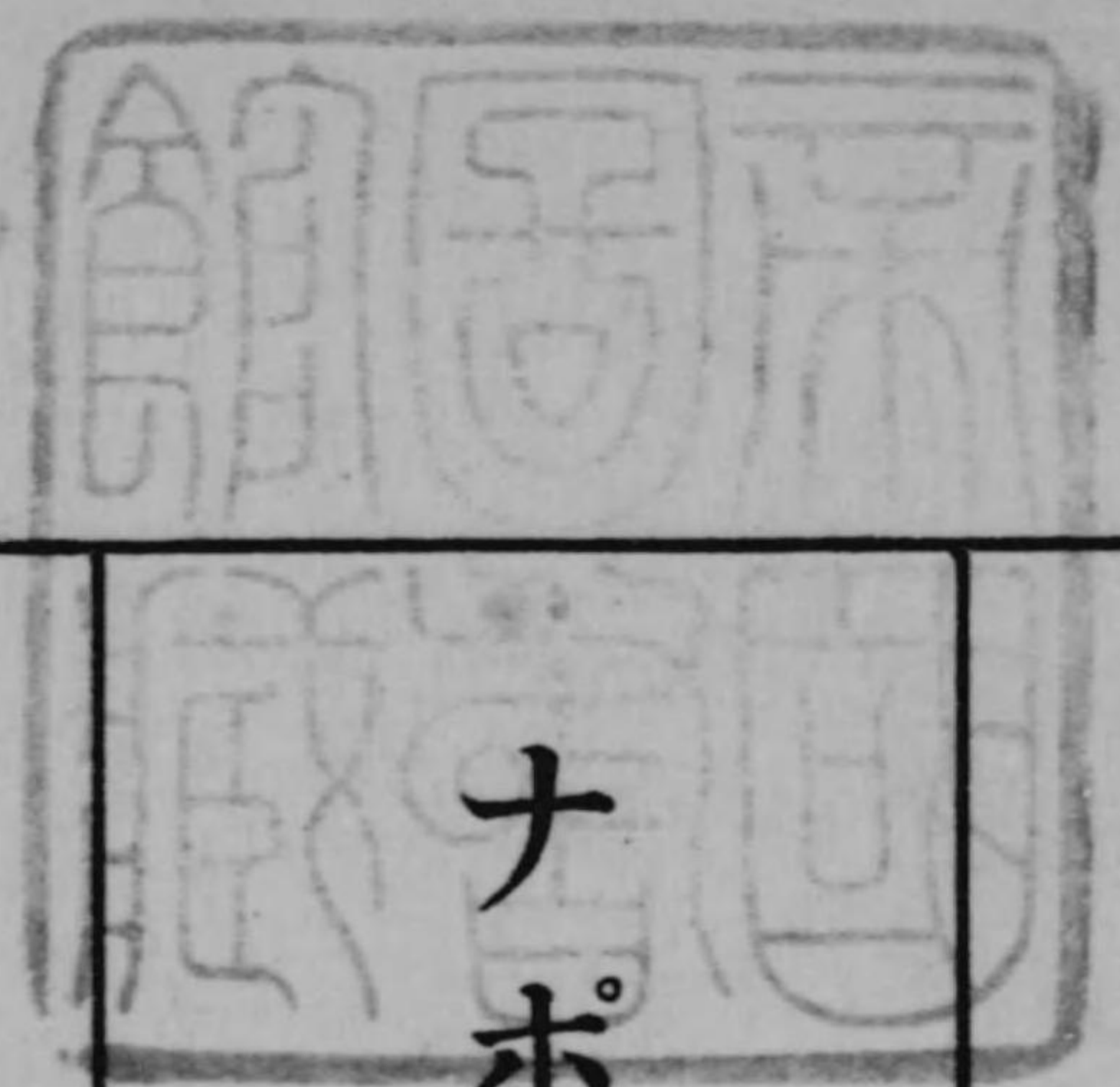
## はしがき

私とナポレオン戦史への興味との関係を語るためには、勢ひ自叙傳の一節を出さなければならぬことになる。私がナポレオンに興味を感じた最初は、千葉中學の二年生ぐらゐの時、博文館發行の『少年世界』を通して箕作元八博士執筆のナポレオンに関する記事を拜見して以來のことである。四年五年になると、西洋史が非常に好きになつた。擔任の池田淳先生（後造館士教授になられた）の講義が、餘りにも面白かつたためである。ナポレオン戦史に関する池田先生の名講義は、十六七歳であつた私の胸を全く焼きつけてしまつた。それから私は士官候補生として習志野騎兵第十三聯隊に入隊した。聯隊長は日露戦争當時挺進騎兵を率ゐて活躍された永沼秀文大佐（後中將となる）であつたが、大佐は或る時聯隊將校を集めて約三時間ばかり挺進隊の企畫から實施に至る専門的な講話をなされた。私は士官候補生であつたために、拜聴の榮を與へられたのであるが、大佐のお話の大體を三十五年後の現在でも思ひ出すことができる。さうして、私は永沼挺進騎兵隊行軍の寫眞を見た時に、不思議にも白馬に跨つたナポレオンが同じく馬に跨る部下を率ゐて行軍する姿を思ひ出すのであつた。

市ヶ谷臺の陸軍士官學校に入校して、戦術學教程を學ぶやうになつてから、私はいつか機會があればナポレオン戦史を戰術的に考へて見たいものだと思へるやうになつた。然るに私は士官學校在校一年有餘にして病氣のために退校することになり、一年間靜養の後早稻田大學に入學して、浮田和民博士や煙山專太郎教授の西洋史の講義を拜聴した

125

393.2  
SA85



佐藤堅司著

ナポレオンの政戦兩略研究

愛宕書房刊



## はしがき

私とナポレオン戦史への興味との関係を語るためには、勢ひ自叙傳の一節を出さなければならぬことになる。私がナポレオンに興味を感じた最初は、千葉中學の二年生ぐらゐの時、博文館發行の『少年世界』を通して箕作元八博士執筆のナポレオンに関する記事を拜見して以來のことである。四年五年になると、西洋史が非常に好きになつた。擔任の池田淳先生（後造館士教授になられた）の講義が、餘りにも面白かつたためである。ナポレオン戦史に関する池田先生の名講義は、十六七歳であつた私の胸を全く焼きつけてしまった。それから私は士官候補生として習志野騎兵第十三聯隊に入隊した。聯隊長は日露戦争當時挺進騎兵を率ゐて活躍された永沼秀文大佐（後中将となる）であつたが、大佐は或る時聯隊將校を集めて約三時間ばかり挺進隊の企畫から實施に至る専門的な講話をなされた。私は士官候補生であつたために、拜聽の榮を與へられたのであるが、大佐のお話の大體を三十五六年後の現在でも思ひ出すことができる。さうして、私は永沼挺進騎兵隊行軍の寫眞を見た時に、不思議にも白馬に跨つたナポレオンが同じく馬に跨る部下を率ゐて行軍する姿を思ひ出すのであつた。

市ヶ谷臺の陸軍士官學校に入校して、戦術學教程を學ぶやうになつてから、私はいつか機會があればナポレオン戦史を戰術的に考へて見たいものだと思へるやうになつた。然るに私は士官學校在籍一年有餘にして病氣のために退校することになり、一年間靜養の後早稲田大學に入學して、浮田和民博士や煙山專太郎教授の西洋史の講義を拜聽した

が、ナポレオン史の場面が最も強く私に響いて来た。早稲田大學の大講堂で大隈重信伯爵(後の侯爵)からナポレオンに關する演説を拜聴したことなども、忘れられぬ思ひ出となつてゐる。私は浮田博士の御指令により、暑中休暇中の作業としてジョン・ホルランド・ローズの『ナポレオン傳』の或る部分を翻譯したことがあつたが、爾來ナポレオン戦史研究への衝動を禁じ得ないやうになつた。

早稲田大學を出てから私は東京帝國大學文科大學史學科に入り、西洋史を専攻することになつた。箕作博士の『ナポレオン時代史』の講義、殊に先生一流の戰術的考察によつて、私は全く魅了された。十三四歳頃の初心にナポレオンと箕作先生とを一緒に考へてゐた私は、十數年を経て遂に歸すべき處に歸したわけである。卒業論文の題目について箕作先生からお尋ねがあつた時、私は躊躇するところなく『ワグラムの戦に關する戰術的考察』とお答へした。然るに箕作先生は私の決意を早速肯定されながらも、『一八〇九年佛境戰役に關する研究』といふ大きな題目にかへられ、この戰役を政戰兩略から考察し、ナポレオンの最後の決勝戰闘として有名なワグラム戰闘をその中心とすべきことを指令された。まことに有り難い恩命であつた。爾來私は一年有半大學の圖書館や上野の圖書館に通つて、卒業論文作成の準備工作に没入した。箕作先生の御注意により、私自身の頭を養ふために『孫子』を讀んだり、クラウゼヴィッツの『戰爭論』を讀んだりした。また同先生の御指令により、當時陸軍編修であつた長瀬鳳輔先生を參謀本部に訪問して、ナポレオン戦史研究に關する御指令を仰いだこともあつた。かくして、大體下書を終つたのが大正六年の三月末日であり、これを三帖ノート七冊に淨書して、製本を終つたのが四月末日頃であつたと思はれる。

卒業論文の出来ばえについては、箕作先生から相當お褒めの言葉を頂き、先生の御下命により論文の概要を『史學雜誌』に三回にわたつて連載することを許された光榮を、今でも忘れることができない。大正八年四月私は箕作先生

の御推舉により、時野谷常三郎氏(後の京都大學教授・文學博士)の後を襲うて陸軍中央幼年學校豫科教官に補せられた。(大正十年四月陸軍豫科士官學校教官に轉補)然るにその年の八月に恩師箕作先生は腦溢血のために亡くなられ、十二年九月一日の大震災火災の際大學の史學研究室に保管されてあつた私の卒業論文は焼け失せてしまつた。この二事は私に取つては終世忘るべからざる悲しみであるが、幸にして箕作先生の靈は永遠に私を鞭撻して下さるばかりでなく、卒業論文の下書は私の手許にそのまま保存されてゐるのである。

然るに大學を出てから大正時代の終りに至る間に、私の研究生活の上には複雑な様相があらはれて来た。陸軍の學校に奉職したのを機縁として、私は日本戦史の研究を思ひたち、まづ手近な關東諸戰亂の調査に従事し、諸處實地調査を試みた。千葉氏八百年祭記念講演會に出て『關東戰亂と千葉氏』といふ演題で講演した(その内容は千葉氏八百年祭誌といふ本のなかに載せられてゐる)のも、さういふ調査の次第を同縣の先輩大森金五郎先生が御承知になり、千葉の有力者に紹介してくだされた結果であつた。しかしながら、私が最も心を傾けたのは國府臺合戰の研究であるが、それがために何遍實地調査を試みたことであらう。『史學雜誌』に二回にわたつて發表した『國府臺二回の戰闘について』はその成果であつた。駒澤大學に兼勤するやうになつてから、私は西洋文化史を連年講義することになり、三帖ノートが積つて十二冊を數へるに至つた。さうして、昭和三年五月その三分の一を『西洋文化史講話』(古代中世篇)の名のもとに發刊した。

また一方においては私の古兵書蒐集がはじまつてゐた。さうして、その蒐集の第一欵は鈴木春山抄譯『三兵活法』であつたと思ふ。この本はプロシヤ人プラントの原著『三兵戰術の基礎』のオランダ人ミュルケンによる蘭譯を春山が重譯したもので、小型の木版本三巻であつたが、後に私が春山の孫菊子老刀自の熱烈なる依頼により『鈴木春山兵

學全集』三卷を編纂刊行する素因をなしたものである。プラントの三兵戰術といふのは、ナポレオンの歩騎砲三兵戰術を根本としたものであるから、私がこれに對して特殊な興味を感じるやうになつたのは勿論である。さうして、私はナポレオンの三兵戰術が維新前の日本に與へた影響を研究して見ようといふ好奇心を起し、各種の邦譯三兵戰術書を手當次第に蒐集するやうになつた。しかしながら私はさういふ態度は結局本筋をはづれてゐるであらうといふ事を考へるやうになつて來た。私は日本の古兵書または武學書を蒐集するに従つて、日本武學の研究が主體でなければならぬこと、外國兵學、例へばナポレオンの三兵戰術の研究はその從屬でなければならぬことを感知し、本末顛倒の弊に陥ることを免れた。しかしながら、私の研究態度の變更は、決して外國兵學を排撃するといふ意味ではなく、その取るべきを取つて、我れの養ひとして差支ないとする包容性に富むものであつて、昨年私の發刊した『日本武學史』は、この事實を立證するものである。

私は現在あらゆる誘惑を超越して日本武學の研究に没入しつつある。さうして、この安定性を得るために、私の西洋文化史研究、西洋兵學史の研究、ナポレオン戰史の研究が、決して弊害となることなく、また道草にもならなかつたことを、私はだんだんはつきりと認識するやうになつて來た。なんとすれば、私の謂ふ日本武學は外國兵學をただ無批判に排撃するやうな偏狭なものではなく、取るべきものがあれば勿論これを取り入れる雅量をもつものであるからである。

最近長友新城和一氏は私に對して頻りに卒業論文の上梓を勧められた。氏は私の親しい同僚として陸軍豫科士官學校教官に奉職満二十五年に及ばれ、フランス文學に造詣が深く、ナポレオンに對する理解の深いお方であるから、私は寧ろ喜んで氏のお求めに應じようといふ氣持にさへなつて來た。愛宕書房社長山崎泰雄氏の御好意が私の氣持に拍

車を與へてくださったのは勿論である。そこで私は卒業論文『一八〇九年佛墮戰役の研究』を本論とし、『ナポレオン戰史概観』といふ前論を加へて、これを『ナポレオンの政戰兩略研究』の名のもとに上梓し、恩師箕作博士の靈前に供へることを決意した次第である。

昭和十八年四月八日

著者識す



# 目次

序論	一五
前論 ナポレオン戦史概観	
第一章 革命時代の軍事とナポレオン	二一
第二章 イタリア戦役	二六
第三章 エジプト遠征	三三
第四章 一八〇〇年の對埃戦役	三八
第五章 トラファルガルの海戦	四四
第六章 ウルムの包圍	五〇
第七章 アウステルリッツの會戦	五四

第八章 對プロシヤ戦役	六〇
第九章 普露兩國との戦役	六四
第十章 イスパニヤ遠征	六八
第十一章 一八〇九年オーストリア遠征	七三
第十二章 ロシヤ遠征	七九
第十三章 自由戦役	八三
第十四章 聯合軍の侵入	八七
第十五章 ワーテルローの戦	九〇

## 本論 ナポレオンの政戦兩略

(一八〇九年佛埃戦役の研究)

第一章 序	一〇三
第二章 一八〇九年佛埃戦役の起原	一〇七

第三章 戦争の勝敗と準備 ..... 一三三

第一節 オーストリアの準備 ..... 一三六

第二節 フランスの準備 ..... 一四五

第四章 戦 略 と 政 略 ..... 一七〇

第五章 佛 埃 第 一 回 の 役

第一節 佛埃兩軍の戦略 ..... 一七三

一 埃 軍 の 戦 略

二 佛 軍 の 戦 略 ..... 一七九

第二節 戦 闘 ..... 一八三

第三節 ターイン附近の戦闘 ..... 一八四

第四節 アーベンスベルグの戦闘 ..... 一九〇

第五節 ランツフートの略取 ..... 一九四

第六節 エックミュールの戦闘 ..... 一九五

第七節 ラチスボンの戦闘 ..... 一九九

第八節 第一回役における兩軍の戦略批判 ..... 二〇二

一 攻 勢 と 防 勢

二 政 略 と の 關 係 ..... 二二三

三 兵 力 の 集 中 ..... 二二七

四 運 動 ..... 二三六

第六章 佛埃第二回の役（ベヴァリヤ役の結末からツナイム戦闘まで）

第一節 ベヴァリヤ役からウィーンに至るまでの兩軍の動作 ..... 二三二

一 埃軍の退却とその戦略

二 佛軍のウィーン進軍とその戦略 ..... 二三六

第二節 ウィーン略取とその價值 ..... 二四四

第三節 アスペルン||エスリンゲン戦闘に至るまでの佛埃兩軍の戦略 ..... 二四九

一 佛 軍 の 戦 略

二 埃軍の準備とその戦略 ..... 二五三

第四節 アスペルン||エスリンゲン戦闘 ..... 二五七

一 戦 闘 第 一 日

二 戦 闘 第 二 日 ..... 二六一

三	アスペルン・イエスリンゲン戦闘批判	二六四
第五節	アスペルン・イエスリンゲン戦闘からワグラム戦闘に至るまでの兩軍の準備	二七三
一	佛軍の準備	
二	奥軍の準備	二七四
第六節	佛奥兩軍別動隊の運動	二八〇
一	ヨハン大公及びエージエヌ・ボーアルネの運動	二八一
二	マルモンの運動	二八八
三	フェルディナンド大公の行動	二八九
第七節	ワグラム戦闘	二九一
第八節	ワグラム戦闘を中心とした佛奥兩國の戦略戦術	三〇四
第九節	ワグラム戦闘後シェーンブルン條約に至るまで	三三〇
一	ワグラム戦闘後ツナイム休戰條約に至る	
二	ツナイム休戰條約後シェーンブルン平和條約に至る	三三七
三	政戰兩略批判	三三八
第七章	ナポレオンに對する國民的反抗運動	三四四
第一節	シル少佐の反抗運動	三四五

第二節	少年スタップスのナポレオン暗殺企圖	三五五
第三節	ホーフエルの反抗運動	三六二
第八章	結	三六九
	論	三六九

挿入圖目次

アウステルリッツ戰圖……………	五七
ワーテルロー戰圖……………	九六
エックミュール及びラチスボン戰圖……………	一九六
佛境兩軍行軍競争圖……………	二四三
ロバウ島進出計畫圖……………	二七五
ワグラム戰圖……………	二九七

ナポレオンの政戰兩略研究

——恩師文學博士箕作元八先生の

靈前に捧げたまつる——

## 序論

ドラジューは西洋六大兵家としてアレクサンドル、ハンニバル、ケーザル、グスターフ・アドルフ、フリードリヒ、ナポレオンを擧げてゐるが、それらのうち唯一人を選ぶことを命ぜられるなら、何人も躊躇なくナポレオンを指摘するであらう。

ナポレオンは多方面の天才と稱される。政治・軍事・外交・宗教・経済・教育・法律の各種方面において、ナポレオンは何人も追隨を許されぬ程度の才能と常識とをもつてゐた。さうして、その全體を綜合したところに、皇帝ナポレオンの大きな姿を見ることができるのである。ナポレオンの四十餘回の戦勝と一ナポレオン法典との價值比較の是非は、暫くこれを不問に附するとしても、かうした問題を通してナポレオンがいかに法典知識に堪能であつたかを知ることができらう。ナポレオンの宗教政策の寛容は、舊教徒を壓迫したために所謂文化闘争カルチュラル・カンファを惹起したビスマルクよりも遙かに上手であつたと稱される。ナポレオンが専門教育に一番力を入れ、その効果を立派にあらはしたといふ事實は、永遠の教訓となるものである。ナポレオンの経済は戦ひつつ増産する建設経済であり、消耗経済でなかつたところに、今日の長期建設戦への大きな示唆がある筈である。

ナポレオンは政戦兩略の微妙なる渾一者であつた。クラウゼヴィッツは『戦争論』においてこの兩略の微妙なる渾一の必要を力説したが、ナポレオンこそ偉大なる實行者であつた。政戦兩略の渾一は通常開戦前において特にその必

要を叫ばれてゐたものだが、ナポレオンの場合においては、さういふ定石方面は勿論の事として、戰場においてさへ兩略の目まぐるしい變化を熟視し、最も有効にこれを處理したところに、ナポレオンの偉大性若しくは特異性があるのである。一七九六年イタリア戦役の場合には、かうした方面におけるナポレオンの才能を最も早く表明した。一八〇五年アウステルリッツ大會戦の場合にはその最たるものである。この時ナポレオンは塙露兩軍と味方の兵數を互角にするために、ダヴー、ベルナドット兩將軍の率ゐる軍の來着を待つてゐたのであるが、この間休戦條約の誘惑をもつて塙露兩國皇帝を翻弄して決戦の時機を遷延し、一方中立國ではありながら塙露側からの同盟の申込をうけて多少これに秋波を送り出したプロシヤを巧みに懐柔して、豫定以上の戦勝を収めたナポレオンは、政戦兩略の完全なる渾一者でなければならぬ。

ナポレオンは常識の極度に發達した人、あらゆる方面に有する常識を綜合して一大見識に到達することのできた天才である。彼れは革命と反革命とを綜合することができたばかりでなく、或る意味においてはローマ帝政の復活者であつた。彼れはイタリア戦役において夙くも自己の常勝を信じ、政戦兩略の手腕を認識して、總裁政府の無能を看破し、やがて來るべき自己の獨裁時代を確信する先見をもつてゐた。が、その後ナポレオンは政戦兩略の渾一を缺き、政略に偏する場合が多くなつて來た。ナポレオンが一八〇五年・一八〇九年兩役にウィーン占領によつて戦争がはるであらうと考へ、一八一二年のロシア遠征においてモスコイ占領によつて戦争が解決するであらうと考へたのは早計であつた。一八〇五年のアウステルリッツ會戦がナポレオンの四十戦勝中の傑作であつたのは周知の事實であり、戰場における政戦兩略渾一の妙はさきに述べた通りであるが、その直前ウィーン占領の場合において政略に偏したといふ失敗があつたのである。またナポレオンはその全盛期においては自己以外のあらゆるものを輕侮する驕慢の心を

起し、民心の動きに無頓着となり、敵國に氣勢を高めて來た反ナポレオン思想を低評價するやうになつた。一八〇八年におけるイスパニヤ人の反抗運動は、ナポレオンの驕慢心への覺醒劑であつた筈である。しかしながら、ナポレオンは後になつてこそ一八〇八年戦役を痛といふやうになつたけれども、その當時は決してさういふ心持にはならなかつたのである。

全盛期のナポレオンの心理状態には、どことなく弛緩の氣分が漂つてゐた。政戦兩略の渾一を缺くやうになつたのも、敵國民心の動きや反ナポレオン熱の勃興に無頓着になつたのもそれがためである。さうして、この傾向が最も濃厚にあらはれた最初は、一八〇九年の佛塙戦役である。一八一二年のロシア遠征の失敗にナポレオンの衰運をはじめて見出さうとする一般の説は、手遅れの譏りを免れないであらう。われらは断然一八〇九年戦役はその事實を認めようとするものである。同戦役は結論においてはナポレオンの戦勝にをはつたけれども、戦役の過程においてはナポレオンの側に面白くないことが幾つもあつた。ナポレオンが珍らしくも敵に攻勢の第一歩を許したことがそれである。ウィーン占領によつて戦争が終結するであらうと樂觀してゐたことがそれである。敵を見くびつたためにアスペルンの戦に敗れたことがそれである。ナポレオンが相手どつた敵將のうち、一八〇九年戦役におけるオーストリアのカー大公は、ウエリントンよりもブリュッヘルよりも上手の大將であつた。ナポレオンを横綱とすれば、カールは大關に當る程度であつて、丁度小牧役における秀吉と家康との關係を髣髴させるものがある。

ナポレオンはカールの名聲をよく知つてゐた筈である。一七九六年戦役においてモロー、ジュルダン兩將軍を手玉に取つたカールの手並をナポレオンは熟知してゐた筈である。それだけにナポレオンの心理状態は、不思議にもカールを輕蔑して見たいやうな氣持になつたのであり、アスペルンの戦においては、さきのアウステルリッツ會戦と正反

對の無謀を敢てしたのである。即ちこの場合ナポレオンは味方の軍の來着を待つことなく、少數をも顧みず不用意な進出を試み、優勢なるカール軍の攻撃を蒙り、野戦における珍らしい敗北をしたのであつた。またシェーンブルン條約直前ドイツを愛するためにナポレオンを暗殺しようとした少年スタッフスの心理状態をどうしても理解することができなかつた。同様にシル少佐を頭目としたプロシヤ人の反抗運動にしても、アンドレヤス・ホーフエルを巨魁としたチロル人の執拗なる反抗運動にしても、ナポレオンには不可解な謎であつた。

一八〇九年のナポレオンには、矛盾した二つの面が見出される。全盛の華々しさと衰兆の淋しさと、さうして緊張と弛緩と、さうしたものが相錯綜してゐた。アスベルンの敗北によつて、エジプト遠征よりも、イスパニヤ遠征よりも、ナポレオンは大きな黒星を得たからである。かやうにナポレオンが常勝の名譽を汚し、全盛のうちに衰兆を示したのは、蓋ふべからざる事實であるとしても、ロバウ島に後退してから、緊蹙一番すればその成果は容易にワグラム戦勝となつてあらはれたのである。逆境から盛りかへす英雄の眞價は見事に發揮されたのである。

私の卒業論文『一八〇九年佛墮戰役』は、以上のやうなナポレオンの特殊場面をとらへたものであつた。ナポレオンの衰運を一八一二年や一八一三年や一八一四年や或は一八一五年に見ることなく、これを早く一八〇九年に見出すことができた二十六年前の學生時代を回顧しつつ、私は今、無量の感慨にうたれてゐる。さうして、この若々しい文を若干修補して、その後に書いた『ナポレオン戰史概観』と共に江湖に送る機會を與へられたことを、私は衷心嬉しく思つてゐるものである。

## 前論

### ナポレオン戰史概観

## 第一章 革命時代の軍事とナポレオン

ナポレオンの政戦兩略理解の前提として、われらはまづナポレオン戦史の大體を取り扱はうとするものであるが、さうするための必要條件として、少なくとも革命時代の軍事にまで遡らなければならぬ。なんとすれば、ナポレオンは政治家として革命政治を参考としてゐたやうに、軍將として革命時代の軍事に絶大なる關心をもつてゐたからである。フランス革命の三綱領の一つである友愛の精神は、外敵に對する敵愾心から變形して熱烈なる愛國心となつたものといふ。フランス人は革命の初期早くも普墺兩國を敵としてゐたが、ルイ・カペー死刑後大にイギリスの同情を失つた結果として、イギリスを盟主としロシア、オーストリア、プロシヤ、イスパニヤ等を加へた第一回對佛同盟を相手としなければならなかつた。一方國內にはラ・ヴァンデーその他の地方に叛亂が起つた。フランスにおける破天荒な軍事的革命は、以上の内外兩戦に處する目的のために餘儀なく實行されたものである。

軍制について見るに、フランス革命後の最初の變革は、外人傭兵制を全廢して國民のみをもつて組織される義勇兵制とした點に見出される。さうして、それは自由尊嚴の精神と愛國心を満足させる事實であつたかのやうに思はれる。しかしながら、實をいふと、義勇兵制の成績は餘り香ばしくはなく、大して志願者もなかつた。自然、徴兵制の主張が起つて來たのは餘儀ない次第である。フランス徴兵制最初の主張者はデュボア・ド・クランシーであるが、彼れは義勇兵制の決定された一七八九年の十一月に徴兵制の建議を國民議會に持ち出した。が、すべての國民を兵士に



しようとするクランシーの國民的徴兵制の主張は、かへつて人種の侵害であるといふ理由のもとに否定された。その後普墺同盟軍の侵入があつたり、第一回對佛同盟の締結があつたりした後、多數兵士の募集が絶對必要になつたため、徴兵制の意味が次第に理解されて來たのであらう、一七九三年八月、カルノーが公安委員に任命されてから、彼れによつて遂に徴兵制が新設されることになつた。かくして、同年の末には同盟軍とラ・ヴァンデーの一揆とに對抗するための兵士は約三十萬人に達したと稱される。

その他軍隊編成法の上にも種々の變革を生じたが、それよりも社會問題として注意すべき點は、將校の地位が一般平民の上に開放されたことである。革命以前における將校の地位は勿論貴族階級に獨占されてゐた。革命後貴族の名稱がなくなつた頃にも、將校の地位は依然として舊貴族の掌中にあつた。ところが、一七九三年以後エペール派の意見に従つて舊貴族出身の將校を次第に免職する風を生じたが、カルノーは才能ある下士卒のうちから將校を拔擢する制を立てた。その他平民の子弟で士官學校を卒業したものは、勿論將校になることが出來たのである。かうした點から、兵役を意義のある、さうして愉快なる義務と考へる兵士が多くなり、また同時に愛國心の立場から飽くまで外敵に對抗しようといふ精神も養成されたのである。

次に戦法の革命について概説しよう。戦法の方面においても軍制方面同様光つてゐたのはカルノーである。彼れはこの方面において天才ナポレオンの先輩として甚だ貴重な役目を働いてゐた。彼れは戰略上において「集中」の原則をナポレオンに示してゐる。フリードリヒ大王の得意とした敵翼を狙ふ側面攻撃を棄て、軍を或る一部に集中して、敵の中央を突破する作戦を取るやうになつた。さらに戰術上彼れは散兵戰術と縱隊戰術とを併用する特殊の戰術を考察した點で、ナポレオンの先驅者となつてゐる。まづ散兵戰術についていふと、その出現は當然火器の發達を條件

とする。西洋小銃界における最初の革命は、第十七世紀中葉のフランスに行はれた。それまで三百餘年繼續して來た火繩銃の代りに、より有效な「燧石銃」が發明されたからである。この新式小銃の撃鐵は打力において火繩銃のそれよりも遙かに強く、その尖頭につけられた燧石が火皿の上に置かれた鋼鐵を強打して火を發すると同時に、その際火蓋を排して口火に點火する装置につくられたものである。勿論この銃は火繩銃と同様前装式であり、小銃第二革命後にあらはれた底装式撃針銃に比して遙かに遜色のあつたものであるが、それでも、雨中には無効となり、夜間は火繩の發する光のため敵の目標となる不便を有した火繩銃に比し遙かに有効であつた。

以上の小銃革命以外に、フランスにはその後開もなく銃劍の發明とその應用があつたのである。それにも拘らず次の第十八世紀に至るまで縱隊戰術を固執してゐたのは、不思議といはねばならぬ。然るに同世紀の末期北米獨立戰役の際に發達した小銃に順應するやうな新戰術、即ち散兵戰術がウォシントンによつて工夫された。散兵戰術なるものは、もともとアメリカ人が土人との戰闘中偶然發明した戰術で、これを正規の訓練を経たイギリス軍に試みて意外の成功を収めることができたのである。ラファイエットのやうな參戰將校はこの新戰術の效果を目撃してゐたので、歸國後は勿論これを宣傳したに相違ない。しかしながら、當時における小銃の有効射距離はまだ百五十ヤードといふ短距離に過ぎなかつたので、フランスの散兵は相當敵の射撃から損害を免れつつ前進することができたとしても、それはほんの一瞬間のことであつて、忽ちにして敵の銃劍突撃を蒙る不利に陥るのである。即ち散兵戰術のみでは駄目なのだ。そこで、カルノーはこれに縱隊戰術を併用したわけだ。突貫力において縱隊が遙かに横隊の上にあることを熟知したカルノーは、味方の散兵の射撃が出來なくなる頃合を見て、縱隊をして銃劍突撃を敵の横隊に向つて行はしめたところ、はじめて異常な效果を奏することができた。序でにいって置くが、カルノーが横隊を避けて散兵と縱隊

とを採用した他の理由は、新募の兵士に對して、訓練の困難な横隊戦術を強ひるよりも、訓練の容易な散兵を要求するほかに仕方がなかつたためでもある。

以上によつて大體知られるやうに、政治的・社會的・宗教的方面においては非常識的な變革を敢てしたと思はれるフランス革命も、軍事的方面においては案外常識的な改革を実施したのであつた。徴兵制の施行や散兵・縦隊併用の新戦術の開拓などがその例である。

然らば、これとナポレオンとの關係はどうか。ナポレオンは革命から徴兵制と散兵・縦隊併用戦術とを踏襲したのであつて、この點に彼自身の獨創はあらはれてゐないかのやうに見える。しかしながら、事實、ナポレオンの常識と綜合的天才とは、革命から與へられた一切の軍事的要素を融合して、これを立派な渾一體とした。例へば戦術の問題にしてもさうである。即ち敵火の損害を顧慮し、散兵をもつてまづ敵を攻撃し、これに騎兵の襲撃と砲兵の射撃とをまぜ、最後に密集縦隊の銃剣突撃をもつて戦を決する新戦術は、革命時代からの傳承であるとしても、ナポレオンの場合においては、騎兵・砲兵の使用が一層効果的となり、就中三兵戦術が精妙となり、完全な綜合戦術となつた點が特色をなしてゐる。かやうにして、フリードリヒ大王時代に發達の頂上にあつた横隊戦術を固執してゐた諸國軍は、ナポレオンの新戦術の前に全く顔色を失つた。その他ナポレオン戦術が豫備隊の適切な使用や弱點突破によつて近代戦術の特徴を發揮したところなども見逃すべからざる點である。

しかしながら、軍將ナポレオンの偉大さは戰略方面にも十分あらはれてゐる。「分進合擊」とか「連絡線遮斷」とか「集中」とか、その他各種の點において、ナポレオン戰略の絶對的價値を認めることができる。今一例として「集中」——實はこれもカルノーからの傳承だ——の問題を考へよう。ナポレオンの集中戰略の目的は勿論決戦に對して

優勢なる兵力を送るためであつた。ところで、集中戰略實行の手段として彼れは敵軍の牽制とわが軍機動の敏速とを要件とした。かくして獲られた幾多の戦勝を回顧して、ナポレオンは「予は常に多數をもつて少數に勝つた」といふ含蓄ある言葉を漏らしてゐる。戰略の眞髓である「相對的多數」の原理を幾多の戦例に具體化した満足の言葉であるやうに思ふ。かう考へて來ると、ナポレオンの終局の勝利は、勝つべくして勝つた必然的なもので、決して奇勝ではなかつたのだ。かやうにナポレオン戰略が飽くまで常識的であるところが、普遍的價値の對象となるわけでもある。そこで、われらは以上のやうな戰略・戦術がいかなる過程を経て實現されたかを、イタリア戦役その他有名な戦役を網羅したナポレオン戦史をとほして概観しようと思ふ。

## 第二章 イタリヤ戦役

革命軍は國民公會時代において既にサヴォイ、ニースを獲得し、さらにオーストリア領ネーデルランド（ベルギー）オランダ並びにライン左岸におけるプロシヤの飛地を占領した。一七九五年四月五日にはプロシヤから前記ライン左岸の地を割譲せしめたと同時に、プロシヤをして第一回對佛同盟から脱退して中立の態度を取らしめることにした。また同年七月二十二日フランスはイスパニヤとの間に第二のバーゼル條約を結び、イスパニヤからサン・ドミンゴの東部を獲得し、またイスパニヤをして第一回對佛同盟から脱退せしめた。第一回對佛同盟はかくの如く次第に寂寥を加へ、結局同年九月には新たに英・墺・露三國同盟が締結されることになった。しかしながら、三國はそれぞれ利害關係を異にした。即ちイギリスは國防上ベルギーがフランスに所有されるのを好まず、そこをあくまでオーストリアの手に保留させようとしてゐた。またロシアは對佛問題よりも却つてトルコ方面に野心を燃やしてゐた。

三國同盟の以上の弱點に乗じて總裁政府が決然たる攻撃戦争を敢行したのは賞讃に値する。ところで、當面の敵オーストリアに對する總裁カルノーの作戦はどうかと見るに、彼れはライン河方面に二軍、イタリヤ方面に一軍を編成し、結局以上の三軍をして合してウイーンを突かしめようといふのであつた。ライン河方面への二軍は本軍であり、兵力十五萬人以上、そのうち北軍はジュルダン（二七六一—一八三三）、南軍はモロー（一七六一—一八一三）を司令官とし

た。これに對するオーストリア軍はカール大公（一七七一—一八四七）とウウルムゼルとによつて率ゐられた十五萬人の兵力であつたが、カール大公の戰略的天才はジュルダン、モローの兩軍を全く譚弄しつくした。故にわれらの興味は當然ナポレオン・ボナパルト（一七六九—一八二一）によつて率ゐられたイタリヤ軍の上に集中する。ツィロン要塞攻撃の場合とヴァンデミエール一揆鎮壓の場合に非凡の天才を示したナポレオンが、イタリヤ軍司令官の任命を受けたのは一七九六年三月二日、ジョセフィーヌ（一七六三—一八一四）と結婚したのは同月九日、軍司令官の職に就くべく出發したのは同月十一日であつた。ナポレオンによつて率ゐらるべき兵士はその數四萬人弱、マッセナ（一七五八—一八一七）、オージュロー（一七五七—一八一六）その他二三の師團長は部將であり、將軍ベルチェ（一七五七—一八一五）は參謀長であつた。

ナポレオンは三月二十七日ニースに到着した。そこにナポレオンは給養最も粗惡な兵士等を發見して、次のやうな傳説的に有名な訓示をしたといはれてゐる。「兵士等よ！ 予は汝等を最も豐饒な平原に誘導しようと思ふ。富有の州も廣大な都市も汝等の掌中に陥るであらう、さうして汝等はそこに名譽と光榮と富とを見出すであらう。イタリヤ軍の兵士等よ！ 汝等は勇氣と忍耐とを缺くべき道理があり得るかどうか。」ナポレオンの訓示には抽象や理論や空想がなく、飽くまで直截的な實際的な口吻が満ち満ちてゐた。彼れが兵士等の心を得た一つの理由はそこにある。ところでマッセナ、オージュロー等の部將が彼れを観る態度はどうであつたか。イタリヤ軍はナポレオンによつて新たに組織されたものでなく、三年前から既に存在し、マッセナ、オージュロー等はその指揮官であつた。彼等は軍將としてナポレオンよりも遙かに先輩であり、ツィロンやヴァンデミエールの場合のナポレオンを勿論理解する筈もなく、従つて二十七歳の青年司令官の新任を吃驚と輕蔑とをもつて待ち設けてゐたことであらう。然るにナポレ

オンの威厳と不思議な魅力とは、忽ちにして傲れる部將等を征服した。マッセナはナポレオンの非凡な指揮振を讃嘆し、また「身長五尺二三寸（實際は五尺三寸四分）のナポレオンが司令帽を冠ると二尺ぐらゐ高く見えた」といつて驚きオージュローは「どうしたわけか知らぬが、わしは彼れを一目見ると壓服されてしまつた」と訝かつてゐたほどである。即ちそれは赤壁の戦の直前において二十八歳の白面郎周瑜が呉の宿將程普・黄蓋等を壓服した場合と好一對をなすものである。ナポレオンはイタリア戦役時代將兵から「短小伍長」の異名をもつて呼ばれてゐたが、それは決して輕蔑のためでなく、寧ろ敬愛の意味においてであつたと解さるべきである。次にナポレオンが將士等に與へた驚異は、彼れの新戦術である。

さて、ナポレオン着任當時における敵の動靜はどうであつたか。敵は七十二歳の老将ボーリユー指揮のオーストリア軍三萬餘とコルリ指揮下のピエモンツ軍——ピエモンツはサルディニアの領有、イタリアの西北にあり、フランスと境を接す——二萬餘であつた。（一七九二年サルディニアはフランスからサヴォイとトニースを奪はれたので、その兩地を回復しようとしてオーストリアと同盟してゐた）さうしてオーストリア軍はその主力をアキに、ピエモンツ軍は同じくその主力をチェボアに置いてゐた。ナポレオンはニスから進んでジェノア灣に臨むサヴォナ附近に主力を集中した。サヴォナと敵の根據地たるアキ、チェヴァとの間には南アルプス山脈が東西に走り、東はアベニン山脈に、西はフランスとの境界をなす西アルプス山脈に接続し、南ジェノア灣岸との間に狭長の平野を劃してゐる。ナポレオンは勿論この狭長の平野が策源地としての價値を有しないことを知り、アルプスを越えてポー河盆地の大平野に本營を進めようと考へてゐた。ところがサヴォナの地點たるや、アキ、チェヴァの兩地に對して殆んど二等邊三角形の頂點をなしてゐるので、ボーリユー、コルリ兩軍を分斷するに甚だ都合な地位にあつたわけだ。殊に同盟軍にありふれた連絡の

不十分は、俊敏なナポレオンによつて看過される筈はない。同年四月ナポレオンは兩軍分斷に成功した後、ピエモンツ軍をその策源地たるトリノに追窮し、サルディニヤ王ヴィクトル・アマデウス三世をしてオーストリアとの同盟から脱退せしめた。オーストリア軍は餘儀なく退却して、パヴィヤ附近に集合した。さうして、オーストリア軍は今や孤立である。

一七九六年五月ナポレオンはロデイで有名な冒險的戰鬪を敢てした。ロデイはアツダ河——ポー河の支流——右岸に臨む小都會であるが、パヴィヤから東に退却してクレモナを目指しつゝあつた塊將ボーリユーは、八千の後衛を残してロデイの橋頭堡を守備せしめた。フランス軍の側から同處に通ずる道は唯一條のみで、その他は一面の沼澤であつたから、橋頭堡から猛射する敵彈の雨中を潜つて突撃しようとするナポレオンは非常の困難に遭遇した。しかもナポレオンは自ら軍旗を取りつゝ、突撃隊の殆んど先頭に立つて攻撃を開始し、或る時は沼澤中に陥つたこともあるが、毫も屈する色なく、たうとうロデイの橋を渡つてしまつた。將卒はナポレオンに對して「常勝將軍」の稱號を與へた。ロデイの戰鬪は小戰鬪に過ぎなかつたが、その收穫は豫想外に大きかつたやうだ。といふのは、ナポレオンはその後セント・ヘレナにおいて次のやうな告白を漏らしてゐたからである。「ロデイの戰鬪後予は始めて予が政略上の舞臺において大いなる役割を演じ得る自信をもつやうになつた。」

ロデイ戰鬪直後、即ちナポレオンの自信が高潮に達した五月十四日、ナポレオンは總裁政府から次のやうな意味の命令を受けた。「ナポレオンは今後イタリアにおける指揮權をケラーマン（ヴァルミーの砲擊者として有名な將軍）と共に分割し、ナポレオンがローマ、ネーブルス方面に活動の自由が許される代りに、ケラーマンにはポー河左岸における作戰の自由を與へよ。」然るにナポレオンは大膽にも次の言明をもつて總裁政府の要求を拒絶した。「予はこれまで何

人にも協議することなくして戦争を行つて来た。——戦争を行ふには人おのその流儀がある。將軍クラマンは予よりも経験に富んでゐるので、予以上に戦争を行ふであらう。けれども、若しわれら兩人が協同するとなれば、われらの作戦は甚だ拙劣なるものとなるであらう。」「予は信じてゐる、二人の良將を戴くよりも一人の愚將を戴く方がましであることを。」ナポレオンはさきにオーストリア軍司令官ボーリューとピエメント軍司令官コルリとの間に連絡がなかつた弱点を利用し、まづ兩軍を分断して一部の兵をもつてオーストリア軍を警戒せしめ、ナポレオン自ら主力を率ゐてピエメント軍の攻撃に成功し、然る後その主力をオーストリア側に轉じて勝利を獲ることができた。ナポレオンはかくの如く敵の兩軍を分断した後、常にわが主力を集中し、相對的優勢を保持する事によつて敵を各個に撃破する新戦法の成功を自覺してゐた。しかのみならず、今やロディイ戰勝後における前述程度の自信と將來に對する偉大なる豫想とを抱懷した際でもあつたので、結局總裁政府の命令にも反抗するやうになつたのである。總裁政府はサルディニヤとの休戦條約締結當時におけるナポレオンの獨斷に對して大に含むところがあつた折柄であつたから、ナポレオンのクラマン拒絶には頗る憤慨したのであるが、イタリア軍がナポレオンを信頼しきつてゐる事情を熟知してゐるので、ナポレオンからの辭職の威嚇に驚かされ、餘儀なくその要求を全く撤回した。總裁政府の權威は全く地に墜ちた。と同時にナポレオン獨裁の曙光はこの時既にあらはれてゐた。

イタリアにおけるナポレオンは軍將としての天才以外に偉大なる外交的手腕を發揮した。彼れはさきにサルディニヤ王國に對して非凡の外交的手腕を示したが、今やモデナ、パルマ兩侯を威嚇して和議を結び、兩侯國をして嚴正中立を守ることを約せしめた後、モデナから一萬フランの償金、パルマから二百萬フランの償金、さらに兩侯國から美術品を獲得した。ところでナポレオンは既にオーストリアの所屬であつたロンバルディア地方を既に獲得しをはつ

たので、進んでオーストリア軍をマントヴァ要塞に攻圍しようとした。といふのは、當時オーストリア軍の主力は既にアデーリジュ河の線に退却してゐたのであるが、若しナポレオンが一気にその方面を衝かうとすれば、マントヴァのオーストリア軍のために側面を撃たれる心配があつたからである。然るにマントヴァ要塞はなかなか堅固で容易に落ちる要塞でなかつた。ナポレオンは全力をマントヴァ攻圍に傾注してゐると、オーストリア側では要塞内の味方と連絡を取りつつ、解圍の計畫に熱中してゐた。ロディイ戰闘後の戰闘は殆んどマントヴァ要塞を中心としてゐたと見て差支ない。マントヴァ攻圍戰は一七九七年二月二日同要塞の陥落まで約八ヶ月間繼續したのであるが、その間におけるオーストリア軍の試みた四回の解圍運動とこれに對してナポレオンの取つた處置とは注目すべきものがある。

まづ塙將ウルクムゼル(ライン河方面から新たにイタリアに送られた將軍)の敢行した二回のマントヴァ解圍運動について述べよう。第一回目にウルクムゼルは軍を二分してガルダ湖の東西を通過せしめた後、合してマントヴァを救援しようとしたが、ナポレオン得意の各個撃破に會ひ、空しくチロールに引きあげた。第二回目に彼れはチロールを出てブレンタ河左岸のバッサノといふ處に達したが、そこでナポレオンのために撃破され、マントヴァ要塞のなかに追ひこめられてしまつた。次は塙將アルフィンツィーによつてなされた二回の解圍運動である。一七九六年十一月アルフィンツィーはブレンタ河の線にあつたフランス軍に向つて進撃し、マントヴァにあつたウルクムゼルも要塞からフランス軍の左側に出たので、ナポレオンの地位は甚だ危殆に瀕して来た。しかしながら、ナポレオンは十一月中旬アルコレにおける僥倖の勝利によつて危機を脱すると同時に、アルフィンツィーの救援運動を失敗にをはらしめることができた。翌年一月中旬アルフィンツィーは再び同じ運動を開始したが、ナポレオンはリヴォリにオーストリア軍を破り、アルフィンツィーの折角の目的を畫餅にをはらしめた。二月二日マントヴァ要塞は遂に陥落し、ウルクムゼルは

一萬六千の成兵と共にナポレオンの軍門に降り、イタリア戦役中の戦闘行為は殆んど終結に近づきつつあつた。さうして、同月九日ローマ法王ピウス六世との間にトレンチノ和約を結び、法王をして償金四千萬リーヴルと美術品とを提せしめ、イタリア戦役の目的はほぼ達成された。

ところでさきに述べておいたやうに、オーストリアに差し向けられたフランスの本軍は、全然カール大公のために翻弄されてしまつたので、ナポレオンはイタリアにおける目的を果した後、牽制軍たるイタリア軍を變じて本軍となし、ウィーンに迫るやうな氣勢を示した。オーストリア政府は大に驚き、ライン河方面にゐたカール大公を俄かにイタリア方面に派遣し、戦役をイタリアにおいて解決せしめようとした。そこでカール大公はピャヴェ河にまで殺到したけれども、珍らしくも作戦を誤り、同河畔でナポレオンのために破られ、次第に國境内に追ひつめられた。かくしてナポレオンは四月オーストリアとレオベンにおいて假條約を結び、十月これをカンボ・フォルミオの本條約としたのである。

### 第三章 エジプト遠征

ナポレオンはカンボ・フォルミオ條約後暫らくパリに滞在してゐたが、遂に一七九七年十二月五日正式にパリに凱旋した。

イタリアにおける十八回の戦勝、ナサルピナ、リグリア兩共和国の成立、イタリア諸國からの莫大な償金・美術品の獲得——それらの榮譽によつてナポレオンがパリ市民から非常な歓迎をうけたのは勿論である。然るに凱旋後僅かに半年ならずしてナポレオンをエジプト遠征の旅に向はしめたものはなにか。ナポレオンの功績に嫉妬を感じ、出征中におけるナポレオンの再三の獨斷的行爲に忿懣を感じてゐた總裁等は、表面は確かにナポレオンを歓迎する素振りをみせながら、内心は正反對の考をもつてゐた。従つてナポレオンが早くもパリを離れることの必要を認めたのは賢明である。のみならず、それは對英策のうへからみても必要なことであつた。ナポレオンの對英策は三つあつた。即ちその第一がエジプト遠征、その第二がイギリス侵入、その第三が大陸封鎖であつた。ナポレオンが第二策を最も重視したのは勿論であり、出来るならば最初から同策の實行に當つたであらうが、海權が全然イギリスの手中にあつた當時のことだから、餘儀なく彼れはこの策を斷念し、まづ第一策の實行を總裁政府に建言して早速その快諾を得た。

エジプト遠征の目的は、エジプト占領によつて、地中海の海權をフランスの掌中に獲得し、イギリスと印度との連絡を遮断するにあつた。この目的をもつてナポレオンがツローンを出發したのは一七九八年五月十九日、彼れによつ

て率ゐられた陸軍は三萬三千、艦船は途中からおひおひ集まつて来たものを加へて、戦艦十五隻、巡洋艦十四隻、小型軍艦若干、運送船三百餘隻、それらは提督ブルーイヤーによつて率ゐられた。なほその他エジプト研究の目的をもつて便乗してゐた學者の一隊の存在を見ることができない。ところで、ナポレオンが最初イギリス艦隊の警戒線外に活動ができたのは幸福であつた。當時イギリスにおいては自國への侵入がナポレオンによつて計畫されつつあることを信じ、フランスの新聞紙モニツールに屢々發表されたエジプト遠征に關する豫報に接しながら、この風聞はイギリス艦隊を地中海方面に牽制し、イギリス海峡の虚をついて、フランス軍がイギリスに上陸するための策略だと考へられてゐた。そこでイギリスの提督ネルソン（一七五八—一八〇五）は五月四日ジブラルタルから軍艦を出してフランス南海岸を偵察してみたが、フランス艦隊出動の模様がなことを見届けたものか、そのまま引き上げてしまつた。ナポレオンの出動は幸運にも丁度その虚をついたことになつたのであり、彼れは皆くネルソンの目をかすめて六月九日にマルタ島に到着することができた。その後僅かに數日にしてナポレオンは同島を占有してゐたセント・ジョン騎士團を降服せしめ、守備兵三千を残して同島を去り、エジプトへ向つたのは同月十八日であつた。

さてナポレオンはクリト島の南岸を経て六月三十日にアブーキル灣に到着することができた。——アブーキルはアレクサンドリアの東四五里の處——この間におけるネルソンの動靜はどうかと見るに、彼れはナポレオンのツーロ出發の報を得てから大艦隊（戦艦のみでも十三隻）を率ゐてフランス艦隊の追跡に向つた。彼れはフランス艦隊がシリ島へ行つたものと誤想し、同島を搜索してみたが、敵の碇泊した痕跡を認めず、さてこそとばかり大急行アレクサンドリアに到着したのが六月二十九日である。しかしながら、彼れはそこでも敵の隻影を見ることなく、今度はナポレオンがシリヤ方面に行つたものと早合點して、倉皇同方面をさして急行した。ナポレオンがその翌日遅れてアブ

ーキルに到着したのは實に僥倖といはねばならぬ。

ナポレオンはやがてアレクサンドリアを占領し、カイロに向つて前進した。當時エジプトは名義上トルコの統治下にあつた筈だが、事實上それはカイロを首都とするマメリューク騎兵によつて支配されてゐた。

【註】マメリュークといふのは、元來エジプト貴族がコーカサス地方から獲た奴隸をもつて組織した騎兵隊のことであるが、彼等はその後次第に勢力を得て、遂にカイロにおいてエジプトの支配權を掌握するやうになつた。

今やマメリューク騎兵の隊長ムラッドは五千人の部下を率ゐてカイロ附近のエンバベーに陣し、その左翼をピラミッドに依托しながらナポレオン軍を待ちつつあつた。かくして七月二十一日「ピラミッドの戦」といふ名前で人口に膾炙してゐるエンバベーの戦が兩軍によつて戦はれたのである。ナポレオンはマメリューク騎兵の突撃力を封ずるために、味方の五個師團で大方陣をつくり、それを鱗次形に配置して、その内部に騎兵、側面に砲兵を配置した。それから、「兵士等よ！ピラミッドの頂上から四千年の歴史は汝等を俯瞰してゐる」といふナポレオンから兵士等への劇的訓示があつた後に、所謂ピラミットの戦が行はれ、フランス軍の見事な勝利となり、カイロはナポレオンの掌中に落ちた。

陸に赫々の名聲を揚げたナポレオンはやがて海に悲惨な戦敗を経験しなければならなかつた。さきにシリヤ海岸まで急行したネルソン艦隊は、間もなく引返してクリト島でフランス艦隊の動靜を知り、八月一日ブルーイヤーの率ゐたフランス艦隊をアブーキル灣に襲うて殆んど殲滅した。（この戦をナイル河の戦とも呼ぶ）フランス艦隊のうち僅かに虎口を脱したのは戦艦二隻と巡洋艦一隻のみであつた。ナポレオンは今や殆んど完全に本國との連絡を遮斷され、即ち

文字通り孤立無援の状態において内心非常な苦痛を感じてゐたに違ひない。しかしながら、ナポレオンの眞價は常に逆境時代にあらはれて来る。この間においてすら彼れは表面縛々たる餘裕を見せつつ八月二十二日「エジプト學會」をカイロに創立し、數學者たるモンヂュを會長とし、彼自身その副會長となつた。エジプト學會は、(一)數學(二)物理學(三)經濟學(四)文學美術の四部にわかれてゐた。この學會設立の結果、會長モンヂュ等の研究によつてナイル河氾濫の現象が確められ、或はジョマールによつてエジプト象形文字の秘密が發かれさうにもなつた。以上のやうに、後世から見ても甚だ有益な純學術的研究の効果もあつたのであるが、ナポレオンが同學會を設置した直接の動機は、勿論孤立無援の状態における目前の窮乏を救ふためであつた。即ちナポレオンがエジプト學會に對してまづ要求したものは「麵麩燒竈の發明」「麥酒釀造に要するホップの代用品」「ナイル河の水を淨化する方法」「風車と水車の利害」「火器火藥」の製作等であつた。とにかく、エジプトの逆境時代における以上の經驗は、後來大陸封鎖の場合においてナポレオンが試みた新産業の計畫に對して、貴重な前提となつたことを考へなければならぬ。

ナポレオンがカイロで實施した靜的事業の他の一つの理由は、不活動が兵士等に與へる惡影響を防止するためであつた。兎角するうちに、半歳の時日が経過した。然るにナポレオンはトルコ軍來襲の報を得て、シリヤ遠征を思ひ立ち、翌一七九九年二月二十四日パレスチナに侵入してガザを陥れ、三月七日にはさらにヤッファを陥れた。ナポレオンは同月十九日からアッコンの攻圍に従事した。アッコン城内にはトルコ側の勇將ヂェツザール・パシヤの決死の防戦があり、彼れの援助者としてフランスの脱走貴族ビカール・ド・フェリツポールといふのが控へ、(フェリツポールはブリエンヌ幼年學校ではナポレオンと同窓であつたが、今や技術將校として非凡の才能を示した)ネルソンの交代者としてイギリス艦隊の提督となつたシドニー・スミスは、糧食・大砲・水兵を貸與してアッコン城を援助した。ナポレオンは全力をつくして攻城を續行したにも拘らず、このアッコン城を落すことができないで、三月二十日つひに圍を解いて退却した。さうして、彼れがカイロに歸着したのは六月十四日である。アッコン城攻圍の失敗は、ナポレオンの兵士五千餘を損耗したばかりでなく、ナポレオンに異常な精神的打撃を與へた。アブーキルの戦敗とアッコンの失敗とは、實に常勝將軍に對する二つの大きな黒星であつた。



## 第四章 一八〇〇年の對奥戦役

統領時代のナポレオンの意思は大體において平和に傾いてゐた。帝位獲得への準備として榮譽ある平和事業の完成を熱望してゐたからである。しかしながら、彼れにとつては戦争も必要であつた。エジプト遠征で大きな黒星を取つた彼れとしては、その失敗の恥辱を雪ぎ人氣を回復するために、少なくとも一回の戦勝を必要とした。また第二回同盟戦争の繼續がオーストリアとの間に見られ、殊にエジプト遠征中失はれたチサルピナ共和國を回復する必要に迫られてゐた際でもあつたので、ナポレオンとしては彼れを信頼してゐる國民に對する面目上からもオーストリア戦役を華々しく解決すべき義務を感じてゐた。然るに外交家として既に熟練してゐたナポレオンは、彼自身が平和破壊者でなく戦争を愛好するのは寧ろ同盟側であることを思はしめるために、一七九九年十二月二十五日の同一日附をもつ二つの書狀をイギリス王ジョージ三世とオーストリア皇帝フランツ二世との許に送つて平和を要求したところが、その申込は豫期どほり拒絶された。ナポレオンはここに堂々と對オーストリア戦役開始の口實を得た。それは確かにナポレオンの思ふ壺であつたが、なほ彼れにとつて見逃がすべからざる幸福は、ロシア皇帝ポール一世が第二回對佛同盟から脱退したことであつた。

さてナポレオン出陣以前の佛奥兩軍の形勢はどうか。當時イタリア方面において、マッセナ麾下のフランス軍三萬はジエノアとサヴォナ附近に、シニエーの軍はヴァル河附近にあり、メラスの率ゐるオーストリア軍八萬と對峙し

てゐた。オーストリア本國に對して、モロー指揮下のフランス軍十二萬は、<sup>〔註〕</sup>將軍クライの指導下にライン河の彼方スワビヤ方面に備へてゐた。

〔註〕 オーストリア軍は最初天才カール大公によつて指揮されてゐたのであるが、大公が宰相ツィーグートと衝突して辭職した後凡將クライがこれに代つたのはオーストリアのため甚だ遺憾なことである。

ところで、ナポレオンは既に將軍ベルチエを簡拔して、豫備軍約五萬を編成してゐたが、果してこれをイタリア、スワビヤのいづれの方面に派遣しようとしたか。彼れは勿論スワビヤ方面を考へてゐた。彼れの戦術方針は、ベルチエの率ゐる豫備軍をモローの軍と合併して奥將クライの軍よりも遙かに優勢とし、兩軍をしてシャッフハウゼン附近においてライン河を渡らしめ、奥軍の左側面及び背後を襲うてこれをライン河に壓迫して殲滅せしめた後、一舉にウイーンを衝かしめようといふのであつた。然るにモローは總裁政府の命をうけて出陣してゐたのであり、またナポレオンに信服してゐなかつたので、斷然ナポレオンの指揮下に立つことに反對した。當時ナポレオンは前記の計畫を飽くまでモローに強制する力がなく、さりとて兩軍の指揮權をモローに與へて初志貫徹する見込もなかつたので、氣の毒にも彼れの豫定戦術は畫餅に歸した。そこで彼れは餘儀なくモローの率ゐる十二萬人の運動をモローの自由に委し、全然戦術を一變してイタリアへ向ふことに決意した。一七九六年におけるオーストリアとの戦争の場合、モローの軍がライン河方面において本軍として活動し、ナポレオン軍は牽制軍としてイタリアに派遣されたが、今またそれと殆んど同轍を踏むことを餘儀なくされたのは、不思議な運命といはねばならぬ。ナポレオンはさきのイタリア出征においてはニスから海岸の平地を通つて進入したが、今度は直ちにポー河の盆地に出動する考であつたので、結局

大サン・ベルナルド峠を越えることになった。なんとすれば、この峠はアルプス山脈を通ずる諸峠中最も安楽な峠であつたからである。

ナポレオンは五月二十日大サン・ベルナルド峠の頂上を越えた。オーストリア軍の配置はどうかといふに、一萬二千はニース附近、主力である二萬五千はジェノアに籠城したフランスのマツセナ軍と對峙し、その他數千人づつを五六個處に分散し、別にシンプロン、サン・ゴタルドの兩峠の防備のため合計八千の兵を割いてゐた。オーストリア軍分散の形勢を見極めたナポレオンは、最初ジェノアのマツセナを救援する豫定であつたが、五月二十六日の夕刻イヴレヤに到着した時、俄かに豫定を變更してミラノに入府した。その理由はジェノアの守備をマツセナの獨力に任せ、ナポレオンはメラスの背後にあつてオーストリア軍の退却線を遮断し、メラスをして降服の餘儀なきに至らしめようとするにあつたらしい。然るにナポレオンの戦略變更の犠牲となつたマツセナはそれまで繼續した不屈不撓の抵抗にも拘らず、今や糧食殆んど盡き、當時ナポレオン軍がミラノ附近に到着してゐたことを少しも知らなかつたために、六月四日名譽の開城を餘儀なくされ、士卒と共に本國に歸還することになつた。だが、ジェノア落城の報知はなかなかナポレオンの許に傳はらず、八日になつてナポレオンはやうやくその事實を知ることができた。ナポレオンは翌日の午後ミラノを去り、バヴィヤに到着、直ちに本營をストラデルラといふ處に移した。そこで彼れは早速一大幸運に遭遇した。彼れがさきにエジプトからの歸還を命じてゐた將軍ドセーが折よく十一日の早朝にこのストラデルラに來着したことがそれである。ナポレオンは喜んでドセーに二個師團の指揮を命じた。ところが、ナポレオン軍は珍らしくも各地に分散してゐた。即ち二萬餘の軍は比較的遠隔の地にあり、ナポレオンの手近に残された軍は僅かに二萬八千に過ぎなかつた。さうして、この二萬八千の軍隊はドセー、ランヌ、ミュラー、ヴィクトルによつて各個に率ゐら

れてゐた。オーストリア軍の動靜をみるに、メラスはトリノから轉じてアレツサンドリヤ附近に集中しつゝあつた。ナポレオンはメラスがジェノア方面に退路を求めつつあるものと判断し、これを遮断する目的をもつてドセーをノヴィ方面に送つた。このやうに一八〇〇年戦役におけるナポレオンは、わが軍を集中して敵の主力軍と決戦する戦略を棄て、どうしたものか、軍を分散し勝ちであつた。彼れの部將マルモンはこれに對して次のやうな適切な評を下してゐる。「ナポレオンは從來の慣例に背き、敵を撃破するに先だち、その連絡線を遮断することによつて、敵を捕獲しようとなつた。が、それよりも敵を撃破する手段を講ずるのが一層賢明であつたらう」かくしてナポレオンはマレンゴに向つて前進し、部將ヴィクトルに一萬二千の兵を授けて同處を占領せしめた。

六月十四日のマレンゴの戦は以上の状況の下に闘はれた。同日早朝からオーストリア軍はマレンゴの野にヴィクトルの軍を攻撃した。ランヌ、ミュラー等はヴィクトルを援助したけれども、敵は四萬に近い多數であつたので、フランス軍の抵抗も及ばず、午後一時頃になるとヴィクトル等の全軍は遂に敗走した。然るに塊將メラスは七十歳の老齡であり午前中の戦鬪に輕傷さへ負うてゐたので、意外の勝利に満足して自らフランス軍を追撃する氣力なく、軍の指揮を參謀長フォン・ツァッハに委任した後、悠々アレツサンドリヤに歸還した。フォン・ツァッハは全軍の主力を一大縱隊としてフランス軍の跡を慕ひ、午後五時頃サン・ギウリヤノといふ處(マレンゴの東方約三里)にさしかかつた。然るに丁度この時新手のドセーがそこに到着したのは幸である。彼れはさきにノヴィ方面へ派遣されたのだが、その後ナポレオンからの急使に接し、踵をかへしてマレンゴを目指して急行する途中、サン・ギウリヤノで偶然オーストリア軍に遭遇したわけだ。ナポレオンはマルモンとケラーマンに命じてドセーを援助せしめた。ドセーはその全師團をもつて敵の先頭を攻撃し、ケラーマンの騎兵隊は敵の左側面を襲撃した。彼等兩雄の協力により、遂にオーストリ

ヤ軍を總敗北にはらしめたのは大出来だったが、ドセーが敵弾に中つて戦死したのは氣の毒である。マレンゴの勝利はナポレオンにとつて全くの僥倖であつた。有名な兵學者ジョミニが「不思議もマレンゴの戦は全體においてナポレオンの原則に違反した戦闘であつた」と批評してゐるやうに、ナポレオンが從來の集中戦略を棄てて過度に兵力を分散したのは確かに失敗であり、ドセーの來着とその奮闘によつて結局の勝利を得たのは寧ろ偶然といふべきである。マレンゴ戦勝の翌日ナポレオンはメラスとアレツサンドリヤの協商を結び、ミンチオ河をもつて佛墺兩國勢力の境界とした。その後ナポレオンは暫らくミラノに滞在してゐたが、パリに陰謀の起りさうな噂を聞き、七月初めパリに凱旋した。

一方ライン河方面にオーストリア軍（その後ヨハン大公がクライに代つて司令官となつた）と對抗してゐたモローは、六月中に一旦オーストリア側と休戦條約を結んだが、その後再び開戦となり、十二月一日日没の頃バヴァリアのホーエンリンデンで見事オーストリア軍を粉碎した。ホーエンリンデンにおけるモローの戦勝はナポレオンの嫉妬に値した程度のものであり、マレンゴにおけるドセーの功績に比較される。然るにゴツチャルクが「かの顯著なる二大戦勝の獲得は、死せるドセーと生けるモローとであつたにも拘らず、ボナパルトはあらゆる光榮の焦點であつた」と批評したやうに、それらによつてナポレオンの獲得した榮譽は僥倖に過ぎなかつた。

ホーエンリンデンの勝利は佛墺平和條約成立の動機となり、一八〇一年二月九日兩國は遂にリニエヴィール條約を締結した。この條約はさきのカンポ・フォルミオ條約の擴大であつた。即ちフランスはこれによつてライン左岸の土地の領有を確實にし、まだオーストリアをしてバタヴィヤ、チサルピナ、リグリヤ、ヘルヴェチヤ諸共和國の成立を承認せしめ、イタリヤにおいては依然としてヴェネチヤをオーストリアに許したけれども、オーストリアの親族であ

るトスカナ、モデナ兩國の地をチサルピナ共和國に合併し、兩公國をしてその代償をドイツ方面に求めさせることにしたのである。

## 第五章 トラファアルガルの海戦

アミヤン條約後における英佛の平和の繼續期間は僅かに一年數ヶ月に過ぎず、一八〇三年五月兩國の間には再び開戦をみるに至つた。さうして開戦の主動者はイギリスであつた。アミヤン條約の失敗が暴露すると、イギリス人は盛んにアッディントン内閣の外交を攻撃した。そのため同内閣が大に反省した結果であらう、アミヤンで約束したマルタ島からの撤兵を肯じなかつた。それが兩國開戦の理由だつた。ナポレオンは取り敢へずイギリスに酬いるために將軍モルチエを遣はし、英領ハノヴァを占領せしめたが、そんなことでイギリスを屈服させる見込はないので、時機少しく尙早であつたが、餘儀なくイギリス侵入計畫の實行を決意した。しかしながら、海軍力に自信をもたなかつたナポレオンは、堂々とイギリス海峡の海權を制して侵入目的を果さうといふ定石を勿論踏むことができなかった。そこで彼れの唯一の策はイギリスの主力艦隊を海峡以外に牽制し、その餘裕に乗じてイギリスに上陸すべき兵士を船に載せて送らうといふのである。が、當時はまだ帆船時代であり、汽船時代ではなかつたので、大型帆船に依頼しようとするなら、海峡の通過はただ風次第である。ナポレオンは勢ひ風に無關係な小型の漕船に依頼することを餘儀なくされた。かくして、彼れは密かに約二千の小舟をエターブル、ブーロニユ、ヴィムルー、アンブルチューズアンブルチューズの四港に集中し、それらの場所にマンモン、ネー、ダヴー等の率ゐる約十五萬を送つた。

當時フランスの艦隊はブレスト、ローシユフォール、ツーロンの三軍港にあつた。ナポレオンは屢々それらの艦隊をもつてイギリス艦隊を牽制してから豫てブーロニユその他の港附近に集中しておいた陸軍をイギリスへ送らうといふ計畫をたてたが、一八〇四年(ナポレオン帝位獲得の前月)以降になると、彼れの計畫はいよいよ眞剣味を加へざるを得なかつた。なんとなれば、その月イギリスにおいてはアッディントン内閣が瓦解して、再びピット内閣の成立となり、ピットの努力によつて翌一八〇五年四月十一日に英露同盟の締結をみたからである。(同年七月七日オーストリアが加盟した。第三回對佛同盟これである) ところで、これより先きナポレオンに對しても一つの幸運が微笑んでゐた。一八〇四年十二月十二日イスパニヤがイギリスに向つて開戦を宣言し、さうして翌年一月五日にフランスと同盟した結果、ナポレオンはイスパニヤ艦隊を利用することを許されたからである。ナポレオンはたうとうイギリス侵入計畫の斷行に着手した。そのため彼れは一八〇五年三月二日の日付をもつてブレスト艦隊司令長官ガントームとツーロン艦隊司令長官ヴィルヌーヴ(一七六三—一八〇六)に次の命令を發した。それによると、ガントームはブレストを出てブーロニユに至り、そこでイスパニヤ艦隊並びに一部のフランス艦隊を合併して西印度諸島中の一島マルチニックへ行き、ヴィルヌーヴはツーロンからカディスへ赴き、そこでイスパニヤの主力艦隊を合併した後マルチニックに至り、兩提督は同處で合同した後全速力をもつてイギリス海峡に引返し、ブーロニユ方面の小船隊を掩護すべき重大な任務を與へられたことがわかる。

ところで、ブレストは不幸にしてコリンウッドの率ゐるイギリス艦隊のために封鎖され、ガントームの出勤は不可能となつたので、われらの注意はヴィルヌーヴの一舉手一投足の上に集中する。ヴィルヌーヴは三月三十日ツーロンを出發して豫定の如くカディスでイスパニヤ艦隊と合同、五月十四日マルチニック島に到着した。一方ネルソンに率ゐられたイギリス艦隊は、アメリカ方面の植民地を氣にする關係から、これもナポレオンの見込通りにヴィルヌーヴの

足跡を慕つて早速西印度方面に急行した。しかしながら、ヴィルヌーヴは幸にしてネルソンとの遭遇を免れて早く歸還し、(七月二十二日) プレスト、フェロールの兩艦隊と合同しようとしたが、プレスト艦隊との合同は困難であつたので、それよりも容易なフェロールに注目し、同港を封鎖しつつあつたイギリス側のカルダーの目を掠めて、数日の後にコルーニャの港に入り、フェロール艦隊と合同することができた。さうして、ヴィルヌーヴ麾下の艦隊は今や二十九の隻数を算ふるに至り、プレストにあるガントームの率ゐる艦隊は二十一隻であつた。それらの艦隊に對するイギリス側をみるに、プレストを封鎖しつつあるコリンウッドの艦隊は三十五隻、フェロールの沖にあるカルダーの艦隊は十五隻だつた。即ちこの方面におけるフランス、イスパニヤ兩國聯合艦隊とイギリス艦隊とは五十隻對五十隻の同數だつた。しかしながら、イギリス海軍の優越を先天的に確信するヴィルヌーヴが、同數の敵を前にしてプレスト救援の決斷性をもち得なかつたのは、寧ろ當然であるやうに思はれる。

さてヴィルヌーヴのコルーニャ入港に氣をよくしたナポレオンは、時機到來の確信に満たされつつ、八月三日ブローニユに到着した。さうして、彼れはヴィルヌーヴへはプレスト行の命令を頻りに送りながら、イギリス上陸を期待し、「われをして六時間<sup>〔註〕</sup>だけでもイギリス海峽を制せしめよ、然らばわれらは世界の霸王となるであらう」と壯語してゐた。

〔註〕 六時間といふ説のほか、八時間、十二時間、五六日などの諸説があるけれども、そのいづれが正しいかを斷定する必要はないやうだ。ナポレオンがその時その時の氣分によつてさういつたと見て差支ない。が、六時間といふのは海峽通過の所要時間の最少限度であるらしいだけに一層興味をひく。

それはナポレオンの大言壯語らしくみえるが、實は彼れの謙讓の語であつたと解される。なんとすれば、そこには確實に且つ永續的に海權を制さうとするナポレオンの考が少しも見出されぬからである。かくの如くイギリス海軍との正々堂々の對抗を不可能とし、常にネルソンの目を掠めて活動することを常套策としたナポレオンの部下たるヴィルヌーヴ、殊にアプーキルの海戦においては數隻の艦船を抱へてネルソンの手から脱出したといふ點でナポレオンの記憶にとまつてゐたヴィルヌーヴに對して、ナポレオンの以上の命令は根本的に無理なのであつたらう。就中プレスト、フェロール兩方面における彼我の艦數が相伯仲してゐたとしても、ヴィルヌーヴの歸還後間もなく西印度からその跡を追つて來たネルソンが何時何處から襲來するかも知れぬといふ不安な豫想を加へてみれば、ヴィルヌーヴがナポレオンの命令通りに動かなかつたのは當然であつたやうにも思はれる。そこで彼れは一旦はプレストへ向ふ積りでフェロールを出たが、忽ちにしてこれを斷念し、却つてイギリスを遠ざかりつつ遂にカチスの港に投錨した。彼れはそこで數隻のイスパニヤ軍艦を新たに味方とし、三十餘隻の軍艦を擁してゐたけれども、カチス出動を督促するナポレオンの命令を實行する決心がつかないで、コリンウッドとカルダーとの率ゐるイギリス艦隊の封鎖を蒙つたまま在再として日を送るうちに、ネルソンはカチス封鎖艦隊司令長官の命をうけ(この時カルダーはさきのフェロールの失敗が祟つて召還された)九月二十八日に着任した。

以上によつてナポレオンが海峽突破の壯舉を斷念することを餘儀なくされた事情は大體説明されたのであるが、しかしながら彼れがこれを斷念してブローニユ方面においた全軍を忽然としてウルクムへ急行せしめたについては、さらに別個の理由がなければならぬ。が、その説明は次節に譲ることとし、ここではウルクム落城の翌日即ち十月二十一日のトラファルガル海戦のみを述べることにしよう。ヴィルヌーヴは彼れがカチスを出ないために、彼れの後任と

してナポレオンが提督ロシリを派遣したといふ報知を、十月十九日に得た時はじめて出動を決心した。さうしてその結果帆船時代の最後の大海戦として有名な、否あらゆる時代を通じた世界的大海戦として有名なトラファルガル海戦が闘はれることになった。

一八〇五年十月二十一日の曉天、聯合艦隊とイギリス艦隊とは遂にトラファルガルの沖に相會した。前者の隻數三十三、後者のそれは二十七、まづ五角の態勢である。聯合艦隊はイスパニヤの提督グラヴィナの率ゐる十二隻とヴィルヌーヴの率ゐる二十一隻とが單縱陣を形成して東方にあらはれた。戦は正午頃に開始され、午後一時半頃にをはずつた。ネルソンは二艦隊を平行するやうに區分し、自らその一を率ゐ、コリンウッドをして他の一を率ゐしめ、西方から直角に敵の單縱陣を目掛けて突入する大膽な戦術を取つた。「イギリスは各員がその義務を盡くさんことを期待する」といふ有名な信號の掲げられたのはこの時である。風速は極めて微弱、僅かに三節（後には一節半となる）の速力を與へる程度の風に過ぎなかつたが、風向は西北西であつたためにネルソンは風上の利益を占め、比較的艦の動搖なく精確な射撃をすることができた。が、一方においてイギリス側は舷側砲を使用し得ない不便と敵の凹陣から挾撃される恐れとがなかつた。イギリス側の不利は聯合側の利益であるが、聯合側には艦の側面を風が吹きたてるので、イギリス側に比して射撃の不精確を免れなかつた缺點がある。また當時の大砲の射距離は精々千二百碼以内であり、發火は火繩による時代であつたから、ネルソンが大膽な突入を敢行しても損害は比較的少なかつた。ネルソンはやがて敵艦に肉迫し、みるみる悪戦苦闘は演ぜられたが、結局イギリスの大勝利にをはり、聯合側ではフランス艦隊十一隻がカチスに退却した以外は、或は撃沈され或は捕獲された。さうして、ヴィルヌーヴは捕虜となつた。（彼れはその翌年イギリスから釋放されたが、恥ぢて自殺してしまつた）しかしながら、戦勝のイギリス側もその日からネルソンを永遠に失つてしまつた。敵弾に命中して死の直前に「神に感謝す、予は予の義務を完了した」と叫んだネルソンの言葉のうちには、提督としてその日の義務を果したといふ満足以外に、ナポレオンのイギリス侵入計畫を根底的に破壊すべき重大なる責任を全うしたといふ愉快の情が混入してゐたに違ひない。

ナポレオンのイギリス侵入策はトラファルガル海戦の失敗のために永久に覆つた。さうしてさきに述べて置いたやうに、その根本原因は、彼れが海權を獲得してゐなかつた點、彼れが積極的<sup>に</sup>海權獲得に努力するよりも、消極的に短時間敵の目を掠めてイギリス海峡を制壓しようといふ程度の計畫に甘んじてゐた點、従つてヴィルヌーヴも當然ネルソンを恐れて、乾坤一擲の大決戦を敢行する決斷性をもち得なかつた點に存する。

## 第六章 ウルムの包圍

一八〇五年七月七日オーストリアが英露同盟(同年四月十一日成立)に参加した時に所謂第三回對佛同盟が完成したわけである。いづれにしても、塙露兩國の提携がナポレオンに相當の威嚇を興へたのは事實であるが、さらに彼れに對して大きな不安を興へたのはプロシヤの態度である。バーゼル條約以來久しく中立を固持して來たプロシヤが若しも塙露兩國の誘致をうけてフランスを敵とするやうになるなら、それこそナポレオンにとつての由々しい大事である。そこで、ナポレオンはさきに占領したハノヴァを餌として辛うじてプロシヤの中立を喰ひとめることができた。しかしながら、露塙間の協同作戰は七月十六日における兩國協約の結果として成熟し、八月二十日プロシヤの第一軍はプロイデイを、第二軍はブレスト・リトウスクを出發してドイツ方面に進軍して、オーストリア軍と協同する豫定になつた。オーストリア軍はカール大公の作戰に基づき、イタリア方面に主力を注いで該方當並びにチロール方面に十數萬を送つて大公親らこれを指揮し、別軍をバヴァリアに送つてフェルダイナンド大公をその指揮官としたが、實權は參謀總長マツクの手に握られてゐた。

ナポレオンがイギリス侵入を斷念した理由は、前述したやうに、ヴィルヌーヴの緩漫な態度のためであつたのは勿論だが一方においては、塙露軍の聯合を恐れた結果であると思ふ。即ち彼れは露軍の來着以前にまづ迅速に塙軍に大打撃を興へるのを必要と考へたのである。一八〇五年戰役におけるナポレオンの作戰は、一八〇〇年戰役に對する彼の最初の作戰(これはモローの反抗によつて實行されなかつた。さうして彼れは餘儀なくイタリアに主力を注ぐことにした)と殆んど同様であつて、ドイツを主としイタリアを従とするものであり、カール大公の作戰と正反對であつた。もつと具體的にいへば、ナポレオンはイタリア方面をマツセナの率ゐる五萬の兵に依頼し、オーストリアに對して約二十二萬の精銳を送る考であつた。そこでプロローニウ方面に派遣されてゐた軍の全部並びにその他の軍は、八月二十九日次のやうに區分された。即ちベルナドットの率ゐる第一軍團(一萬八千)、マルモンの率ゐる第二軍團(二萬一千)、ダヴーの率ゐる第三軍團(二萬七千)、スールの率ゐる第四軍團(四萬一千)、ランヌの率ゐる第五軍團(一萬八千)、ネーの率ゐる第六軍團(二萬四千)、近衛軍六千人、ミュラーの騎兵集團(三萬二千)、南ドイツ諸國の援軍(二萬八千)並びに總豫備隊として編成中のオージューローによつて率ゐられる筈の第七軍團(二萬四千)がそれで、兵數の總計は二十一萬九千人に達してゐた。兵數が多數であつたばかりでなく、全軍の人的素質は優良を極めてゐた。

【註】軍團長八人のうち、四十歳以上は僅かにオージューローとベルナドットの二人、スール、ランヌ、ネーの三人はナポレオンと同歳の三十六歳、ダヴーは三十五歳、ミュラーは三十四歳、マルモンの如きは僅かに三十一歳だつた。彼等はいづれも若くて經驗に富む良將だつた。兵卒についてみると當時の指揮官の一人が言つたやうに、彼等は「殆んど想像を許さぬ程度の優良なる教練をうけてゐた。」ナポレオンが後にセント・ヘレナで一八〇五年の軍を「未だ曾つてなかつた優良軍である」といつたのに無理はない。

ナポレオンはまづミュラーの騎兵集團を送つて敵情地形を觀察せしめた。ミュラーがストラスブルグにおいて認め

た九月十日發の報告によつて、ナポレオンは露軍の現在位置がガリチャ國境にあり、塙軍はまだイン河を越えてゐな

いことを知り、各軍團に向つて九月二十五日を期してライン河を渡河すべきことを命じた。九月二十日ナポレオンはウルムにオーストリア軍が接近しつつあることを通報した十八日發のミュラーの書簡をパリで受けた。かくして、ナポレオンは九月二十四日パリを出發、二十六日ストラスブルグに到着した。二十八日同處においてナポレオンが總參謀長ベルチエをして傳達せしめた諸軍團への命令によつて判断すれば、ナポレオンの戦略は、ウルム以東のドナウ河の線を同河畔のインゴルスタット、ノイブルグ、ドナウウエルト、その他の地點において突破し、墺國と本國との連絡を遮断しようとする大迂回運動に力點が置かれてゐた。ところで、ナポレオンのこの計畫の成功は、勿論ミュラーの貴重な報告と並びに軍隊の非凡な行動とによつたのであるが、一方においては敵側の事情にも原因してゐたのである。即ち墺將マックがナポレオンの計畫に對して全然無知で、佛軍の接近を知つたのが十月五日であつたといふやうなことがその一つ、第二は露軍の動靜である。ナポレオンの最も恐れてゐたものは、露軍と墺軍との合併であつたのであるが、幸にしてそれは杞憂にはつた。クツゾフによつて率ゐられた露軍は、その後イン河石岸のブラウナウ附近に集中しつつあつたのであるが、墺軍との連絡はなく、勿論佛軍の運動を知る筈はなかつた。

以上の事情は當然ナポレオンをしてウルムの墺軍とブラウナウの露軍とに向ひ、所謂「各個撃破」の戦略を取らしめた。しかしながら、ナポレオンは萬一クツゾフが進出してマックと合同するやうな舉に出るかも知れないことを恐れ、自ら進んでドナウ河を渡り、ウルムとブラウナウとの丁度中間にあるミュンヘンに突入して、そこにダヴー、ベルナドット、マルモンの三軍團を擁しつつ、クツゾフの萬一の來援に備へる策を取り、さうして一方においてはネー、ランヌの二軍團並びにミュラーの騎兵集團をしてウルムのマック軍を包圍せしめた。ウルム包圍に直接最も多くの努力をしたのはネーの第六軍團であつた。ところで、メンミンゲンにある墺軍の倉庫は佛軍に占領されて、ウルム城中の食糧は盡き、また、かうした狀況に對して全然無知なブラウナウ方面からの露軍の來援を期待する見込もなかつたので、十月二十日午後三時マックは約三萬の兵士と共にナポレオンの軍門に降伏した。これが有名なウルムの包圍である。實際それはナポレオンが「予は行軍のみによつてオーストリア軍を破壊した」といつたやうに、また彼れの兵士等が「われらの皇帝は新戦法を發見した。彼れはわれらの兵器を用ひることなく、われらの脛によつて戰つた」といつたやうに、フランス軍の神速微妙を極めた行軍の成果であつた。



## 第七章 アウステルリッツの會戦

ウルム包圍の成功はアウステルリッツ戦勝の母胎であつた。ナポレオンは機動の敏速精妙により、マツクとクツゾフとの率ゐた塊露兩軍に結合の餘裕を與へることなしに、ウルムの戦勝を得たのであるが、それと同一戦法はアウステルリッツ戦闘まで繼續してゐる。ナポレオンにとつて恐るべきことは、ブラウナウから退去したクツゾフのロシア第一軍と新たに進入して來たブックスヘーウデンの第二軍とウィーン方面にあるオーストリア軍との合同であつた。殊に彼れはウルム以後皇帝フランツの命によりイタリア方面を引きあげて露軍に参加しようとしつつあるカール大公の事を恐れた。そこで彼れはカール大公軍に備へるために、ネーをインスブルックへ、マルモンをレオベンへ送り、僅かにダヴー、スール、ランヌの三軍團とミュラーの騎兵集團とをもつて、逸早くクツゾフ軍を追撃して打撃を與へ、これによつてオーストリアとの和約を決定しようといふ計畫を立てた。

然るにクツゾフの退却は意外に敏速で、ブラウナウを棄てた彼れは、ドナウ河の右岸を東に向つて退却したが、防衛的價値のないウィーンを顧みないで、マウテルンといふ處でドナウ河を渡り、對岸のクレムスに達した。蓋し彼れの意は本國からの友軍とオルミュッツ附近で合體するためであつた。ナポレオンはミュラーに命じて、クツゾフの退路を遮断せしめようとしたが、クツゾフの智謀は能くその難を免れ、彼れは遂にオルミュッツまで落ちのび、豫定どほりそこでブックスヘーウデンの第二軍と合することができた。この時オルミュッツには露帝アレクサンドル

一世が來着し、また近くウィーンを脱退した塊帝フランツ二世も軍を率ゐて參加したので、聯合軍は甚だ優勢になつた。一方ナポレオンはブリュンへ向ふ途中、右側背のハンガリー方面に備へるために、ダヴーをプレスブルグへ派遣し、その缺を補ふためにベルナドットに來援を命ずる急使を送つた後、十一月二十日遂にブリュンに到着した。

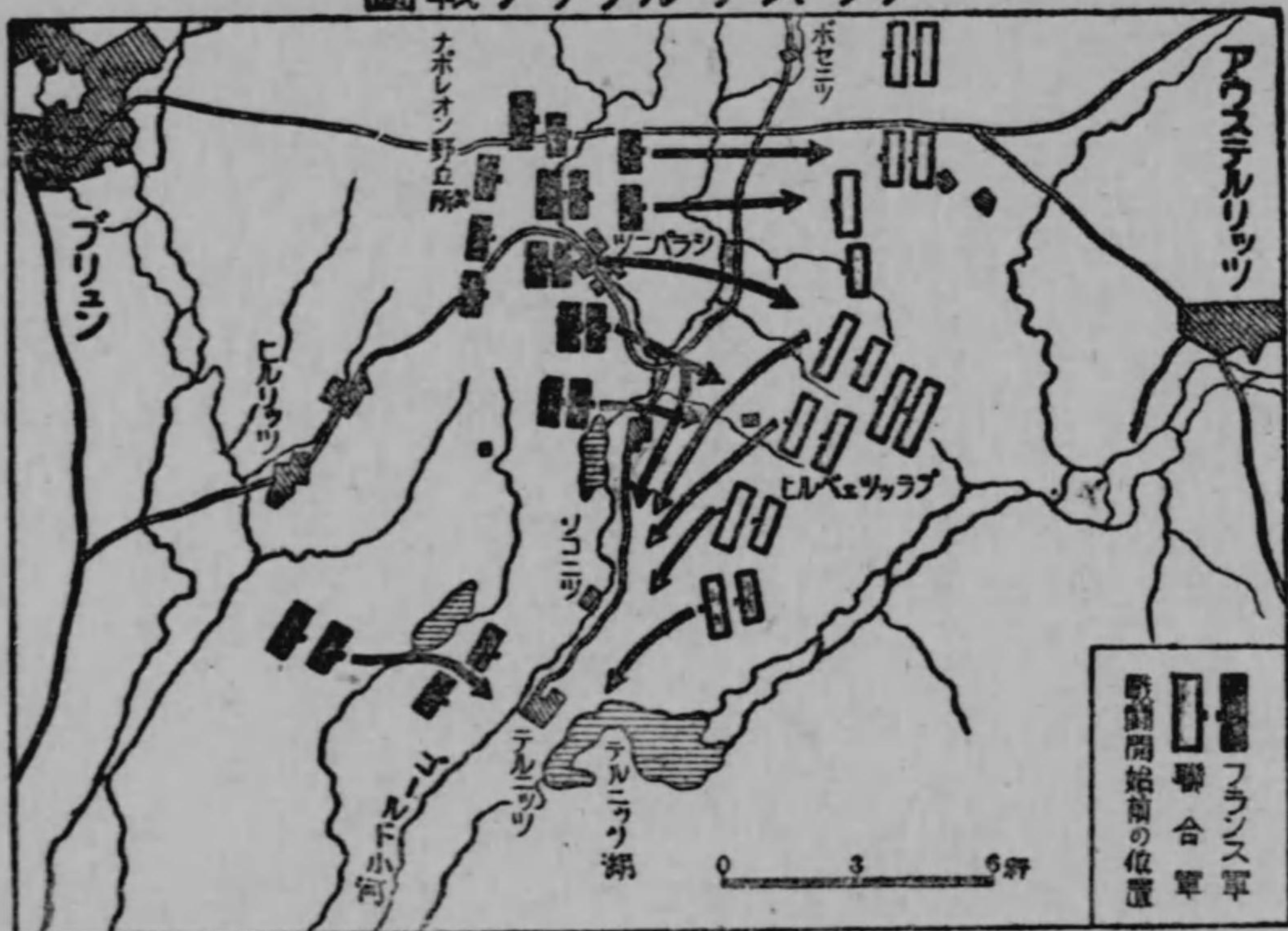
ブリュン到着當時のナポレオンは甚だ恵まれぬ状態にあつた。當時彼れの麾下にはスール、ランヌの二軍團とミュラーの騎兵集團とがあつたのみだが、これに對するオルミュッツの敵は優勢である。のみならずカール大公の軍がそのうちには駆けつけて來るかも知れぬ。さらにプロシヤとの間には接迫した外交問題が起つた際でもある。トラフアルガル敗戦の報告が届いたのも丁度この時だ。しかしながら、ナポレオンの眞價は逆境時代に最もよく現はれる。彼れはまづ第一にプロシヤとの關係を解決することに努力した。プロシヤが反抗的態度を取るに至つたことについては相當な理由がある。一八〇五年戦役以前プロシヤは塊露兩國から盛んに同盟の依頼をうけたけれども、ナポレオンが提供しようとしたハノヴァの餌に釣られて塊露の請求に應じなかつた。然るに戦役開始後ナポレオンがハノヴァにあつたベルナドットをして、プロシヤ領を冒してドナウ河方面にむかはしめたために、プロシヤは大に憤慨し、ナポレオンに對して塊露兩國への出兵援助をも辭さないといふやうな威嚇を與へるに至つた。然るにナポレオンは結局プロシヤに戦意のないことを確め、巧みにこれを翻弄して時機を遷延し、一方塊露側に對しては心にもない休戦の相談を持ち掛け、一日でも時間の餘裕を得て援軍の來着を待たうと考へてゐた。が、時間の餘裕といつても、それは或る程度においてのことであり、若しあまりに時を遷延し過ぎるやうなことがあれば、カール大公軍の來着となり、當然その結果ナポレオンの不利となるのだ。

然るにこの危機においてすら、ナポレオンの時の利用は、當時ロシアの外務大臣ツアルトリスキーが「ヨーロッパ

において時の價値を知る唯一人者はナポレオンである」といつた評價をすこしも裏切ることなく、順調に行はれてゐた。十一月下旬ブリュンにゐたナポレオンは、オルミュッツの聯合軍と直ちに戦ふことにも、餘りに遅れて戦ふことにも共に不利であり、即ちその中間の時機に戦ふのを適當だと考へてゐた。當時ナポレオンの麾下にあつた兵力はスールの第四軍團とランヌの第五軍團とミュラーの騎兵集團とを合した五萬五千に過ぎなかつたのに對して、オルミュッツ附近の敵は八萬六千といふ優勢な數字を示してゐた。即ちナポレオンが即刻戦ふことを不利とした理由はこれだ。しかしながら、若しも敵に對して餘りに時の餘裕を與へるなら、イタリヤを引きあげて歸還の途にあるカール、ヨハン兩大公の率ゐる八萬の軍の來着をみるであらう。(兩大公の軍がウイーンの南方ケールメンドに到着したのは、アウステルリッツ戦後四日、即ち八月四日のことであつた。) 従つてナポレオンに最も好都合なのは、さきに述べたやうな中間時機であり、これを具體的にいへば、結局イグラウ(ブリュンンの西方約二十里)にあつたベルナドットの第一軍團が來會する餘裕をつくることであつた。ナポレオンがプロシヤ外交官と折衝したり、奥露兩國當局への休戦の相談で一兩日を延ばさうとしたりしたアウステルリッツ戦闘直前の辛苦はそのためだ。さうして、彼れは旨く敵を欺いてベルナドット軍來援の餘裕をつくることができた。政略と戰略との調和が戦役の全期間を通じて必要なことは言ふまでもないが、アウステルリッツの場合は戦闘直前における政略戰略の渾一であるために特殊の興味をひくのであり、そこにナポレオンの非凡な手腕が考へられる。

以上の状況の下にアウステルリッツの戦闘が行はれたのは十二月二日、さうして佛・奥・露三國の皇帝が参加したためにこの戦は「三帝會戰」とも呼ばれる。今この戦闘の経過を述べるならば大體次のやうである。十一月二十七日聯合軍はオルミュッツ附近を出發し、三十日アウステルリッツの東方地區に到着した。(オルミュッツからアウステルリ

アウステルリッツの戦闘



ッツまでの里程は僅かに十五六里だから、聯合軍の行軍力が著しく遅鈍であつたことがわかる)しかも聯合軍は翌十二月一日になつても活動を開始しなかつた。(この邊の消息は前述したナポレオンの聯合國への外交的交渉によつて説明さるべきだ)聯合軍から與へられた一日の餘裕は、ナポレオンにとつての勿怪の幸福となり、その日即ち十二月一日にベルナドットの第一軍團が來着し、ダヴィも第三軍團の或る部分を率ゐて駆けつけた。ナポレオンは遂に敵と殆んど五角の兵力を擁することになり、見事に危機を脱することができた。會心の笑を禁じ得なかつたナポレオンは、その夜八時三十分靜かに明日の部署を定めた。あくれば十二月二日早朝遂にアウステルリッツの戦闘は開始されたのであるが、不思議にもナポレオンはその前日當然占領し得たであらうブラッツェン(ブリュンとアウステルリッツとの中間の高地で天王山と同程度の價値を有した)を放棄し、丘下を流れるゴールドバッハといふ小流を前にして陣を布いた。即ちナポレオン軍の右翼はブラッツェンといふ貴量な依托物をむさむさと棄て

たわけである。

ナポレオンがこのやうに戦術の定石を踏まなかつたことについては、少なくとも、二つの理由を見出すことができる。その第一の理由はかうだ。若しもナポレオンが前日にブラッツェ丘を占領したなら、聯合軍は必ずや同處を奪取するために攻撃を開始し、戦は當然十二月一日にはじまり、ベルナドット、ダヴーの來援を期待し得なかつたであらう。兩將を待つためにはこの高地を棄て一日間を犠牲にしなければならぬ。第二の理由として、ナポレオンは同高地を敵に與へ、敵の左翼をわが右翼方面に誘致することを考へた。彼れはかくの如くわが右翼に弱點をつくり、しかもその兵力を稀薄にし、(最初佛軍の右翼には一萬三千の兵數しかなかつたが、後ダヴーが約七千をもつて参加したため、二萬以上になつた)さうして、この方面に敵の主力を牽制した後、優勢なるわが中央と左翼とをもつて劣勢なる敵の中央と右翼とを撃破し、一舉に決勝を得ようとして考へた。聯合軍の主腦クツゾフは果してその手に乗せられた。即ち彼れは左翼のブックスヘーウデンに主力(四萬三千)を與へてブラッツェ丘を占領せしめ、進んで佛軍の右翼を壓迫してウィーン方面との連絡を断たうとした。クツゾフのこの計畫は豫期通りの成功を収めることができなかった。彼れの左翼軍は一時フランスの右翼軍を壓迫したが、結局敵はゴールドバッハの線において頑強な抵抗をした。ナポレオンはかくの如く、わが右翼に餌を置いて敵の主力を牽制した後、豫定どほりわが優勢な中央左翼(約六萬)をもつて劣勢な敵の中央・右翼(約四萬)を攻撃した。そのうち最も目覺しかつたのは中央軍を率ゐたスールのブラッツェ丘奪取の運動であり、彼れと敵の主將クツゾフ(中央軍)との間に惡戦苦闘が演ぜられたが、同高地は正午頃完全にスールの手に歸した。ブラッツェ丘の勝利はその日の勝敗を決定すべき鍵であつた。スールは續いて右翼軍と協同して深入りし過ぎてゐた敵の左翼を攻撃してこれを破壊した。一方フランスとベルナドット(ベルナドットの第一軍は最初スール、ランス兩軍

團の中央後に位置して第二線を形成してゐた)の兩軍團はミュラーの騎兵集團と共に聯合軍の右翼——露將バグラチオン等によつて率ゐられた軍と塊將リーヒテンスタインの率ゐた騎兵集團を含む——を撃攘した。

かくして勝敗の決定したのは午後二時頃であつた。聯合軍の死傷二萬七千、フランス軍の死傷僅かに六千八百、しかもフランス軍の鹵獲した敵の砲は百八十門(開戦當初の敵の砲數は二百門)であつた。フランス軍の徹底的勝利は以上の數字によくあらはれてゐる。のみならず、ナポレオンが最後の豫備隊として第三線に保存しておいた近衛兵その他を合した一萬の兵士を結局戦線に投じなかつた事實によつて、いかにそれが餘裕綽々たる勝利であつたかを知ることができる。

最後にわれらはアウステルリッツ會戦にてあらはれたナポレオンの新戦術について一言しようと思ふ。同戦闘はナポレオンが最も誇りを感じてゐただけに、彼れが從來戦つた戦闘より遙かに新鮮味を有し、すべての兵學者から近代における劃期的戦闘であることを承認されてゐる。その理由の第一は、この戦におけるナポレオン戦術がフリードリヒ大王の戦術と根本的徑庭を有したといふ點である。即ちフリードリヒの場合においては全軍が一聯の規則的運動をせねばならず、或る個處に破綻を生ずれば敗北にはつたわけなのに、ナポレオンの場合はこれに異り、中央敗れても兩翼なほ勝を制し、一翼が破れば中央並びに他翼が勝利を擱むといふ、支那の所謂「常山蛇」の戦術に類するものだ。さうして、ナポレオンのかうした新戦術を明瞭に發表したのがアウステルリッツ戦闘なのである。

しかしながら、この新戦術を實現するには、その補足として豫備隊を有効に使用することが必要だ。ナポレオンがアウステルリッツ戦闘の危機に臨んで一萬人の豫備隊を有してゐたのはそのためで、そこに同戦闘が近代的とされる第二の理由がある。

## 第八章 對プロシヤ戰役

プレスブルグ條約後フランス軍はその本國に凱旋することなく、南ドイツ並びにオーストリア領内に駐屯し、皇帝から全軍の指揮を委任された參謀長ベルテュはミュンヘンに滞在することになった。これがプロシヤに對する非常な威嚇となつたのは勿論だが、そのほかフランスがプロシヤから反感を買ふ二つの理由があつた。

即ちその一つはライン聯邦の成立、他の一つはハノヴァ問題である。ナポレオンは豫めライン聯邦の組織を企圖してゐたが、マインツ大僧正カールの勸誘を容れ、一八〇六年七月十二日遂にこれを實現することができた。ライン聯邦は十六邦をもつて組織され、バヴァリア、ウュルテンベルヒ兩王國、バーデン、ヘッセン・ダルムシュテット兩大公國などが主なるものであつた。ところで、それは神聖ローマ帝國から絶縁して新たにフランス皇帝の保護下に立つことになつたものであるから、壞帝フランスをして神聖ローマ皇帝の位を放棄せしめる最後の動機となつたのは勿論であるが、同時にオーストリアのみならず、プロシヤに對しても甚だしく國境的不安を感じしむる理由となつた。次のハノヴァ問題についてみるに、ナポレオンは前年の對墺露戰役中にはハノヴァ割讓の約を條件として平和主義の普國外務大臣ハウグウィッツを巧みに籠絡してプロシヤの敵對を避けることができたわけであるが、戰後プロシヤを恐れる必要のない場合において、ハノヴァ返還の意思をイギリスに漏らすやうな不義理を敢てした。さうして、この事實がプロシヤ當局の前に暴露したのは八月六日である。

プロシヤはこれより先き既にナポレオンの態度に疑惑を感じて、七月一日ロシアと秘密同盟を結び、ロシアをしてプロシヤの獨立と領土保全とのために努力すべきことを約束せしめたのであるが、前記のハノヴァ問題の暴露とライン聯邦の成立とを耳にするや、遂にフランスに對する戰意を固くした。かくして十月八日における對佛宣戰となり、プロシヤの諸軍(約十五萬)はイェナ、エルフルト間に集中すべき命をうけた。普軍の總帥としてフランスウイク公、部將の錚々たるものとしてホーエンローエ侯やリュッヘル將軍の名前が特記される。國王フリードリヒ・ウイヘルム三世と王后ルイザ・アマリヤとは戰場に臨んで將卒を激勵した。しかしながら、普軍の中堅たるべき高級將校は氣の毒にも老朽してゐた。フランスの將軍が概ね四十歳以下であつたのに對して、プロシヤのそれは六十歳以上若しくは七十歳以上に達してゐた。プロシヤの軍制戦法も著しく老廢し、フランスの徵兵制に比して遙かに劣悪なる傭兵制を固執し、また執拗にも舊戦法に囚はれて、ナポレオンの新戦法を取り入れる餘裕は少しも見出されなかつた。

プロシヤが同盟者たる露軍の來援をまたずに戰爭を急いだのは確かに無謀であつた。その結果ナポレオンはさきにウルクム方面においてオーストリアを單獨に處理したやうに、今また露軍來援の見込なき好機を逸することなく普軍に一舉の大打撃を與へようと考へた。彼れは敵がチューリッゲン森の東北方イェナ、エルフルト間に集中しつつあることを知り、例により連絡線突破の作戰をとるべく、南ドイツ方面に滞在してゐた軍(約二十萬)を逸早く敵の左側背に送り、敵のベルリンへの退路を遮断しようと決意した。十月十四日における有名なイェナ、アウエルシュテット兩處の戰鬪はかくして起つたのである。ナポレオンは十月二日以降バイロイト、バンベルヒ間に集中した後、軍を三縱隊に區分した。即ちスールの第四軍團とネーの第六軍團とで右縱隊、ミュラーの騎兵集團とベルナドットの第一軍團とダヴーの第三軍團とで中央縱隊、ランヌの第五軍團とオージューローの第七軍團とで左縱隊が編成された。ナポレオンは

その後敵の主力がイエナ附近にあるものと誤解し、軍の大部分をイエナに向つて集中せしめると同時に、他の一部分を敵の策源地たるナウンブルグへ送つて敵のベルリンへの退路を断たうといふ例の作戦を實行しようとした。彼れがこの計畫は十月十三日即ち戦の前日における佛軍の位置によつて明らかに知られるのであり、當日中央縦隊の大部分はナウンブルグ附近にあり、左右兩縦隊はイエナ附近に集中してゐた。

ところで、ここに特記すべきは、中央縦隊のナウンブルグ占領の効果である。何故といふに、それは普軍の退路遮断と策源地占領といふ點においてウルム戦勝直前における佛軍のメンミンゲン占領の効果と比較さるべきものがあるからである。

然るに當時普軍は退路の危険を感じ、フランスウイク公の率ゐる本軍をしてアウエルステットにむかつて退却せしめ、イエナにはそれよりも劣勢なホーエンローエ侯の率ゐる軍を残した。然るにフランス側の中央縦隊の一部であつたダヴーの第三軍團が、敵の本軍の所在をイエナ附近と誤想し、その背後を衝く目的をもつてナウンブルグから進軍する途中、偶然敵の本軍とアウエルステットにおいて遭遇したのは意外であつた。とにかく、十月十四日イエナ、アウエルステット兩處における普佛兩軍の對抗がひとしく本軍對別軍、優勢對劣勢の對照を示したのは面白い。しかしながら、普軍は佛軍の敵ではなかつた。イエナの普軍が優勢の佛軍のために敗北したのは勿論として、アウエルステットにおける優勢の普軍すら劣勢の佛軍に勝つことができず、徒らにダヴー將軍の名譽を高からしめたのみであつた。

次に注目すべきものはイエナ、アウエルステット兩戰鬪後における佛軍の華々しい追撃運動である。敗北した普軍はナウンブルグを経てベルリンへの最短路を退却する見込みが全然ないのを知り西の二道を退却した。即ちホーエンローエ侯はノルドハウゼン、マグデブルグを通ずる道路を、ワイマル公は本軍の殘兵を率ゐて（總帥フランスウイク公

はアウエルステットの戦において重傷を負うたので、ワイマル公が代つて指揮をとることになつたのである）エルフルト、ゲッツティンゲンを通ずる道路を退却した。ナポレオンは第一軍團をしてホーエンローエ軍を、ミュラーの騎兵集團並びに第四第六兩軍團をしてワイマル軍を追撃せしめ、自ら第二・第五・第七の三軍團を引きつれてベルリンを目指した。かくして、ナポレオンがベルリンに入城したのは十月二十七日であり、ホーエンローエ、ワイマル兩軍はその後間もなく降服した。かくして、十一月二十一日にベルリン勅令の發布があり、これによつてイギリスに對する大陸封鎖の強制をみることとなつたのである。

## 第九章 普露兩國との戦役

戦敗後ケーニヒスベルクに退據した普王フリードリヒ・ウイヘルム三世とナポレオンとの間には休戦の交渉があつたけれども、ナポレオンの要求が過酷であつたために不調となつた。ナポレオンはプロシヤに對しては飽くまで徹底的打撃を與へる考であつたが、一方普軍よりも遙かに恐るべき露軍が近接しつゝあつた際なので、彼れの注意が主として露軍の上に燃え出したのは當然である。強敵露軍を目標とする場合彼れの第一に考慮したのはオーストリアの態度である。この際アウステルリッツの戦敗を根にもつオーストリアが佛軍の側面を襲ふやうな事になつたら、それこそ由々しい大事となるからである。そこで彼れはオーストリアが嘗つてフリードリヒ大王のために奪はれたシレシヤの提供を條件としてオーストリアを懐柔しようとした。然るに丁度ロシヤからも同盟の申込があつた時なので、オーストリアは一時その中間に煩悶したが、結局兩國の要求を拒絶して嚴正中立を守ることになつた。これはナポレオンに取つて偶然の幸福であつたといへばいへる。また彼れはロシヤに對するためにポーランド人煽動やトルコとの同盟を策したり、或はサクソニヤその他北ドイツ諸國をライン聯邦に加へて兵士軍費を補給することを約せしめたりして、自ら戰場にありながら餘裕綽々たる外交ぶりを示してゐた。

十一月二十五日ナポレオンはベルリンを棄てて東進、同二十七日ボーゼンに到着した。當時ミュラーの騎兵集團とダヴーの第三軍團とはワルソーを、オージューローの第七軍團はプロスクを、ランヌの第五軍團はトルンを目標としつゝ、いづれもウイストラ河を目指して前進中であつた。これに對する普露兩軍はどうかと見るに、問題になるのは主として露軍だつた。といふのは、さきのイエナ、アウエルステット兩戰場から敗退した普軍の殆んど全部は降服し、新戰場たるべき東プロシヤにおける普軍といへば、ケーニヒスベルクに國王と共に籠城しつゝある軍とトルマ附近にあるレストックの率ゐる軍(二萬五千)に過ぎず、さうして事實露軍によつて利用され得るものはレストック軍に過ぎなかつたからである。聯合軍の主力たる露軍は約十萬、總帥は七十六歳の老將カメンスコイ、部將にはベニグゼン、ブックスヘーウデン等がゐた。然るに無氣力なカメンスコイはウイストラ河畔に佛軍と決戦することを避け、そのまきニーメン河の線に後退する豫定でウイストラ河を放棄した。

フランス軍のウイストラ河は十二月一日以來はじまつた。ところで露軍の部將ベニグゼンは無抵抗のまま退却するのを甚だ心外に思ひ、總帥の命をきかないで、おのれの指揮下にある五萬六千をもつて十二月二十六日ブルツクにおいて佛軍に大逆襲を加へて退却した。その後間もなくカメンスコイは免職となり、ベニグゼンが總帥となつた。

ナポレオンは嚴寒の氣候と道路の泥濘とのために追撃を見合せ冬營の準備に従事した。然るにベニグゼンは動き出した。彼れの策動の目的はケーニヒスベルクへの糧食補給とダンチヒ籠城の普軍との連絡のためであつた。ナポレオンは早くもこれを知り、敵の左側背を脅かす作戦をとらうとすると、ベニグゼンは決戦を覺悟してアイラウに陣取つた。一八〇七年二月八日のアイラウ戦鬪はかうした経緯の下に開始された。ナポレオンは中央に主力を置いて敵の正面を攻撃せしめ、ダヴーの第三軍團をして敵の左側背を、ネーの第六軍團をして敵の右側背を攻撃せしめ、勝を一氣に制さうとした。惡戦苦鬪は早朝から夜間に及ぶまで繼續したが、その間ダヴーの包翼運動效を奏し、殆んど勝敗決するばかりに見えたところへ、露軍の側にはシャルンホルスト——後に軍制家としてプロシヤ第一の名譽を得た——

が援軍を率ゐて参加したために露軍の旗色は回復した。さうして今度は逆に佛軍の側が大いに危くなつたが、ネーの軍が敵の右側背に迫つたので、崩れかけた佛軍の足並はやうやく整つてきた。

かくして兩軍五角のまま夜に入つた。然るにベニグゼンは敵に新手の援軍ありと誤解し、夜に乗じて密かに退却した。翌朝に至つてナポレオンは始めて敵の退却を知つたわけだが、取り敢へず敵の放棄した戦場を占領して戦勝を装うた。が、事實アイラウの收穫は戦勝ではなかつた。ナポレオンは彼自身が直接關係した戦闘のうち嘗つてアツコン城攻圍不成功の如き戦績を残したこともあつたが、ヨーロッパにおけるこれまでの戦でアイラウのやうな五角の戦を経験したことはなかつた。これを常勝將軍の第二の蹉跌と見て差支ない。

アイラウ戦闘後佛軍は冬營のためにパッサルゲ河左岸に後退し、露軍はアルレ河上流に駐屯してこれと相對した。その後フリードランド戦闘まで約四ヶ月間、アイラウ戦闘に不愉快な記憶を感じたナポレオンは、まづ普露兩國に對する外交の成功によつて局面の打開しようと思つた。對普外交としてはプロシヤとの單獨講和を計畫したけれども、それは見事に失敗に終つた。但しトルコ、ペルシヤ兩國を懐柔してロシヤを牽制する策は成功した。またシレシヤ、ダルマチヤを餌としてオーストリアに嚴正中立を守らせる目的も達せられた。軍事的事情においては更に氣の毒なものがあつた。即ちナポレオンは翌年徴兵を一年早目に召集するやうな無理を餘儀なくされ、ことに或る時機においては、戰場における兵士の給與に窮したほどである。しかしながら、ナポレオンは兵士等と異體同心となることによつて、兵士等の不平不満を緩和することができた。彼れは平然として兵士等と同程度の窮迫と艱苦とに當面しつづけてこれに堪へた。これによつて彼れは、孫子が「道は民をして上と意を同じうし、之と死すべく、危きを畏れざらしむるなり」といつたやうに、喜んで皇帝と生死を與にしようとする兵士等を見出すことができた。

ナポレオンは五月二十五日プロシヤ軍の據守するダンチヒ要塞を攻め落し、まづ聯合軍に打撃を與へた後、アルレ河上流のハイルスベルクを固守しつづつあつたベニグゼン軍を殲滅する戰略の考案に没頭してゐた。然るにベニグゼンの側からまづ攻撃運動を開始し、パッサルゲ河への進軍を決行したが、佛軍の動きを見て攻勢を斷念し、六月九日再びハイルスベルクの陣地に退却した。

同日ナポレオンは進軍を開始し、ベシナドットの第一軍團をしてパッサルゲ下流方面に普軍を抑留せしめ、主力軍をしてアルレ河左岸を前進、ハイルスベルクの敵を攻撃せしめた。ベニグゼンは決戦を避け、十一日夜アルレ河右岸に退却して十三日フリードランドに到着し、レストックの率ゐる普軍も同日ハイルスベルクを棄て、ケーニヒスベルクに退却した。翌十二日の朝敵軍の退却を知つたナポレオンは、普露兩軍を分斷するために自ら主力を率ゐてアイラウを目指し、ランヌをして退却した敵を追ふべくアルレ河左岸に沿うて前進せしめた。かくして、ランヌがフリードランドの西方に達した時、ベニグゼンは敵を劣勢と見て蔑つたのか、釣られ氣味にアルレ河を渡り、同河左岸にあるフリードランドの西側に進んだ。即ち彼れは敢へて背水の危機に身を投じたわけである。ランヌは重要な任務を自覺して頑強に抵抗した。そのうちにナポレオンの本軍が來着したので、ここに六月十四日のフリードランド戦闘を見ることになつたが、ベニグゼンは遂に河を越え、チルジットに向つて退却した。フリードランドの戦勝はアイラウの缺を立派に補うたもので、ナポレオンはこれを「マレンゴ、アウステルリッツ、イェナの姉妹」として誇つてゐた。一方フランスの別軍はフリードランドと同日にケーニヒスベルクを攻撃したが、普軍の敗北となり、レストックは國王を奉戴してチルジットに退却した。佛軍は聯合軍を追撃し、十九日チルジットを占領したので、やがて休戦條約となり、二十五日ニーマン河の筏の上における露佛兩帝の會見となり、有名なチルジット條約の締結を見るに至つた。

## 第十章 イスパニヤ遠征

ナポレオンは後年セントヘレナで「予を零落せしめたものはイスパニヤの腫物であつた」と述懐したが、實際その通りだ。今少しく詳しく言へば、イスパニヤの事件はナポレオンを没落へ導いた明確な第一段階であつた。ところでイスパニヤ事件の發端は前述したバヨヌヌにおけるイスパニヤ王退位と一八〇八年六月十五日におけるジョセフの即位(そのかはりナポリの王位はナポレオンの妹婿ミュラー將軍の手に與へられた)にあつたのは勿論だが、イスパニヤ人が新王によつて憲法を與へられたのは幸福であつた筈である。しかしながら、イスパニヤ人は憲法を喜ぶよりも、外來主ジヨセフを嫌惡する感情に満たされてゐた。彼等の頑強なる愛國心は沸騰し、新王排斥を目的とする一揆が各地に勃發した。一揆は所謂ゲリラ戰術によつて大にフランス軍を悩ました。

ところで、ゲリラ戰術といふのは、往々にして正規戰術を譏弄することがある。スロアンが「ナポレオンの戰略はフリードリヒ大王型の軍隊組織を嘲笑したが、スペインのゲリラ戰術は如何なる形式の正規戰術をも嘲笑した」といつたやうに、ナポレオンの新戰法に導かれたフランス軍は、フリードリヒ型の舊式戰法を墨守した諸國軍を軽くあしらふことができたけれども、却つて原始的なイスパニヤのゲリラ戰術に悩まされたのは注目に値する。

いづれにしても、以上のやうに特殊なゲリラ戰術を行ふ國民一揆と協同したイスパニヤ正規軍は甚だ優勢であり、ミュラーを總指揮官としたフランス軍は至るところで敗北した。かくして、八月十日サラゴツサを包圍したフランス

軍はイスパニヤの將バラフォックスのために撃退され、ジョセフ王の餘儀ないマドリツド撤退となつた。さうしてフランスの全軍は次第に國境方面に壓迫された。しかしながら、本國サン・クルー宮殿にあつたナポレオンは、イスパニヤ軍勝利の原因がゲリラ戰術と愛國心にあつた事實を理解することなく、「イスパニヤの軍はその全力をもつても適當の陣地を占めたフランス軍二萬五千人を破ることができない」と豪語した後一戰爭においては多數が問題でなく一人がすべてだ」といふ有名な言葉を添へた。即ち彼自身をその「一人」に擬してゐたナポレオンがこの時既に遠征軍の指揮官に満足せず、自ら出陣することを覺悟してゐたのは明瞭である。然るに意外にもこの時(八月末)イギリスから恐るべき「一人」が一萬二千餘の兵を率ゐてイベリヤ半島に上陸した。ウエリントン(一七六九—一八五二)の名をもつて有名な將軍アーサー・ウエレスリーがその人である。これより先きナポレオンは大陸封鎖を強制するために將軍ジュノーをポルトガルへ派遣した(その結果ポルトガルの王室はブラジルへ出奔した)ので、ウエリントンの來着は勿論ポルトガル人救援を意味する。その後ジュノーは次第に不利に陥り、剩へイスパニヤ方面との連絡を斷たれたために、遂に海路をとり、フランスに送還さるべき條件のもとに降服するの餘儀なきに至つた。

このやうにウエリントンの行動はポルトガルにのみ躊躇してゐたのではなく、さらにイスパニヤ方面にも關係したもので、所謂半島戰爭が開始されたわけである。

ナポレオンがイスパニヤ親征の必要を痛感してエルフルト會議を開催したのは前章記載の通りである。エルフルト會議においてロシアとの同盟の繼續によりオーストリアの恐れを除却したナポレオンは、イスパニヤ親征のため一八〇八年十一月三日バヨヌヌに到着した。イスパニヤ駐屯のフランス軍と共に今やナポレオンの指揮下に立つ兵數は無慮二十五萬の多數にのぼつた。當時フランス軍の大部分は殆んどエプロ河の右岸に追ひつめられ、その左翼にゐたモ



ンセーの率ゐる第三軍團の如きは、イスパニヤ側のバラフオックス、カスタニョスの率ゐる二軍のために包圍されてゐた。しかしながら、ナポレオンは敵軍に對して壯快な中央突破をブルゴス方面に試み、一舉にマドリッドを直指す策をとり、ネーの率ゐる第六軍團をしてベルヴェデレの率ゐる敵の中央軍を突破せしめた後、十一月三十日マドリッドの北門にあたる險要ソモシエラを貫き、十二月二日マドリッド郊外に迫つて城内を威嚇し、勸降状を送つた。城内の市民は一時決死の防禦の覺悟をしたが、フランス軍の砲撃六十發に威嚇されて降服したので、四日フランス軍は無抵抗で入城することができた。同日ナポレオンは勅令を發して、イスパニヤにおける封建的特權並びに宗教裁判の廢止・修道院の削減・地方關稅の撤廢等を宣言し、さらに數日後イスパニヤ人に宣言書を發布したが、そのなかに「予は汝等に自由なる憲法を與へ、專制政治に代へるに有限なる立憲君主政治をもつてした」といふやうな言葉があるが、そのいづれもナポレオンがイスパニヤ人をしてジョセフ王の治下に安んぜしめるための宣言にほかならなかつた。

イスパニヤ軍を解決した後、ナポレオンは最初からの豫定作戰に従ひ、ポルトガルのイギリス軍を攻撃する目的をもつて、スールの第二軍團をポルトガル北境方面に進軍せしめた。然るに將軍ムーアの率ゐるイギリス軍は、既にサラマンカ附近に到着してゐたが、ナポレオンの本軍とスール軍との中間を遮斷するためにヴァリアドリッド方面に進軍した。ムーアは驚いて退却した。ナポレオンはムーア追撃をスールに托し、一八〇九年一月十七日近衛軍を率ゐてイスパニヤを去り、パリに向つて凱旋の途についた。一方スールはムーア軍を追撃してイスパニヤの西北端コルーニヤにこれを包圍し、敵將ムーアを戦死せしめ、勝利を獲得することができた。

イスパニヤ遠征において、偉大なる「一人」としての力倆をナポレオンは確かに發揮した。しかしながら、彼れの勝利は一時的であり、イスパニヤ國民一揆を勿論根絶することができなかつた。またナポレオンが「もし予の軍隊の

給養のため三億乃至四億フランを犠牲にして二ヶ年間の歳月を費すならば、予の軍隊は自由にイスパニヤを馳驅し、同國を征服することができらうであらう。」といつた事實に徴しても、イスパニヤ國民一揆の根絶が一朝一夕に望まらるべきものでないことが十分裏書きされてゐる。だから、イスパニヤ國民の愛國心並びに反抗心がある以上、その後における國民一揆の勃發は可能的であり、そこにナポレオンの將來にとつての大きな禍根が伏在してゐたわけである。

## 第十一章 一八〇九年オーストリア遠征

前節に述べたやうに、倉皇イスパニヤを引きあげたナポレオンは一八〇九年一月下旬パリに歸還した。ナポレオンの歸還を早めた理由の一つは、タレーラン、フィシェー等の陰謀を未然に防止するためでもあつたが、それよりもつと根本的な理由は、彼れがオーストリアに對する焦眉の急策を痛感したためであつた。

遑つて考へて見るに、オーストリアは前後三回の戦敗によつてフランデル、イタリア領、ライン左岸、チロール、フォラルスブルグ(面積三萬方哩人口三百萬)を失ひ、さらに一八〇六年ライン聯邦の成立と共に神聖ローマ帝國を回復することを餘儀なくされた。故にオーストリアが次第に覺醒してナポレオンのために失つた以上のものを回復することを企圖するに至つたのは當然である。ナポレオンに對するオーストリア人の報復意志が眞に自覺的になつたのは、一八〇五年の敗戦以後のことである。その結果として、ウルムの敗將マックは斥けられ、軍備擴張・軍制改革の大任はカール大公の手に委せられた。ナポレオンの炯眼は早くもこの事情を看破した。そこで彼れは嘗つて一予の政略は予の背後に敵意ある王朝の存在を許さない」といつた標語通りにオーストリアの敵意を一掃する計畫を進めてゐた。彼れはチルジツト條約とエルフルト會議とにおいて、フィンランド、バルカン方面の好餌により、巧みにロシア皇帝アレクサンドル一世を懐柔し、アレクサンドルと同盟を結ぶことによつて、オーストリアをして戰意を斷念せしめようとした。

かうした次第であつたので、オーストリアでは冒險を好まぬ保守主義者等は當分の間フランスとの戦争を欲せず、カール大公を首領とする軍人階級から成る平和黨が相當勢力を占めてゐた。然るに一方宰相スタディオンを首領とする政治家によつて組織された主戰黨は却つて優勢であつた。スタディオンは夙にドイツ人の愛國心を見きはめ、全ドイツ人を一丸となし、ナポレオンを粉碎する一大砲彈としようと考へてゐた。自然彼れはプロシヤとの同盟を最大急務とし、密かにこれをプロシヤの宰相スタインに交渉した。スタインも豫め同様の希望をもつてゐたので、早速國王フリードリヒ・ウィルヘルムにオーストリアとの同盟を勧誘したが、ナポレオンとアレクサンドルとを極端に恐れてゐた國王は全然馬耳東風であつた。プロシヤとの同盟計畫には失敗したけれども、スタディオンの戰意は微動をも感じなかつた。イスパニヤ人の頑強なる抵抗から彼れは異常の刺戟を與へられたのみならず、フランスの精兵二十五萬がイスパニヤの山間に拘束されてゐる今の時機を、オーストリアにとつての乾坤一擲の好機會と見る明をもつてゐたからである。彼れは斷乎開戦を皇帝フランスに勧めた。在フランス大使メツテルニヒ(一七七三—一八五九)もこれに同意して熱心に皇帝を説いた。かくして開戦の決定を見たのは二月八日のことである。

一方ナポレオンのパリ歸着は、前述のやうに一月下旬、正確にいへば一月二十六日のことであつたので、もしオーストリアが二月八日の開戦決定と共に直ちに軍を動かすやうなことがあつたら、それこそフランスに取つては由々しい大事となつたであらう。なんとなれば、當時ナポレオンの精兵二十五萬はイスパニヤに閉塞され、オーストリアに備へたフランス軍は諸處に分散し、ナポレオンにとつて絶對必要である新兵の召集と訓練との餘裕がなかつたからである。然るにナポレオンに對してそれは僥倖といはるべきであるが、オーストリアにおける主戰・平和兩黨の軋轢は徒らに戰機を遷延し戰備を停滯するのみであり、三月の末即ち開戦決定以後五十日にしてやうやく戰略方針の決定を

見るに至つた。總帥カール大公の作戦は第八・第九の兩軍團をしてイタリア、チロール方面、第七軍團をしてガリチヤ方面に備へしめ、第一軍團から第六軍團に至る六個軍團に第一・第二豫備軍團を加へた合計八軍團を主力軍とし、カール自らこれを引率してエルベ河を渡り、ボヘミヤの西境に至り、ナポレオンの援軍が到着しないうちに、まづフランス軍の中樞たるライン軍(ダヴィ配下六萬)を攻撃して一舉に粉碎することを目的とした。

然るにカール大公はやがてボヘミヤ進政策に疑惑を感じ、諸將を集めてバヴァリア進政策を提示した。諸將中には相當異議を唱へるものがあつたやうだが、カールの保守的性格は、前策は決勝的であるが危険だといふのでこれを放棄し、後策は時日を遷延する嫌ひがあるけれども安全だといふ理由のもとにこれを採用することになつた。かくしてカールが新方針に基づきボヘミヤの兵を撤したのは三月三十一日であるが、その後ドナウ河を越えバヴァリア戦場に到着するまでに、貴重な十八日間を犠牲にした。即ちこれによつてオーストリア側は、二月八日の開戦決定以來約七十日を空費したわけである。ナポレオンはこの間出來得る限りの準備を整へ、一時珍らしくも戰略的防勢の地位に立ちながら、攻勢移轉の輝かしい希望に満たされつつ軍をバヴァリア戦場に送り、參謀總長ベルチエに全軍二十萬(ダヴィ、マッセナの二軍團とその他の三軍團)の指揮を委任した。然るにベルチエはナポレオンの訓令を誤解し、かうした場合における戰略上の通則たる「集中」を企圖することなく、愚かにも諸軍を分散してゐた。四月十六日夜、ナポレオンがインゴルスタットに到着した時には、ダヴィはまだニュルンベルク附近にあり、マッセナはウルムを出ることができなかつた。それゆゑに、イザール河方面から進撃するオーストリア軍に對する配備としては、甚だ心細いものであつたけれども、ナポレオンは敵の行軍の遲鈍を利用して、分散したわが諸軍を或る程度まで接近せしめることに成功した。

四月十八日、カールがダヴィをレーゲンスブルグ——或はラ スボンとも呼ばれる——に攻撃する意圖を看破するや、ナポレオンはアーベンスブルグにあつたルフエーヴルをして敵の左翼に向つて進軍し、彼等の行軍を遅延せしむべきことを命じた。この時既にナポレオンの攻勢移轉を表象する最初の曙光があらはれた。彼れはまづルフエーヴルとダヴィとを連絡してカールに對抗せしめ、時間の餘裕を作り出した後、マッセナをしてカールを粉碎せしめる攻勢戰略を企てたのである。ナポレオンのこの目的は、二十日のアーベンスブルグの戦勝によつて見事に達成されたけれども、彼れは敵の主力軍をレーゲンスブルグに突破しようとはせず、却つて意外にもランツフートを占領して同處を固執し、味方が獲得した二十二日のエックミュール戦勝と二十三日のレーゲンスブルグ戦勝との餘勢に乗じて、カールを窮迫する策を取ることなく、即ちバヴァリアにおいて戦勝を博する機會をつくることをせず、カールをむざむざボヘミヤ方面に逸した。敵の主力軍に攻撃目標を取るべき戰略的見地から見ると、ナポレオンの以上の行動は全然不可解の如く思はれるが、若しこれに政略的考察を加へ、「ウィーン直進の最捷路を取るべくナポレオンはランツフートを占領した」と解するならば、疑問は容易に解決されるであらう。が、われらはこの場合餘りに政略に囚はれてバヴァリア戦場に決勝の機會を失したナポレオンの態度を是認するものでない。

次にわれらは佛墮兩軍のバヴァリアからウィーンへの行軍競争に絶大なる興味を感じる。カール大公の率ゐるオーストリア軍は四月二十三日午後五時頃から退却を開始し、ボヘミヤを経てウィーンを目指した。ナポレオンは二日間の優先權を敵に與へ、なほ途中敵の別軍の抵抗を切り抜けながら、カールと對稱的にドナウ河の南をとほつてウィーンに急行した。フランス軍の行軍力はオーストリア軍のそれに比して驚くべき優越を示した。五月十日ナポレオンがウィーンのシェーンブルン宮殿に到着した時、カール軍は辛うじてツウエッテル——ウィーンから八十五哩——に達

したばかりであつた。この間における兩軍一日の平均行程を比較するに、フランス軍のそれは十八哩十分の一であつたのに對して、オーストリア軍のそれは僅かに十二哩十分の二に過ぎなかつた。が、これは表面上の計算であり、もつと精確にいへば、フランス軍は途中敵の抵抗と河川の障碍とのために三日間を要したから、實際の平均行程は二十哩十分の三といふ高率を示した筈である。この計算によると、フランス軍は若し途中の障碍をもたなかつたなら、僅か十二日間でウィーンに到着し得る行軍力を有したのに對して、オーストリア軍は殆んどその二倍の日數、即ち約半分の貧弱な行軍力しか持つてゐなかつたことがわかる。

ナポレオンのウィーン先取は従つて當然の歸結といはねばならぬ。しかしながら、敵都占領を講和の前提と即断したナポレオンの政略は全然失敗だつた。それは一八〇五年のウィーン占領の場合と同様である。ナポレオンは五月十五日夜以來ビザンベルグ(ウィーンの北方)附近に集中しつつあつたカール軍と決戦するの必要に迫られた。そこで彼は断然ウィーンを棄て、ドナウ河の河中島ロバウ——ウィーンの東方——に戦略據點を移し、未來の戰場と豫想するビザンベルグとドイツェ・ワグラムの兩高地とロバウ島との間に介在する廣さ五哩の平原を睨んでゐた。かくして、五月二十一日・二十二日の兩日に亘り兩軍の間に闘はれたのが、有名なアスペルン・エッスリング間の戦闘である。オーストリア軍を輕侮するの餘り、ダヴィー、ベルナドット等の來着を待たずにロバウを突出したナポレオンの無謀は、約二倍の敵を迎へるの不利に陥り、驍勇ランヌをエッスリングの野に犠牲としてロバウに退却することを餘儀なくされた。

アスペルン・エッスリングの戦敗はナポレオン戦史中の稀有の事件であり、カールの光榮ある戦勝は軍神ナポレオンの魔力の絶對性を傷けるに十分であつた。さうして、われらはそこにイスパニヤ人の得た以上の精神的收穫を見る。ただ遺憾なのは、戦勝者たるカールがナポレオンを追撃しなかつたばかりでなく、ビザンベルグ、ワグラム、マルクグラーフノイジールを連絡する高地に後退して防勢に立つたことである。一方ナポレオンはどうか。この天才が逆境に臨んでいよいよその天才を發揮するのは有名な話だが、退却後ワグラム戦闘に至るまでロバウ島における彼の間然するところない努力と周到綿密を極めた準備とは實に驚嘆に餘りある。

島の滞在六週間を利用して、ナポレオンはさきの戦敗當時未着だつたダヴィー、ベルナドット、マルモン、ユーージェーヌ等の軍の來援を待ち、ウィーンで鹵獲した大砲百餘門を取り寄せて各聯隊に配付し、巧妙なる伴攻法によつてオーストリア軍を撃破しようと計畫してゐた。

河川戦闘に應用したナポレオンのこの時の伴攻法は殆んど類例なき傑作であつた。彼れはロバウを離れて遠くプレスブルグにダヴィーを送つたり、またこの戦略的示威運動を補助せしめるため、ワグラム戦闘直前までダヴィー、ベルナドット、ユーージェーヌ等の軍をロバウ島に渡さなかつたりして、カールにナポレオンの渡河點がロバウ以外にあると誤信せしめた。ナポレオンはまた伴攻上最初からロバウ北方ミューラウ方面に絶大なる注意を拂つてゐた。そこに堅固なる工事を施し、橋梁を架設し、砲百二十門を備へて、恰もこの方面に全力を傾注するが如き態度を示し、カールをして、もしナポレオンが結局ロバウから突出するなら東でなく北であるやうに思はしめた。しかも、この場合橋梁架設がナポレオン伴攻法の真髓であり、彼れはオーストリア軍の眼を最後の瞬間まで誤魔化すために、東方橋梁(舟橋)の架設を進出直前まで見合せてゐた。

そのためカールは七月四日ベルナドット、ユーージェーヌ等がロバウに渡つたのを見て、はじめてナポレオンのロバウ進出を確信し得た時でも、なほその全精神を島の北方、アスペルン、エッスリング方面に囚はれてゐた。

ナポレオンは七月五日豫定通りロバウ島の東方から進出して敵の不意を打つことに成功したので、ワグラム戦勝の榮冠は遂にナポレオンの頭上に輝くことになった。ワグラム戦勝はナポレオンの光輝ある諸戦勝中の殆んど最後のものであつた。が、それは戦役を決定するまでの効果を奏することができなかつた。敗將カールは餘力を貯へつつ十萬の兵力をもつてツナイム方面に退却したからである。ところで、ナポレオンは珍らしくも敵を窮追することなく、不思議にも緩慢な追撃を續行した後、七月十一日のツナイム戦鬪をみるに至つた。然るに當時ナポレオンはマツセナ、マルモンの二軍をしか手許に握つてゐなかつた。ワグラム戦後ニコルスブルグへ送られたダヴー、ウディノーの二軍は當日の間に合はず、ウイーン防備に残されたベルナドット、ユージエーヌの二軍はこの場合勿論問題外であつたからである。そんなわけで、ナポレオンはツイナム戦鬪において勝利を得ることはできなかつたが、カールからの請求に應じて早速休戦條約を結んでしまつたのである。

ツイナム休戦條約の成立はナポレオン、カール両者が政略を偏重した結果と見られた。ところが、オーストリアの宰相スタディオンは主戦派の立場から飽くまで平和派のカールの處置を非難したので、フランス皇帝は一時その渦中に捲きこまれ、當然カールとの反自を生じた結果、七月三十日にはカールの辭任となり、皇帝自ら全軍の指揮を取ることになった。が、フランスは一時頼もしげであつたロシア、プロシヤの態度が遂に頼み得べからざることを知り、餘儀なく主戦派のスタディオンを黜け、新たに平和派となつたメツテルニヒに全權を與へて、平和條約の締結に盡力すべきことを命じた。その後オーストリア代表とナポレオンとの間に講和談判は次第に進捗し、十月十四日シェーンブルン條約(ウイーン條約)が成立した。

## 第十二章 ロシヤ遠征

ナポレオンはチルジツト條約後ロシヤ皇帝アレクサンドル一世の態度を甚だ疑つてゐたが、その後アレクサンドルの皇妹に結婚を申し込んで拒絶されたのに不平を感じ、結局ロシヤの密貿易に報復するために大遠征を計畫した。然るに當時なほ依然として半島戦争が繼續し、ウエリントン將軍がフランス軍の一部をイスパニヤ方面に牽制してゐたのは、ナポレオンに取つての大きな損失であつた。そのためナポレオンが大國ロシヤに向つて使用し得る兵力は二十餘萬に過ぎなかつた。しかしながら、彼れはオーストリア、プロシヤ、デンマルク等の西ヨーロッパ諸國(イスパニヤを除く)の同盟軍を得(スウェーデンはロシヤと同盟した)、總軍六十萬(但しロシヤに侵入したものは四十五萬)といふナポレオン戦史中最大多数の兵力をもつてロシヤに宣戦することができた。かくして、フランス側聯合軍は一八二二年六月三道にわかれ、右翼軍はウエストフアリア王ジエローム、中央軍はイタリヤ副王ユージエーヌ、左翼軍はナポレオンの指揮をうけてニーマン河を渡つた。ナポレオンの戰略目標は最初は敵の軍隊であつたが、後には「ロシヤの心臓」と稱される敵の舊都モスコに變つた。

これに對するロシヤ軍の兵力は約二十萬、三軍に編成され、第一軍はバークレー、第二軍はバグラチオン、第三軍はトルマソフによつて率ゐられた。ロシヤの主將バークレーの戰略は防勢的であり、敵を或る地點に阻止する程度に甘んじたのであつた。一般にさう考へられてゐるやうに、敵を引張り込むために所謂野を清めて戦はずして退却する

のが彼れの豫定作戦ではなかつたらしい。然るにバークレーとバグラチオンとの連絡が不十分だつたところへ、フランス側から盛んにこれを分断しようとするので、ロシア軍は踏みとまつて抵抗する機会がなく、後退したのであつた。フランス側も自然深入りすることになり、何時しかウイルナを過ぎ、ウイテプスクを後にした。

ナポレオンの最初の作戦は、ニーマン河を越えて間もなく敵と決戦するか、或は季節を顧慮しつつ密かにモスコイを目指すか、二者のいづれかであつたらしい。然るにロシア軍の偶然的な連続的退却に誘引されたナポレオンは豫定作戦のいづれをも取ることができないで、炎暑と糧食との問題を全然無視して唯一圖に敵を追撃した。ナポレオンも将卒もひとしく愉快な一戦を希望した。が、敵は恰もフランス軍の氣を抜くやうに飽くまで退却を續行し、沿道の家屋物資を焼却した。ナポレオンはいかに求めても敵の兵士を敵とすることができないので、結局炎暑と糧食とを敵とするほかはなかつた。この無言の敵のために、フランス側の人馬は將棋だほしに倒された。かくしてナポレオンがモレンスクに到着したのは八月十六日であつた。

ロシアの主將バークレーは、モレンスクで敵を拒止しようと主張したバグラチオンの獻策を棄てて、依然退却を繼續したのである。バークレーの退却作戦はナポレオンに對しては結局最上策であつた。が、ロシア人一般はバークレーのこの處置を理解することができなかつた。皇帝アレクサンドルもまたこれを承認することができなかつた。そこでバークレーは遂に免職されて、一八〇五年戦役にオーストリア救援のために出陣したクツゾフがこれに交代した。その結果として、九月七日のポロディノの戦が見られた。クツゾフは皇帝と輿論とのために大に力戦したけれども、遂に敗れてモスコイにむかつて退却した。久し振りで愉快な戦勝を味つたナポレオンは、そのまま追撃を續行し、九月十四日モスコイに入城した。然るに翌十五日に疑問の大火が起つて五六日間繼續し、その間にモスコイ全市

の四分の三を焼却した。

モスコイ大火は没落に瀕したナポレオンの運命を最も露骨に豫言したものであつたが、飽くまで幸運の繼續を盲信したナポレオンは、以上の豫言に對して全く馬耳東風であつた。彼れはさきにモレンスクで味方の或るものの唱へた退却説を斥けて前進した結果、今圖らずもポロディノの戦勝を獲たのであるが、この戦勝をもつて一八一二年戦役の最後とする氣にはなれないで、相變らず深入りしてモスコイを占領したのである。

ナポレオンは當時敵の軍隊を問題とするよりも「ロシアの心臓モスコイ」を獲たことに遙かに大きな歡喜を感じてゐた。換言すれば、彼れがこの際戦略以上に政略を通重視したのは明瞭な事實である。一八〇五年ウイーン占領によつて戦役を解決することができないで、アウステルリッツ戦闘をしなければならなかつた近い過去のにがにがしい經驗を忘れてモスコイに囚はれたのは、拙策だつたといはねばならぬ。況んやモスコイがロシアの心臓としての價値を完備してゐなかつた事實に想到する場合においては尙更らである。なんとすれば、モスコイはロシアの舊都であるに違ひないが、それ以上の重要性を持つ首都ペテルブルグが存在してゐたからである。然るに飽くまでモスコイ占領の價値を盲信してゐたナポレオンは、十月十九日まで約五週間をそこに空費した。彼れはそこでアレクサンドルからの講和歎願を待ち設けてゐたのである。が、結局待ちくたびれてアレクサンドルに催促したけれども、依然として少しも要領を得なかつた。

かくしてナポレオンは、はじめて危険の接迫を痛感することができた。糧食不足は不相變だが、今やさきの炎熱の代りとして恐るべきロシアの酷寒がフランス軍を襲はうとしてゐたからである。ナポレオンは遂に決心して退却を開始した。敵將クツゾフは主として騎兵をもつてこれを追撃した。ところで、敗殘のフランス軍に危害を與へたのは

ロシアの正規軍ばかりでなく、かねて敵愾心を燃やしてゐた土民すら、所謂バルチザンを組織してナポレオンを悩ました。ナポレオンはゲリラ戦によつてナポレオン軍に對抗したイスパニヤ國民に無關心であつたやうに、ロシア國民の反抗心を全然問題としなかつたので、バルチザンの襲撃には豫期しなかつた危険を感じたであらう。フランス軍はポロディノ、スモレンスクと辛うじて落ち延びた。そのうち月も改つて十一月となる。やがて最初の吹雪がフランス軍を襲ふ。勝利に勇む敵の執拗な追撃と、零下八度・十二度・十八度・二十七度と下降した嚴寒と飢餓との襲撃のため、フランス軍は困憊の極に達した。當時人馬の斃死するものは殆んど算なき有様であつたが、それらの多數は敵の攻撃よりも寧ろ嚴寒と飢餓との犠牲になつたものである。ナポレオンは十月二十二日ベレシナ河に到着した時、その全軍と共に潰滅すべき状況にあつたが、驍勇ネー將軍の犠牲的力闘により幸に生命の無事を得、ベレシナを越えてウイルナに到着することができた。この時ナポレオンは本國に陰謀のある噂を聞き、一刻も早く歸還することの必要を感じ、十二月五日残軍の指揮をミュラーに委任し、單身馬車を驅りパリに向つて急行した。ミュラーの托された残軍は僅かに八千人であつたといふ。敗残の窮狀實に同情に堪へないものがある。

### 第十三章 自由戦役

ロシア遠征の當然の歸結としてあらはれたのが、一八一三年におけるヨーロッパ諸國民の「自由戦役」である。ロシア遠征の失敗によつてナポレオンの魔力は全く消滅し、またナポレオンの蒙つた兵力上の損失は、ヨーロッパ諸國民に乾坤一擲の機會の到來を知らしめた。彼等はナポレオンの壓制束縛を脱して自由獨立を得るために所謂自由戦役を起した。彼等とはプロシヤ人、ロシア人、オーストリア人、スウェーデン人等をさす。しかしながら、自由戦役の中心的指導者となつたものはプロシヤ人である。

チルジツト屈辱以後のプロシヤ人は、上は國王・王后から下は一平民に至るまで、ナポレオンに對する復讐心に燃えたと共に、フリードリヒ大王時代の軍制戦法を金科玉條とすることが餘りに舊式であつたことを自覺した。即ちプロシヤにおいては政治家スタイン（一七五七—一八三二）の起用となり、彼れによつて行政改革並びに自治制の施行を見、民間においては所謂徳義會なるものが組織され、反ナポレオンの愛國運動の機關となつた。軍制改革には有名なシャルンホルスト（一七五五—一八一三）が主として參與することになり、その結果として國民皆兵制の施行となり、且つ現役・豫備役・後備役の基礎が定められた。かくしてプロシヤは次第にナポレオンに對する復讐の計畫に熱中すると同時に、その實力を養成しつつあつたのである。

一八一三年二月二十三日、プロシヤ政府はロシアと攻守同盟を結び、三月十七日を以てフランスに宣戦した。プロ

シヤの周到なる準備に對して氣の毒な状態にあつたのはフランスの軍隊であつた。ロシアから倉皇歸還したナポレオンは、來るべき戦争を豫想し、大童になつて準備に忙殺されてゐた。その甲斐あつて五億フランの軍資金を得たが、新軍隊の編成には夥しい困難を感じた。一八一三年度の新兵十四萬は前年十二月中に入營したけれども、この程度では到底間にあひさうにもない。そこでナポレオンは以前にもさうしてゐたやうに、翌年度の兵士即ち一八一四年度の新兵を一年早目に召集せざるを得なかつた。が、それでもまだ不足とみて、外戦には使用しない規定になつてゐた國民衛兵八萬並びにイスパニヤ方面から召還した兵士五萬をも加へることにした。そんなわけで、ナポレオンがいくらあせつても、一八〇五年頃の精兵を得る見込がなかつたのは勿論だが、特科兵たる騎兵・砲兵を急設しなければならぬ事情にあつたのは氣の毒だつた。が、それよりも一番困つたのは將校下士の缺乏である。ロシア遠征における多數將校下士の犠牲が禍となつたのである。將校下士の養成は兵卒と違つて一朝一夕にはできないので、この點において一八一三年戦役のナポレオンは甚だ不遇であつたといはねばならぬ。そこでナポレオンはロシア歸りの將校下士の不足を補ふために、イスパニヤ方面のそれを若干召還したが、十分でなかつた。

しかしながらナポレオンは依然として敵の機先を制する敏活さを持つてゐた。彼れの作戦は聯合軍の合體するに先立ち、機敏なる運動によつて敵を各個に撃破するにあつた。が、敵もナポレオンの刺戟によつて運動輕捷となつたのか、ロシア軍の一部とプロシヤ軍とは早くも合併してゐた。ナポレオンは聯合軍をグロース・ゲルシエン（四月十三日）リュッツェン（五月二日）、パウツェン（五月二十日）、ドレスデン（八月二十六日・二十七日兩日）に撃破することができたけれども、この間オーストリアはプロシヤと同盟してフランスに宣戦し（八月十二日）約二十萬の兵を掲げて聯合軍に參加した。スウェーデンの皇太子ベルナドット（もとナポレオンの部將として有名だつた人）すら、ナポレオンに叛旗を翻し

た。聯合軍の部署を見るに、それは三軍に編成され、第一軍たるボヘミヤ軍の總數二十二萬はオーストリアの將軍シュワルツェンベルクの直配下にあり、第二のシレシヤ軍はブリュッヘル（一七四二—一八一九）の指揮下にあり、第三の北軍はベルナドットに率ゐられ、ベルリン附近に集中しつゝあつた。

聯合側の兵力は次第に集中し、ナポレオンの形勢は次第に非を加へるに至つた。有名なライプチヒ戦闘はかうした状況下に行はれたのである。ドレスデン戦勝後のナポレオンの活動は餘り香しくなかつた。彼れは次第に集中しつゝある聯合軍に對して、各個撃破の常套戦法を用ひようとしたがその效なく、却つて徒らに兵力を分散してゐる間に、敵の壓迫は次第に重みを加へ、結局僅か十七八萬の軍をもつて二倍以上の聯合軍をライプチヒ附近に迎へるの不利に陥つた。聯合軍の側から見れば、以上は豫定計畫の成功であり、ナポレオンの側から見れば、敵の衝中に落ち、兵力を分散してライプチヒに追ひ詰められたといふ稀有の戰略的失敗をしたわけである。十月十六日から十八日に亘つたライプチヒ戦闘においてナポレオンは珍らしくも完全な三面包圍をうけた。その結果ナポレオンは特筆さるべき最初の大戦敗を経験した。ロシア遠征の失敗といつても、それは主として炎熱酷暑といふやうな自然の敵若しくは糧食缺乏のためであつた。イスパニヤ征伐に十分な成功を収めなかつたといふ非難があつたとしても、彼れの親征した場合に可なりな効果をあげたのは事實であり、その後におけるウェリントン將軍の成功も、ナポレオンの留守に乗じたといふ感がないでもない。

ナポレオンがアスペルンでオーストリアのカール大公のために破られたのは事實だが、しかも彼れは一八〇九年戦役の大體的誘引となつたワグラム戦勝によつてアスペルンの戦敗の代償をつくることができた。然るに一八一三年戦役のナポレオンは、グロース・ゲルシエン、リュッツェン、パウツェン、ドレスデン等の戦勝を得たけれども、最後



にライプチヒの決戦において、兵力の不足のためであつたとはいへ、とにかく、正々堂々の敗北をしたのだから、それは確かに彼れの経験した全戦闘中の大黒星であり、それだけにまた聯合軍にとつての光輝ある戦勝であり、その結果から見ても、自由戦役の名を辱かしめぬ大收獲であつた。

## 第十四章 聯合軍の侵入

ライプチヒ戦敗後ライン河を目指して退却したナポレオンは、十一月二日マインツに到着、同月九日パリに歸着した。フランス軍を追撃した聯合軍が、ライン河畔に殺到したのは當然だが、さらに驚くべきは、イスパニヤ方面でフランス軍を壓迫しつつあつたウェリントンが、ナポレオンのパリ歸還の前日即ち十一月八日ピレネー山脈を越えてフランス國境内に侵入したことである。即ち今やフランス人は腹背敵軍の接迫を感じたといふナポレオン時代を通じて最初の珍事に遭遇したのである。しかも、フランスの國際的地位の著しく低下した事實を蓋ふことはできない。ライン聯邦の瓦解、イギリス、プロシヤのオランダ占領、オーストリア王國壓迫、ナポリ王ミューラーの背叛等が即ちそれであり、大陸封鎖の崩壊過程もそれらによつて露骨に表現されたわけだ。

それは確かにフランス人にとつての屈辱であつたには相違ないが、彼等多數の念願を占めてゐたものは、雪辱の念以上に平和愛好の精神であつた。彼等は陰謀家タレーランと同じくナポレオンの侵略的帝國主義に嫌惡を感じ、一自然國境に満足する國家主義の城塞に立籠らうと考へてゐた。然るに幸にして聯合側においても、平和を希望してゐたので、ナポレオンに向つてライン、アルプス、ピレネーの自然國境の認容を平和條件とする旨を申し出した。フランス立法院(ナポレオン時代を通じて形式上存続してゐた)の多數議員は聯合側の中込を受入れようと決議した。それにも拘らず、自然國境程度に到底満足することができなかつたのであらう、また戦敗後の平和條約を屈辱と考へてゐたの

であらう、ナポレオンは断然立法院を解散してその決議を排し、聯合側に向つては結局應諾の気色を見せなかつた。以上の経緯の後に聯合側は當然戦争繼續を決議した。プロシヤの参謀長グナイゼナウ(一七六〇—一八三二)等の主張の下に、迅速にライン河を渡河することに決定し、聯合軍の主力なるシュワルツエンベルヒ軍はバーゼル方面からラインを渡つてラングルを目指し、ブリュッヘル軍はライン中流を越えてメッツに向ひ、ビュロー軍はオランダ方面からフランスに侵入する豫定であつた。さうして、聯合軍のライン渡河は十二月三十一日以來實行された。然るにこの危険に臨んでナポレオンの天才とその實力とは遺憾なく發揮された。彼れは断然敵と交戦することを決意し、一八一四年一月二十五日パリを出發、その翌日にはシャロンに到着した。彼れの掌握する兵力は僅かに十二萬、即ち聯合軍の三分の一に過ぎなかつたが、それにも拘らず、聯合軍の不統一に乗じて、彼れは敵を各個に撃破しようといふ計畫した。彼れのこの計畫は當初頗る好調を示し、ブリュッヘル軍に對する三回の攻勢とシュワルツエンベルク軍に對する二回の攻勢とは、いづれも相當の成績を擧げた。殊にマルヌ河附近におけるブリュッヘル軍に對する戦勝は特筆さるべきである。

そこでシャチヨンの講和會議(マルヌ勝以前に開かれてゐた)におけるフランス代表コーランクール(一七七二—一八二七)に向つてナポレオンが自然國境固執を嚴命したのは當然である。しかしながら、聯合側代表は頑として一七九二年の境界を主張し、その間に大きな開きがあつたので、ならぬ協調の運びに至らなかつた。その後の戦況がナポレオン側に不振となるや、シャチヨン講和會議は決裂を見るに至つた。

聯合軍は漸次パリに向つて接近した。ナポレオンは聯合軍の背後に出てこれを苦しめようといふ大膽な戦略をとつたが、聯合軍の攻撃に堪へ兼ねてパリは陥落し、三月三十一日聯合軍のバリ入城となつた。しかしながら、ナポレオ

ンは意氣さらに沈衰することなく、軍を率ゐてフォンテンブローに至り、聯合軍と最後の決戦を試みようとしたが、今や將士戦を欲せず、パリにはタレーランを長官とする假政府が成立した。止むなくナポレオンは帝位を皇太子ローマ王に譲ることを決意し、この旨を聯合側に談じたが、その承認を得ず、結局四月十一日フォンテンブロー條約において聯合側の起草した無條件退位證その他に署名せざるを得なかつた。

フォンテンブロー條約の重要個條は大體次の通りである。

- (一) ナポレオンとその相續者並びにその子孫はフランス、イタリヤ、その他における主權を放棄すること。
  - (二) ナポレオンと皇后マリヤ・ルイザはその生存中皇帝若しくは皇后の尊號を保持すること。
  - (三) ナポレオンはエルバ島を私有財産として君臨し、ブルボン王室から年金二百萬フラン與へらるべきこと。
- かくしてナポレオンは四月二十日フォンテンブロー宮殿において近衛兵と悲愴な告別をした後、流謫のエルバに向つて旅立つた。フランス王位を聯合側から許されたルイ十八世は、ナポレオンがエルバ島に上陸したと同日の五月四日をもつてバリに入城し、五月三十日聯合側との間に第一回パリ和約を結び、一七九二年のフランス國境を維持することを許された。

## 第十五章 ワーテルローの戦

ナポレオンのエルバにおける謫居生活は、一八一四年五月四日から翌年二月二十六日まで繼續した。皇帝の尊號を許されたナポレオンは、三大隊の兵士と小形軍艦五隻を擁し、諸大臣を任命して熱心に帝政を實行しつつあつたやうであるが、それは表面上のことであり、彼れは内心島の生活に倦怠を感じた。ローマ皇帝の再來をもつて任じたナポレオンが、周圍二十哩、人口僅か一萬二千のエルバ島の皇帝たることに満足しなかつたのは無理もない。彼れは再舉の希望をもつてゐたのであり、そのためウィーン會議とルイ十八世登極後のフランス政治とに熱心な注意を拂ふことを怠らなかつた。そこで英澳普露四強の反目のためにウィーン會議が進捗しないこと、並びにルイ十八世の失政と不人望とが耳に入ると、ナポレオンは遂にエルバ脱出を企圖したのである。

ナポレオンはルイ十八世の年金不拂を口實とし、二月二十六日千餘の部下と共にエルバを脱出、三月一日南佛のジユアン灣に投錨、やがてパリを直指して運命を賭する大膽な進軍を開始した。かくして、七日グルノーブルにおいて一大珍事が起つた。同市の守備隊長マルシャンといふものが一隊を率ゐてナポレオン捕縛のためにやつてくると、ナポレオンは平然として敵前に立ち、胸を打ちながら「兵士等よ、若し汝等のうち汝等の皇帝を射殺しようとするものが一人でもあるなら彼れはさうすることができる。朕はここにあり。」と有名な臺詞を發した。と、ナポレオンの舊部下であつた兵士等は、一齊に「皇帝萬歳」を絶叫してナポレオンの部下になつてしまつた。十三日マーコンといふ

ところで、ナポレオンは彼れの舊部將として有名な、さうして現在ブルボン家からナポレオン討手の大將を承はつてゐたネー將軍を新たに麾下にくはへ、十九日威風堂々としてフォンテンブロー附近に到着した。この時ナポレオン歡迎の聲はフランス全土を蓋うてゐたので、ルイ十八世はそのままパリを脱出してイギリスに向つた。かくして「予は一發も放たずしてパリに入城するであらう」と言つた豫言通りに、ナポレオンがパリに入城して政權を回復したのは翌三月二十日である。

ところでウィーン會議における列國代表は、ナポレオンのエルバ脱出の報を得て、最初は半信半疑であつたが、三月十三日に至りナポレオンが既に南フランスに上陸してパリに進軍中であるといふ確報を得、周章狼狽、ナポレオンへの對策を講ずることにした。その結果ナポレオンに對して斷然たる攻勢を取ることに決定し、英露普澳の聯合軍六十五萬は三方面からフランスに侵入する作戰をとることになつた。即ちベルギー方面にウエリントン、ブリュッセルの兩軍、ライン方面にバークレー、シユワルツェンベルク兩將軍、イタリア方面にはオーストリアの別軍を配置し、六月二十七日を一齊の進軍期と決定した。

これに對するナポレオンの準備はどうかと見るに、彼れがその素質は別問題として兎に角二十餘萬の兵數を集め得たのは賞讃に値する。だが、彼れに對する大打撃として、老練の宿將が缺乏してゐた事實は看過することができない。往時の十八元帥にして現在ナポレオンの掌中に残つてゐるものは僅か數人に過ぎなかつた。驍勇ランヌはアスペルンで戦死し、ベルナドットはスウエーデンの皇太子となり、マッセナは老年で用ゐることができず、マクドナル、ヴイクトル、サン・シル等はブルボン家に忠實であり、ミュラー、マルモン、オージュローは一八一四年戦役の裏切者であり、モルチエは病死し、ジュノーは發狂した。さうして敵も味方も許してゐた往年の參謀總長ベルチエは氣の毒

にも狂死した。以上の損失のうちで、ベルチエとミュラーとを現在利用し得ないのが、ナポレオンに對する最大の撃だつた。前者は參謀總長、後者は騎兵集團長として他の追隨を許さざる才能を有したからである。そんなわけでナポレオンの掌中に殘存するものは、ネー、ダヴー、スール等數人に過ぎなかつた。しかも智勇兼備のダヴーは陸軍大臣の地位を去り得ない事情にあり、新參謀長スールはベルチエほどの熟練をもたなかつたので、それらは來るべきワテルロー戰鬪のために大きな損失であつた。

さてナポレオンの聯合軍に對する作戰は、自ら主力軍十三萬を率ゐてベルギー方面に出で、別軍をもつてライン方面に備へしめるにあつた。ナポレオンが主攻撃點をベルギー方面に見出したについては當然の理由がある。即ちパリに對してベルギー方面が最も近く、侵入し易い地勢にある上に、聯合側の中堅と見らるべきイギリス、プロシヤ軍はこの方面に出陣してゐたからである。殊に當時英普兩軍が比較的隔絶してゐたので、その中間に突入してこれを各個に撃破する自信に満たされつつ、ナポレオンはこの舉を斷行することを決意したのであつた。

もつと詳しく言へば、英將ウエリントンには本營をベルギーの首都ブリュッセルに置き、十萬の兵をブリュッセルとモンスとの間に配置し、普將ブリュッヘルは本營をナミュールに、麾下十餘萬の兵をシャルロア、ナミュール、リエージュの間におき、兩軍の間約二十里の距離を距ててゐたので、烟敏なナポレオンがこの二十里の間隙を見逃さなかつたのは當然である。

六月十二日早朝ナポレオンはパリを棄て、十四日軍隊の所在地たるボームンに到着、翌日ネー將軍をしてシャルロアにあつた普軍の前衛を撃退せしめた。然るにブリュッヘルはリニーにおいて抵抗を試み、十六日有名なりニーの戰となつた。ナポレオンは得意の中央突破で優勢な敵を撃破した。この戰においてブリュッヘルは負傷したので、プロ

シヤ軍は參謀長グナイゼナウ指揮の下に退却することになつた。この際におけるプロシヤ軍の退却方向こそワテルロー勝敗の分岐點をつくつたものであるから、グナイゼナウの處置は刮目して見るべきものがある。さて、グナイゼナウはブリュッヘル自身がいつてゐたやうに「ブリュッヘルの頭腦」であつた。彼れは東の本街道ナミュールへの平凡な退路を求めることなしに、ウエリントンとの出來るだけの連絡接近を希望する一念から、斷然北方ワールへの間道を傳はつて退却した。ナポレオンは部將グルーシーに兵三萬を授けてプロシヤ軍を追撃せしめ、自ら主力を率ゐカトル・ブラーに向つて前進した。

六月十二日リニー戰鬪と同じカトル・ブラーにおいて英佛の會戰があつた。英軍の主將ウエリントンはナポレオンの出撃に對して全然無智であり、十五日普佛兩軍の間にシャルロアの戰があつたその當夜の如きは、ブリュッセル市内のリッチモンド公爵夫人の舞踏會に臨んでゐたほどであるが、突然シャルロアにおける普軍戰敗の報を得、倉皇として兵三萬をカトル・ブラー方面に派遣して、リニーのプロシヤ軍と連絡せしめようとした。ナポレオンは前述のやうに自ら主力を率ゐてリニーに向つたのであるが、同日ネー將軍と英軍との間に激戰が行はれた。ネー將軍は自ら陣頭に立つて奮戦したが、「ネーは最早や昔日の彼れでなかつた」とセント・ヘレナでナポレオンが批評したやうに、どことなく氣魄にかけるところがあつたものか、遂に英軍のためにカトル・ブラーの陣地から少しく後方に撃退された。ナポレオンは同夜方面に進軍、大にネーを叱責したが、一方ウエリントン軍はリニーの戰敗を聞き、同夜のうちに北方に退却してワテルロー附近に陣地を占めた。

六月十五日夜ナポレオンは確かに豫定戰略の成功を信じてゐたに相違ない。リニー戰敗後におけるプロシヤ軍の東方退却とグルーシーの追撃の效果とを疑はなかつたナポレオンとしてさう考へるのが當然だからである。そこでナポ

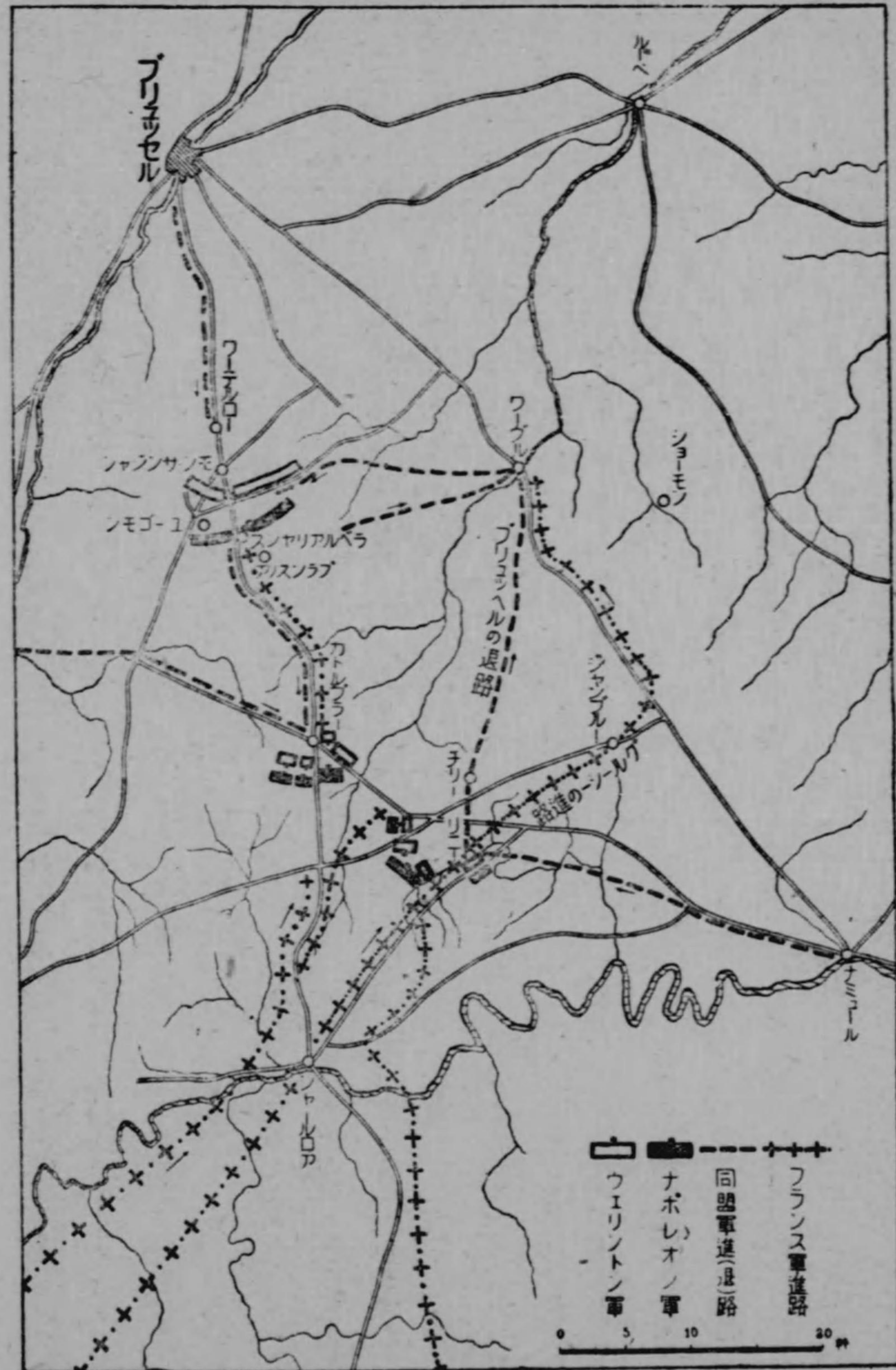
レオンはウエリントン軍を撃破する目的をもつて十七日夕方近い頃辛うじて来るべき新戰場間近に到着した。雨天のため道路は泥濘を極め著しく砲車の運動が妨害された結果として、以上のやうな遅延を見たのである。そこでナポレオンは十七日中には戦闘を開始する餘裕をもたなかつた。十八日の朝が来ても依然として静止の状態を繼續し、午前十一時半頃になつてやうやく攻撃の火蓋をきつた。フランス軍の珍らしい以上の緩慢は、後に述べるグルーシーの追撃失敗とともに、ワーテルロー戦敗の二大原因であつたと見られる。もつともナポレオンの發した命令によると、全軍一齊の攻撃開始は午前九時といふことであつた。夏の午前九時は大分遅い。ナポレオンの従來の開戦時間にくらべて二三時間おくれた形だ。察するに、土地の泥濘が砲車の活動を不便ならしめたために、土地の乾燥するのを待つたのであらう。幸にして十八日午前八時には雨止んで一天晴れ渡り、太陽の光線と折から吹き出した強風とは、恰も天佑を與へつつあるかのやうに見えた。が、飽くまで自然力に依頼しようとしたところに、回復すべからざる時機の遷延があつた。結局午前九時攻撃開始の命令も實行されずに午前十一時半頃までのばされた。かう考へてくると、ワーテルロー戦敗の一つの理由として、天運が大に關係してゐた。即ちそれまでは多く運命の寵兒であつたナポレオンが今不幸にして運命から見離されたといふ事實を重要視する必要がある。しかしながら、われらはそれ以外にナポレオンの精神的弛緩乃至戰略的失敗を考察して見ようと思ふ。

ナポレオンが六月十二日早朝パリを去つてボーモンまで駆けつけた場合の精神的緊張、英普兩軍の二十里の間隙を發見してこれを各個に撃破しようとした彼れの戰略は、いづれも讚歎に値する。が、リニー戦勝後ワーテルロー戦闘に至るまでのナポレオンの心理状態のうちに、われらは可なりな精神的弛緩を見出すことができる。十六日夜ウエリントンの後を追跡するとか、十七日中に戦闘準備を今少しく進捗させておくとか、十八日早朝土地の泥濘を冒して戦

闘を開始するとか、若しもナポレオンの精神が緊張してゐたら、そのいづれかを取つたであらう。十八日午前八時頃ナポレオンがスールと共に悠々朝食をとつてゐたのは、戦闘開始の豫定時間が午前九時であつた點から考へれば、彼の沈着といふよりも寧ろ弛緩を表明したものでなからうか。今一つわれらの注意すべき點は、ウエリントンに對するナポレオンの輕蔑の念から來た戰略的失敗である。ナポレオンが朝食を済した時分にネーが來て、「私は次のことを陛下に報告しなければならぬ。ウエリントンの退却は決定した。若し陛下がこれを攻撃しないならば敵は陛下の手から免れるであらう」といつたのに對して、ナポレオンの答は次の通りだつた。「お前は間違つてゐる。ウエリントンはもう退却の餘裕を持たない。彼れは損害の前に彼れ自身を暴露しようとしてゐる。彼れは今散を投げたところだ。しかし勝利はわれらのものである。」ナポレオンにしても、ネーにしても、ウエリントンを輕蔑しきつてゐる氣持をよくそこにあらはしてゐる。それが彼等の運動を緩漫にした一つの理由であらう。

ウエリントンは華かな敏活な大膽な將軍ではなかつた。彼れの戦法は舊式だつた。だが、彼れには喰ひさがつて頑強に抵抗する力があつた。ナポレオンはウエリントンの特徴を理解しなかつた。ナポレオン戦史を通じて、われらはナポレオンの陸上における三大勁敵としてカール大公とブリュッヘルとウエリントンとを擧げることができる。が、三人のうち最も俊敏な戰略家でナポレオンの好敵であつたのはカール大公だつた。ブリュッヘルの大膽性とウエリントンの持久性とは、獨立したそれ自身としてナポレオンの敵でなく、その合成力によつてはじめて効果的になるものであつた。だから、この兩者を分斷することは兵力上の理由からばかりでなく、以上の點からも絶對必要だつたのである。ところで、問題はリニー戦勝後ナポレオンが自ら兩者のいづれを攻撃するのが適當であつたかといふ點にかかつてゐる。われらはリニー戦闘後ナポレオンがネー教授のためカトル・ブラー方面に若干の兵を送つてウエリントン

ワテール戦図



軍を支持せしめ、自ら主力をもつてブリュッヘル軍を急追して一舉にこれを粉碎する作戦に出るのも一策であつたらうと思ふ。然らざれば、彼れはカトル・ブラー方面からウエリントン軍を急追して、勝を制する策に出づべきであつたらう。とにかく、そのいづれか一方を徹底的に解決するのでなければ、各個撃破の目的を遠ざかることになる。

さて、ワテール戦圖そのものの敘述に復歸する。フランス軍はラ・ベル・アリアンヌを中心として、モン・サン・ジャン中心のイギリス軍に對して戰鬪を開始した。これに對するウエリントンはプロシヤ軍の來着するまで唯頑強に陣地を死守する考であつた。然るに幸にしてリニー戰敗後ワテールに退却したプロシヤ軍との間に連絡ができ、午後早々プロシヤ軍の來援があるべきことを確信したウエリントンに抵抗の勇氣が増加したのは當然だ。これに反して形勢甚だ恵まれなかつたのはナポレオンの側である。といふのは、普軍追撃を命ぜられたグルーシーが不覺にも大失敗を演じたからである。普軍の退却方向をナミュール方面と誤解したグルーシー(ナポレオンすらさう思つてゐた)は十七日リニーを出發、途中ジャンブルといふところに宿營した。天候と道路との關係からでもあつたが、同日の行軍はナ哩六時間といふ貧弱な行程であつた。同夜彼れは普軍がワテール方面に退却した事實をはじめて知ることができた。但し、彼れはワテールに退却したのはプロシヤ軍の一部に過ぎず、ブリュッヘルの本軍はリエージュもしくはナミュール方面へ分進したものと誤解してゐた。しかしながら、さすがに彼れはワテール行きを決意し、十八日午前三時發のナポレオンへの書狀に前記の誤報を書き記したほか、彼れが將にワテールに向つて出發せんとしつつある旨をつけ加へた。グルーシーの便がナポレオンの許に到着したのは丁度午前十時であつた。ナポレオンは早速グルーシーに向つてリニーにおけるプロシヤの敗軍全部がワテールに退却した事實を報じ、さらに彼れにむかつてワテール行の後、ワテール方面に來援の必要あることを暗示した。

しかしながら、ウエリントンが連絡あるワーヴルのプロシヤ軍の來援を期待するよりも、ナポレオンはグルーシーの來援に對して頼りなさを感じてゐたであらう。ところで、午後一時頃東方約六哩のランベール森附近に一つの黒點が見えた。ラ・ベル・アリアンスの本陣にあつたナポレオンの單眼鏡註一にうつつたその黒點は、プロシヤ軍の前衛ビュロー軍であつた。

〔註〕われらは單眼鏡をかざしてゐるナポレオンの英姿を眺める毎に、科學的發明品にまだ十分恵れなかつた彼れを淋しく氣の毒に考へる。彼れが雙眼鏡をもたなかつたといふばかりでなく、あの姿から次のやうな色々な事實が聯想されるからである。彼れは全然汽車を知らなかつた。汽船のことは耳にしてゐた筈だが、彼れはこれを使用する機曾を持たなかつた。また彼れの使用した銃砲は今から見れば随分貧弱なものだつた。即ちそれは前装燧石式で舊式な黒色火薬を用ゐてゐた。

プロシヤ軍がワーテルロー方面に進軍した後にワーヴルに到着したグルーシーは、プロシヤ軍の行方に對して無智であつたため、そのままワーヴルを動かすにゐた。ナポレオンは急使をワーヴルへ送つた後、プロシヤ軍來着以前にイギリス軍を撃退しようと思ひ、午後二時頃ネー將軍指揮の下に全騎兵の襲撃が行はれた。これに對してウエリントンは二十六大隊の歩兵をもつて十三の方陣を編成し、これを二線に配備して敵騎の強襲に對抗した。サラセン騎兵の強襲に對抗したフランク歩兵に比較さるべきものがある。が、驍勇ネーはやがて敵の第一線を突破し次いで第二線に殺到した。然るに時既に午後五時、プロシヤの前衛ビュロー軍はフランスノアに到着して、フランス軍の側面を攻撃しつゝあつた。そこでナポレオンはネーからの要求を拒絶して、豫備隊をビュロー軍に差し向けるほかはなかつた。そのうちにブリュッヘル軍は續々來着したが、グルーシー軍はたうとう顔を見せなかつた。ナポレオンは午後

八時頃近衛兵による最後の強襲を試みたが失敗にをはつたので、遂に戰場を放棄して六月二十一日パリに歸還した。

パリ歸還の翌日即ち六月二十二日ナポレオンは國民の前に退位を宣言した。三月二十日彼れがパリに入つてフランス皇帝の地位を回復してから茲に九十五日間、この間を俗に「百日天下」と稱する。

さうして、その後にフーシェを委員長とする假政府が組織された。七月七日英普兩軍はパリに入り、ルイ十八世の復位となつた。ナポレオンはアメリカに亡命する目的をもつてロシシユフォールに逃れたが、イギリス側の警戒が嚴重を極めたので、餘儀なく英艦に身を投じて保護を求めた。ナポレオンは結局軍事上の捕虜として流謫の刑を宣告され、十月十六日絶海の孤島セント・ヘレナに送られた。かくして華麗を極めたナポレオンは、淋しくもここに最後の幕を閉じた。

本論

ナポレオンの政戦兩略



## 第一章序 説

人類に生存競争がある以上、歴史のなから戦争といふ事実を排除することができない。従つて戦史が歴史の重要素をなしてゐた事實は蓋ひかくさるべくもない。過去において歴史上最も多数の頁を占めたものは、疑もなく戦争と政治との關係であり、これを除外して歴史を考へることは不可能である。戦争永續説が有力であるのは當然だ。また戦争永續といふ事實をただ冷静に承認するばかりでなく、戦争をもつて頽廢文化を破壊し、新文化を建設するもの、即ち戦争を文化建設の母胎とする學者も出た。トライチユケなどがその一人である。しかしながら、宗教的な若しくは倫理的な立場に立つ人々は、戦争を罪惡とし、これを惹起すべからざるものと見る立場から、理想として永久平和説を唱へた。或は永久平和を理想とする假面にかくれて、表面には平和を唱へながら、内面には戦争を意圖したのもある。ローマの世界政策はパックス・ローマーナ（ローマの平和）即ちローマ支配下に世界の平和を招来しようといふ、實は帝國主義的世界政策であつたのであるが、かうした意味の世界政策の理想は、神聖ローマ帝國の滅亡と共に消滅したのではなかつた。神聖ローマ帝國の破壊者ナポレオンにしても、ローマ的世界政策の實現を希望してゐたと考へられるからである。

今次の歐洲大戰（第一次歐洲大戰をさす）は、英獨兩國の世界政策の競争を根本原因としてゐるが、この事實から考へても、戦争の絶滅などは到底期待さるべくもないのである。世人の多くは、獨佛戦役・露土戦役以後今次の歐洲大戰

に至る間の平和工作、三國同盟對露佛同盟、若しくは三國同盟對三國協商による勢力均衡や、ヨーロッパ列強の軍備競争による武装平和、以上の歴史的事實に眩惑されて、歐洲大戰の勃發を意想外の出來事と考へてゐた。しかしながら、これは歴史の本質を把握し得なかつた結果の短見であつて、大戰は決してセラエボにおける一發の銃聲から偶然に喚起されたものでなく、その根柢には奥露のバルカン政策の競争、就中英獨世界政策の競争があつたのであり、かくして起つた戦争は、必然的な所産であつたとしか考へられない。

武装平和は假面である。軍備競争があり、帝國主義の競争があるところに、平和は望まれない。さきにも述べたやうに、獨佛戰役・露土戰役から歐洲大戰に至る間の若干年代に比較的平和が続いたとしても、事實それは大動亂に至るまでの準備時代であつたのである。私は斷言する、軍備のあるところに必ず戦争があるといふことを。この意味において、私は戦争永續論者である。戦争を單なる過去の事實と見るばかりでなく、これを將來必ず起るべきものと豫想する以上、戦史の研究は絶対必要事項でなければならぬ。われらは戦史のない歴史を考へることができない。歴史のあるところ必ず戦史があることをわれらは確信する。

戦争は國家の維持・發展を目的とする國策を達成するための手段である。クラウゼウィッツが「戦争論」のなかに「戦争は國家政策の道具なり」と主張したのは、理由のあることである。ところで、國策の樞軸をなすものは政略であり、戦争指導の重心をなすものは戦略であり、従つて政略兩略の渾一は戦争遂行の要件でなければならぬ。さうして、私はこの原則を立證する戦例として一八〇九年佛奧戰役を選び、この戦役を主として政略兩略の立場から考察することにした。ナポレオン戦史を政略兩略の立場から見るといつても、多くの人々の視線は、イタリア戦役やマレンゴ、アウステルリッツ、イェナ、モスコ、ライプチヒ、ワテローあたり注がれてゐるが、一八〇九年役に對

する關心は比較的少ないやうである。私をして同戦役を研究題目に取らしめた動機が、さうした見方に對する不満の上に存したのは事實である。

しかしながら、私が一八〇九年戦役を選定した理由としては、もつと根本的なものが擧げられなければならぬ。私はナポレオンとその好敵であつたオーストリアの大公カールとの間の政略兩略の比較、戦争に至るまでの兩雄の準備の比較について、異常の興味を感じたために、特にこの題目を選んだのである。開戦にいたるまでの政略兩略において、ナポレオンは確かにカールに一籌を委した。ナポレオンが精兵二十五萬人をイスパニヤに閉ざされ、オーストリアに對する外交政略によつて戦機を遷延し、新募の兵を訓練した後、敵の意表に出て攻勢を取らうとした戦略は見事失敗してゐる。ナポレオンは珍らしくも受けて立つたのである。しかしながら、いよいよ開戦となれば、さすがはナポレオンであり、忽ち守勢を變じて攻勢となし、カール軍を撃攘して、ウィーンを占領した。然るにその時ナポレオンは戦略をはなれて政略にとらはれ、ウィーン占領によつてこの戦役が終結するものと誤算した。これはナポレオンの大失敗であつた。カールの主力軍が健在である以上、これを殲滅する定石の戦略を第一義とすべき筈なのに、ナポレオンがウィーン占領の効果を過大視したのは、大きな錯覺であつた。そればかりでなく、ナポレオンが味方の兵力の分散のために、カール軍よりも遙かに劣勢な兵力をもつて、アスペルン・エッスリンゲンの戦いで敗戦の悪記録を残したのは、戦略上の缺陷を暴露したものである。しかしながら、敗戦後におけるナポレオンの緊張、缺漏なき戦略的準備、その結果としてのワグラムの決勝は、特筆大書に値する。

一八〇九年といふ年は、ナポレオンが運命の暗礁の上に載せられた時である。彼れの心理状態は緊張と弛緩との間を往來してゐた。彼れは自己陶醉に陥つたために民心の機微を省察するの明を失つた。オーストリア、イスパニヤ、

その他の敵國側に起つた反ナポレオン思想がいに恐るべきものであるかを判断する眼識を失つてゐた。政戦兩略の渾一を缺くに至つたのはこれがためであり、かくして全盛のナポレオンの周圍には、一沫の衰運が暗示されつつあつたのである。しかしながら、全盛の一路を直進しつゝあることを盲信してゐたナポレオンは、その運命的轉換の危機に對して殆んど無關心であつた。ナポレオンのかうした心理的弛緩こそ、彼れをエルバやセント・ヘレナに送つた大きな理由であり、私が一八〇九年佛墮戰役の研究を思ひ立つた動機もここにあるのである。

## 第二章 一八〇九年佛墮戰役の起原

ナポレオンといふ英雄の出現とともに、オーストリアは次第にその領土を削られていつた。カンボ・フォルミオ條約の後に、フランドル及びイタリア領（ヴェネチヤを除く）を失ひ、リユネヴィール條約の後に、ライン左岸及びアデミージュ西岸に達するイタリア領を失ひ、プレスブルグ條約の後は、チロール、フォラルベルグ及びヴェネチヤを失ひ、その面積は三萬平方哩、その人口は三百萬人を越えてゐたところのこの廣大な領域、多數の人口を失つたオーストリアは、一八〇六年ライン同盟成立と共に、八六二年以來連綿と續いた神聖ローマ帝國たるの地位を失ひ、單に一個のオーストリア帝國となつた。

さうしてオーストリアをかくの如き悲惨な境遇に陥れたものは、ナポレオンその人であつた。それ故に、オーストリアがナポレオンを終世の敵とし、彼れの手からこの廣大なる舊領地、舊人口を回復せんとする希望をもつたのは理の當然である。一八〇九年戰役の根源は、實にこの點に存してゐるのである。しかしながら、開戦の時機は容易に來なかつた。なんとすれば、連年の敗戦によつてオーストリアの財政は紊亂し、軍備も不整頓であつたために、妄りにナポレオンに對して兵を起すのは卵を石に投げつけるのと同様であつたからである。

一八〇六―七年ナポレオンがプロシヤと事を構へた時は、確かにオーストリアがフランスを攻撃すべき絶好の機會であつた。その時プロシヤはオーストリアに勧誘してナポレオンを背後から襲はしめようとした。けれども、オース

トリヤの財政と軍備とは、到底これを断行する餘裕を與へなかつた。しかしながら、オーストリアはいかに財政の逼迫を來してゐたといへ、舊領土回復の企てのために、財政の許す以上に軍備の伸張を急いでゐた。

一八〇五年ウルムの會戰でマツクが大失態を演じた後、オーストリアはカール大公に軍制の改革を一任した。カールの着々として倦まざる軍備擴張は、ナポレオンに相當の威嚇をあたへた。かうした熾烈なる敵意を有するオーストリアをフランスの背後におくことは、ナポレオンの最も嫌惡するところであつた。ナポレオンの政略はオーストリアの戦備を黙認することができなかつた。そこでナポレオンは次のやうな言葉をもらしてゐる。

余の政略は余の背後に敵意ある王朝の存在を許さない。(ローズ著『ナポレオン傳』)

今やナポレオンの對奥政略は俄然として變つて來た。彼れはロシアを懐柔して、オーストリアに對する障壁をつくり、オーストリアをしてフランスに對する戦意を放擲せしめんとする策を取つた。そこで、ナポレオンの對奥政略を理解するには、まづ遡つて彼れの對露政略を見なければならぬ。

彼れのロシア懐柔に用ひた餌は、フィンランドとトルコとであつた。エルフルト會議(一八〇八年)におけるナポレオンの對露政略は、明らかにこの消息を證明してゐる。ナポレオンは既に一八〇七年のチルジツト條約において、露帝アレクサンドルにむかひ、ロシアのフィンランド侵略を黙認し、なほトルコ分割の意旨あることを告げ、エルフルト會議において再びこの事を議した。然るにフィンランド併合はベートル大帝以來の素志であり、トルコを併呑して、コンスタンチノールを國都とすることは、女帝カタリナ以來の大抱負であつた。さうしてカタリナの子孫と生れ、彼女の空想を承け繼いだアレクサンドルは、常にコンスタンチノールに垂涎してゐた。ナポレオンはよくアレクサンドルのこの心理状態を洞察してゐたから、巧みにこの美味な餌をアレクサンドルの前に提供したのであつた。

ナポレオンの政略は見事に成功し、アレクサンドルは、フランスがオーストリアに襲はれた場合には、オーストリアの敵となるであらうとまで申しでた。

ところがナポレオンは、この御馳走をむさむさとロシアに獨占させるやうなお人好しでなかつた。彼れが眞の敵と考へてゐたのは、ロシアやオーストリアではなく、實は海上の王として跋扈するところの英國であつたから、英國の地中海政略を妨礙し、エジプトの地盤を覆し、印度に至る交通を遮断する必要上、トルコを人手に渡すことは、ナポレオンの全く忍び得ないところであつた。人手に渡すよりも、自分の手に收めたいといふのが、ナポレオンの希望であつた。彼れの意志は、フルニエの叙した左記の言葉によつてつくされてゐる。

(一) ナポレオンは政略上の將棋盤において、二つの巧妙な掛引でロシアを東方に詰めこんでしまつた。ナポレオンはロシアが彼れのシレジャ併合に同意するならば、露の下ナウ諸州獲得に援助を與へるであらう。またその場合彼れはロシアから撤兵するであらう。もし露帝がワラキヤから彼れの軍隊を撤兵しないときには、ナポレオン自らもドイツから撤兵しないであらうといつた。すなはち、ナポレオンは甚だ安固な位置にあつたのである。なんとすれば、シレジャは普奥兩國を分離する州であるから、これによつて兩國を制し、さらにワルソーをも制することが出来るからである。(フルニエ著『ナポレオン傳』)

(二) ナポレオンはアレクサンドルをしてスウェーデンに宣戦し、フィンランド征服を断行せしめた。なほ彼れは部將ベルナドットがホルスタインに一軍を擁し、ロシアを救援するの時機を待ちつつある旨を告げた。(フルニエ著『ナポレオン傳』)

將棋盤上に動いたナポレオンの二手を吟味してみると、彼れの心理状態を十分に洞察することが出来る。ロシアに

對してトルコ分割の意志を告げながら、なほ巧みに口實を設けてワラキヤ撤退を強ひたのは、ナポレオンがその心底においては露にトルコの分前を與へる意志をもたなかつた證據ではないか。

なんとすれば、ナポレオンがシレジアに頑張つて、ワルソトを威嚇することは、ロシアにとつて少なからざる打撃であつたし、またこの痛手を救ふためには、どうしてもワラキヤを撤退しなければならぬやうな運命にならざるを得ないからである。同時にナポレオンは、オーストリアにむかつてトルコ分割の相談を持ち掛けた。ところが、オーストリアはセルビアとブルガリヤの一部とを獲得したい考へからして、早速ナポレオンの相談に乗り出したので、カールやスタディオオン等は躍起となつてゐた。

パリ駐劄大使メッテルニヒも、賛成者の一人として彼等の意志を代表してゐる。彼れが一八〇八年一月十八日スタディオオンに送つた手紙のなかに、次のやうなことが書いてある。

我等はトルコを救ふことができない。我等は分割に與し、出来るだけよき分前を得るやうに努力しなければならぬ。我等は佛國皇帝の侵略的主義に反抗することはできない。そこで我等は、ナポレオンの注意を我等以外に牽制しなければならぬ。(メッテルニヒ『覺書』)

すなはち、塙人は自國の利益上トルコ分割に賛成し、同時にナポレオンの眼をトルコに集中せしめ、オーストリアに對する油斷を見すました後、周到に準備を完成しようといふ政略を持つてゐたものらしい。

一方ナポレオンは、トルコを餌にして、塙露兩國を争はしめようとしてゐた。さうしてロシアをして、オーストリアに敵意をもたしめ、彼れがオーストリアに襲はれる時、ロシアをして少くとも中立を保たしめる政略に成功することができた。

ナポレオンの第二の對露政略は、ロシアの注意をフィンランドに集中せしめるにあり、これがために、彼れはロシアに援兵を送ることを約束した。然るにこのフィンランド併合といふことは、スウェーデンがその背後にイギリスといふ立派な援助者を持つてゐたから、なかなか容易なことではなかつた。ロシアはフランスにむかつて頻りに援兵を送る約束を呆すべきことを督促したが、ナポレオンは決してこの約束を實行しようとはしなかつた。ナポレオンが一八〇八年四月二十五日タレーランに送つた書中には、次のやうな文言がのつてゐる。

予は軍隊を輕々しくスウェーデンに送ることができない。なんとすれば、そこにはなすべき何物もないからだ。

(フルニエ著『ナポレオン傳』)

ナポレオンが援兵を送らなかつたのには、二つの理由があつたやうに思はれる。

(一) ロシアをしてフィンランドに勢力を傾注せしめ、バルカン半島を顧るの違なからしめること。

(二) オーストリアに對する戰備上、兵力を割くことを欲しなかつたこと。

すなはち、ナポレオンはこの策を實行して、必然的にワラキヤ駐在の露兵をフィンランドに移らしめ、巧みにロシアの東方發展を喰ひ止めることができた。この事實の裏を考へてみると、私はどうしてもナポレオンが積極的にロシアの援助を求めたと考へることはできない。ナポレオンがこの時オーストリアとの戰を恐れてゐたのは事實だが、ロシアの援助なくしてはオーストリアを破ることができないといふやうな弱根は持つてゐなかつた。

もし、ナポレオンに眞にロシアの援助を求める意志があつたならば、バルカンにおいてロシアの自由發展を許し、あはせてフィンランド征服の援助をなすべきであつたらう。だが、ナポレオンの遠大なる抱負は、對露塙策以上に對英策に傾いてゐたから、バルカンといふ餌によつて塙露二虎を争はしめ、就中ロシアをフィンランドに傾注せしめた

上、漸次フランスがバルカンに手足を伸ばす根拠をつくつた。ナポレオンはこれに満足せず、さらに彼れの慣用手段たる威嚇を塙帝に加へるため、一八〇八年十月十四日、塙帝に送つた書中に次の事を記してゐる。

陛下の帝位は余の同意によつて立つてゐる。これ兩人の間の事件は既に解決を告げ、余が最早や陛下より何物をも要求しない最良の證據である。……陛下は十五年以來の戦争によつてやうやく終局を告げた葛藤を再開始してはならない。陛下は戦争を惹き起しさうなあらゆる運動を禁止しなければならぬ。(ランフレイ著「ナポレオン傳」)

ナポレオンがメツテルニヒに與へた威嚇の口吻は、ロレーヌ・ベートルによつて次の如く引用されてゐる。

ナポレオンはオーストリアの行動に對して、武装によつていかに返報するかを告げて、十分な威嚇を與へた。彼れはロシアとの信義を主張して、さらにロシアはオーストリアの準備をもつて自國に危険を與へるものとし、これに迫害を加へるだらうとまで言及した。(ロレーヌ・ベートル著「ナポレオンとカール」)

彼れはさらにオーストリア人にむかつて威嚇を試みた。彼れがウィーン、プレスブルグの新聞紙に掲げた記事の内容は、次の通りである。

ナポレオンは塙人に告げるに、イスパニヤにある彼れの軍隊から一兵をも撤することなくして、十五萬の兵をイン河に動かし得ることをもつてした。(同書)

ナポレオンはこれらの威嚇によつて、塙人の心膽を寒からしめた。さうして、イスパニヤの動亂を定めた後、そこにあるところの精銳二十五萬の軍隊をもつて悠々と中原に事をなさうとしたのである。

翻つて、ナポレオンのこれらの政略に對してオーストリアはどんな態度をとつてゐたか。オーストリアの對佛政略はどんな程度に効果を擧げることができたか。彼等は心の中に刃を研ぎながら、表面はあくまでナポレオンに對して

従順な態度をとつた。パリ駐在大使メツテルニヒは、ナポレオンからオーストリアの戦備を詰問された時には、常に戦意がないことを繰り返してゐた。さうして、その間常に英國から軍資の援助を受けることに成功し、なほプロシヤ及びロシアと同盟を結ぶことを苦慮してゐた。

プロシヤは一八〇六―七年の役において、ナポレオンからその領土の殆んど半部を奪掠された。のみならず、敗戦の結果國力は疲弊の極に達し、もはやナポレオンに抵抗する力はないやうに思はれた。しかしながら、プロシヤ固有の燃えるやうな愛國心は、戦敗と共にますますその火勢を高め、スタイン等はナポレオンに對して、第二の復讐を思ひ立ち、オーストリアと同盟して、ナポレオンを倒さうとする策略を企ててゐた。

詩人アルントは熱烈なる辯口をもつて次の如く壯語した。

自由とオーストリアとは我等の鯨波となるであらう。ハプスブルグ家萬々歳。(フルニエ著「ナポレオン傳」)

これは普人の精神をそのままに代表してゐる言葉であつた。普人はナポレオンにむかつて頑強に抵抗しつゝあるイスパニヤ人の壯舉を快しとし、彼等に劣らざる一大快舉を思ひ立ち、異口同音にアルントの言葉に聲を揃へてゐた。オーストリアはこの状況を見て、我が事成れりと考へ、早速同盟を普國政府に申し込んだが、なかなかさう旨くはゆかなかつた。ナポレオンから受けた新たな大打撃に萎縮した普王フリードリヒ・ウイヘルム三世は、今はただ姑息なる平和を望むだけで、輿論などには耳をも藉さず、塙國の要求を容れようとはしなかつた。

プロシヤ王がそのやうに臆病になつたのには、次の理由があるのである。フルニエの書を見ると、「露帝アレクサンデルは、エルフルト會議の後、ケーニヒスブルクを経て歸國の途次普王フリードリヒ・ウイヘルムを招待してベルブルグに來訪せしめ、普王に對して戦に熱心な周圍を離れられたいとの希望を述べた。」とあるが、露帝に信賴

して、「露國なしに予は何事をもなすことができない」と明言した普王は、一も二もなく露帝の警告を容れ、歸國の後は周囲の主戦黨の説を斥け、オーストリアとの同盟を排斥し、却つてオーストリアに向つて平和を持続するやうにと勧告したほどであつた。そこで、オーストリアはさしあたりプロシヤから公然の援助を期待する手掛を失つた。

次にオーストリアとロシヤとの關係はどうであつたか。  
奥國當局者の考は、三月二日附のメツテルニヒの手紙によつて、大體これを想像することができる。メツテルニヒは述べてゐる。

エルフルト會議において、ナポレオンとアレクサンドルとの間はさほど圓滑にいかなかつた。エルフルトにあつたわが大使ヴィンセントは、ロシヤがオーストリアの軍備に對して悪意を挾まないであらうとの暗示を掴むことができた。」(メツテルニヒ「覺書」)

それ故に、ウィーン朝廷は、佛露二國が表面上の信誼を有するに拘らず、共に同盟の誠意を疑ひ、露帝が依然として彼れの政略を變更することはないとしても、佛境間に事ある時は、少なくとも中立を守るであらうと豫期した。

ところが、露帝は奥國大使シュワルツエンベルクにむかひ、本氣になつてロシヤは飽くまでエルフルト條約を遵奉し、オーストリアがフランスに對して攻勢をとる場合には、フランスに援助を與ふべき旨を通知した。

またその前に、シュワルツエンベルクはアレクサンドルに請願して、皇妹を大公の一人に結婚せしめられたき旨を申し込んだが、斷乎たる拒絶をうけた。この二つの事件は、オーストリアにとつては少なからざる威嚇でもあつた。が、幸なことには、ナポレオンの誠實を疑つてゐたアレクサンドルは、ナポレオンとの約束を十分守る考へはなく、四月十五日オーストリアにむかつて、決して活潑な敵對行動を取らないことを内報した。

そこで、オーストリアは幾分か安堵の胸を撫でることができた。しかしながら、ロシヤ皇帝にはオーストリアに援助を與へようなどといふ考へは少しもなかつた。彼れは今や全勢力をフィンランドに傾注してゐたために、到底他を顧みる餘裕をもたなかつた。

しかのみならず、アレクサンドルはこの時一日も早くフィランドを片づけて、東方に向ふ考へを持つてゐた。この考へを實現するためには、ナポレオンを永くイスパニヤに拘束し、ロシヤの東方發展を制壓する能はさらしめる必要があつた。フルニエはよくこの間の消息を洞察してゐた。

ナポレオンがイスパニヤに拘束されることが永ければ永いほど、露帝は速かに東方に對して慾望を果すことができよう。従つてナポレオンのイベリヤ半島における計畫に異變のないことが露帝の利とするところであつた。同様に、プロシヤ、オーストリアの靜謐を害するなものもないことが、彼れの利とするところであつた。なんとすれば、若しその普奥兩國がフランスに對して武器を取る場合には、佛軍隊は當然東進すべき運命をもつやうになり、さうなれば、ロシヤは將に獲物が手許に届かうとする南方をすてて西進しなければならなくなるからである。露帝は、普奥兩國がイスパニヤ遠征落着まで彼等の刀を鞘に納めることを必要とする點において、ナポレオンと利害を共通するところがあつた。(フルニエ著「ナポレオン傳」)

もしこの時、露帝アレクサンドルにして輿論を容れて、オーストリアを援助し、プロシヤをあはれみ、フィンランドに對する目前の利慾を擲ち、ナポレオンといふ大敵を打倒しようとする遠大なる計畫に思ひ至り、普王フリードリヒ・ウイヘルム三世をしてスタイン等の計畫を實行せしめたならば、一八一三年になし得たところを一八〇九年になし得たであらう。

かうした状況であつたから、オーストリアは普露兩國から援助をうける希望を棄てなければならなかつた。すなはち、今やオーストリアはフランスに對して戦を挑むためには、徒手空拳をもつて斷行する勇猛心をもたなければならなかつたのである。

このオーストリアの今の場合は、一八〇六年におけるプロシヤの状況と同様で、主戦黨と平和黨との軋轢が行はれてゐた。主戦黨の首領はスタディオンで、皇后マリヤ・ルドウイカを擁して盛んに開戦を主張し、メツテルニヒ、フェルディナンド、バルファイ等は、賛成者の錚々たるものであつた。平和黨は主として軍人階級から成り、カール大公を首領に戴いてゐた。さうしてヨハン大公、ハンガリヤのヨセフ・パラチン、ライネル等は、黨員中特筆さるべき人々であつた。

これを要するに、主戦黨は政治家によつて、平和黨は軍人によつて代表されてゐたのである。これは一寸考へると甚だ不思議な感じがするが、スタディオンとカールとの性格・抱負などを考へてみると、寧ろ當然とも思はれるのである。ロレーヌ・ベートルはスタディオンを批評して次のやうに言つた。

スタディオンは、沈落してゐた彼れの國家の運命を回復する手段として、内政改革に信賴するの念に追はれながらも、却つて大膽な外交政略に訴へようとする意志をもつてゐた。(ロレーヌ・ベートル著「ナポレオンとカール」)  
眞にその通りである。スタディオンの人は、夙にドイツ全體の民心を理解し、ドイツ人全體を打つて一丸とし、ナポレオン打倒の一大砲彈としようとして考へてゐた。彼れはプロシヤの愛國者の言つた「自由とオーストリア……」なる言葉の奥底をよく見抜いてゐた。それ故に、フルニエはスタディオンについて次のやうに語つてゐる。  
スタディオンがアルントからうけた印象によつて行動し、ドイツの王族よりも、その人民を重要視したのは、そ

れほどの誤算ではなかつたであらう。(フルニエ著「ナポレオン傳」)

しかしながら、普王フリードリヒ・ウイルヘルム三世はスタディオンが重きを置いた普國民心を壓服して、普墺同盟に關して斷然たる拒絶の態度を示した。だから、スタディオンの遣り口に誤策があつたといへばいはれぬこともない。が、私はフルニエのやうにこの問題をさう重く見てはゐない。なんとすれば、彼れがナポレオンにむかつて開戦を敢行しようとした第一の動機は、プロシヤの問題よりも、却つてイスパニヤにあつたからである。

ナポレオンが精兵二十五萬をイスパニヤに拘束されてゐた稀有の時機は、オーストリアに取つてまさに千載一遇の好機であつた。この機會を棄てては、オーストリアは再びフランスと事を構へる時はない。メツテルニヒはスタディオンに書面を送つて、その事を力説し、フランスがオーストリアにむかつて出し得る兵力を二十萬六千と信じて、次の事を追加した。

オーストリアの兵力は、イスパニヤ奮起前の佛軍兵力に比べては著しく劣勢だが、今や少なくとも、同數に達してゐる。(メツテルニヒ「電書」)

一八〇九年三月四日、メツテルニヒはスタディオンに次のやうな意味のことを漏らしてゐた。

軍事財源は佛墺相伯仲してゐる。だが、國民性において、我れは彼れに優つてゐる。どうして我が成功しないことがあらう。もし、ナポレオンが成功の機會を有するならば、同様に我等もこれを有するわけである。また若しも我等が全敗して、オーストリアが覆るものとすれば、同時にナポレオンの存在も覆されるわけである。(同上)  
スタディオンはメツテルニヒよりも少なく見積つて、フランスの兵力を十九萬七千と考へてゐた。そこで彼れは兵力の打算上、ナポレオンに對抗し得ると考へ、斷乎として開戦を企圖し、熱心に皇帝フランツに戦を勸告したのであ



る。ところが、スタディオンと全く性格を異にしたカール大公は、極めて保守的な人であつたから、軍備がまだ整頓しないのを憂へ、スタディオンに反対して、今少しく時機を待たうとした。彼れは訓練未熟なオーストリア兵士をもつて、ナポレオン自身の訓練をうけたフランス兵士に對抗し得るといふ自信を持つことができなかった。ロレーヌ・ペートルは次の様に述べてゐる。

カールは、行政・財政の改良並びに軍隊の改造に關して、なすべき數多の事があることを認めた。(「ナポレオンとカール」)

その通り、カールは保守的であり、萬全を望む性格の人であつた。マツクに教育されたカールは、多くの點において出藍の才能を示してはゐたが、それでもマツクから與へられたオーストリア傳統の保守的軍人精神を依然として放棄することができなかった。彼れはナポレオンを恐れ、ナポレオンの軍隊の優良なことを考へた。彼れは佛墮兩國の軍隊を比較して見て、量においては彼れに伯仲し得るが、質においてはなほ未だ疑問の餘地があることを認めないわけにはいかなかつた。勿論、ナポレオンも、この時は非常な窮狀にあつた時で、虎の子のやうにしてゐた二十五萬の精兵はイスパニヤの山間から一步も出ることではできなかった。そこで、やむを得ず一八一〇年度の新兵八萬を一八〇九年の初めに召集して、急場の教育を施したほどであつたから、この時のナポレオンの軍隊は、決して一八〇五、六七年度に見たやうなフランス軍ではないことは確かであつた。それでもドイツにはダヴー配下の精兵も残つて居り、一人にして十萬の兵に相當するナポレオンがその指揮官であつたから、オーストリアの軍隊はまだまだ佛軍に優ることではできなかった。用心ぶかいカールは、質の上から兩國の軍隊を比較して躊躇逡巡したあげく、遂に平和黨の首領となつたのである。カールは、スタディオンに比較して、確かにより以上の組織的天才を持つてゐた。が、大局を看

破するの明に缺けてゐた。すなはち、彼れは最も大切な時機といふものに思ひ至らなかつた。イスパニヤの遠征は、決して永久に續くものではない。従つて、佛の精兵二十五萬がイスパニヤに釘づけされるといふのも、永い間ではない。もしも、カールの如く躊躇逡巡、徒らに事を延ばすうちに、二十五萬の佛兵が中原に踵をかへす時には、墮國としては、擧兵の時機を失ふに至るであらう。大膽なスタディオンは、よくこの點を洞察してゐたのである。もしも、カールのやうに、貴重なる時間を軍備に費すならば、單に開戦の機會を失ふばかりか、その間に、ナポレオンは電光石火の訓練を彼れの軍隊に施すであらう。オーストリアの利用し得る一ヶ月は、實にナポレオンに取つては、數ヶ月に相當するのである。さうして、月を重ねるうちには、却つてナポレオンの攻撃をうけることになり、オーストリアは如何ともすることができなくなるであらう。

そこで、スタディオンと同じ意見を持つメッテルニヒは、皇帝フランツを説いて、遂に開戦を決意せしめるに至つた。メッテルニヒが墮帝を口説き落した根據は、次の三ヶ條(ロレーヌ・ペートル著「ナポレオンとカール」)である。

- (一) 開戦初期におけるナポレオンの兵力。(前掲)
- (二) 新戦争における佛國民の無理解、この戦争に不満なことは、パリ人の明言したところで、殊にタレーランがさう考へてゐたことを、メッテルニヒは感じてゐた。
- (三) いかなる事情の下においても、ロシヤはオーストリアに對して、決然たる態度には出ないであらうとのメッテルニヒの信念。

これらによつて、戦争に反対であつた墮帝も、遂に開戦に決したので、平和黨のカールは如何ともすることができず、ここに皇帝の命を奉じて、開戦準備を急ぐことになつた。それは一八〇九年二月八日のことであつた。

その時、オーストリアは二個の援助を得た。イギリス人とチロール人との援助がそれである。

イギリスは、乃ちアーサー・ウェレスリー(ウエリントン將軍)をしてイスパニヤ遠征を企てしめ、オーストリアに軍資を供給することを約束し、任意の時機において大陸に出兵し、フランス兵を牽制すべき意を漏らした。かうするのが、イギリス傳統の大陸政策であつた。これと同時にチロール人は、一八〇九年二月、アンドレヤス・ホーフエル等をしてウイーンに至らしめ、開戦を待ち、チロールにおいて一大陰謀を策し、フランスの兵力を牽制すべきことを密約した。この二大事實は、確かに煥帝をして戦意を強固ならしめた原因でなければならぬ。

要するに、一八〇九年戦役の原因は、オーストリアが、プレスブルグ條約以前の舊領土を回復し、併せてヨーロッパをナポレオンの羈絆から脱却せしめようとする目的にその根源を發し、大體ローズが次に擧げたやうな事情(革命及びナポレオン時代)によつてオーストリアは戦争を決意したのである。

(一) オーストリアは密かに露帝がフランスの權勢を嫉んでゐるといふ推測をもつてゐたこと。

(二) 英國はオランダ方面に遠征隊を送つてオーストリアを援助するであらうと考へたこと。

(三) チロール人は確かにバヴァリアの支配に對して反抗するであらうと考へたこと。

(四) ナポレオンは精兵二十五萬人をイスパニヤに保留せざるを得なかつたこと。

かくして、常には消極的であつたオーストリアも、遂に如上の大抱負をもつて、斷然大ナポレオンへの對抗を決意し、恐るべきフランスに對して武器をとるべく奮起したのである。

オーストリアにこの貴ぶべき決斷心を奮ひ起さしめる動機を與へたものは、疑ひもなく、イスパニヤそれ自身であつた。ナポレオンがイスパニヤにおいて精兵二十五萬を拘束された事實を見た政治家の機略と、勇猛無比を謳はれた

フランス軍隊に大打撃を與へ、やうやく佛軍の魔力を破り得たイスパニヤ人に刺戟されたオーストリア人との自覺の結果が一八〇九年戦役開戦の導火線となつたのは、甚だ意味ふかいことである。

それ故に、私は煥帝が斷然大ナポレオンに對して火蓋を切つたことに、無限の敬意を表するものである。たとひ、結果において、戦争はオーストリアの不利に歸したとはいへ、臆病な普露兩國の刺戟となるべく、奮然として戦争を斷行した意氣は、我等の大いに汲まなければならぬところである。

一八〇九年三月四日、メツテルニヒがスタディオンに送つた手紙のなかに、かういふ事が書いてある。

我等はこの數年間、自彊の實を擧げることができた。我等の力を利用し、一八〇九年が舊時代の終りにして、新時代の初めなることを忘れざらしめよ。(メツテルニヒ「覺書」)

スタディオンにしてもさうである。いな、オーストリアの政治家は皆この意氣をもつて、大ナポレオンにむかひ戦争したのであつた。屈辱のうちに平和を貪るよりは、たとひ戦敗を豫想するとも、名譽のために戦争を必要とする場合は往々にあるものだ。一八〇九年のオーストリアの場合は、まさにこの状態に近いものであつた。

## 第三章 戦争の勝敗と準備

戦争といふ動的な大活劇が演ぜられるためには、先づその前に、靜的な準備時代がなくてはならない。戦争勝敗の決は、主として準備の整・不整にかかるのであつて、所謂戰略・戰術の如きは、次位におかるべきものである。私の謂ふ準備とは、量的の軍備を意味するのではなく、有形無形、物資的にも精神的にも、苟くも開戦前に必要と思はれる準備の一切を指すのである。孫子が始計篇に述べた「五事」すなはち、道・天・地・將・法、これが私の意味する包括的準備條目である。このほかに「七計」と稱するものがあつて、通常これを孫子の五事七計といふが、元來七計なるものは五事の大項目中から抽出されるものに過ぎないから、ここでは、五事のうちに七計の意味を加へ、單に五事をもつて準備條目とする考へである。

西洋の兵學家ジヨミニは、その著『戰略提要』中軍事的政略に關する十條の項目を列擧して、開戦前の計畫を完全にしうと努めたが、徒らに字句を多くしたのみで、孫子のやうに簡單な五事のうちに深遠な意味を含蓄せしめることができなかった。なんとすれば、この簡明なる五事こそは、實に兵法上の普遍法則で、今に至るまで二千有餘年少しもその價値を減ずることがない。もとより、この五事をいかに運用するかは、時代によつてそれぞれ相違を見るところであるが、その根本精神は、依然としてその永續的生命を傳へてゐる。しかしながら、孫子は決して近世ヨーロッパ兵法のために彼れの兵法を編み出したものではなく、ただ當時の支那、いな吳王闔閭一人のために、あの簡潔

にして意味深遠な兵法を案出したのである。ところが、彼れの兵法が遙かに海山を越へて、或は日本に、或は西洋に傳へられ、今日においても尙ほ十分の價値を認められてゐるのは、それが時代を超越した普遍的法則をもつてゐる證據ではなからうか。

私は孫子の兵法中その第一位たるべき五事を念頭に置きつつ、一八〇九年佛境開戦における兩國の準備・計畫を比較した結果、孫子の遺策が今日においても尙ほ金科玉條であることを認めざるを得なかつた。然らば孫子の五事即ち道・天・地・將・法とはなにをいふか、以下これを説明することにする。

(一) 道者。令民與上同意。可與之死。可與之生。而不畏危也。

すなはち、君民一心同體となり、君は民を憫み、民は君のために水火を厭はぬといふ精神が孫子の所謂道なのである。この高い精神こそ、日本の軍人精神の亞流であり、西洋ではこれを軍隊精神と呼んでゐる。さうしてクラウゼウイツやジヨミニは、この軍隊的精神を第一位に置いてゐる。ジヨミニはいふ、

軍隊の組織がいかによくても、もしも、政府にして國民一般の軍隊的精神を教養することがないならば、なんらの効果を擧げることができないであらう。『戰略提要』

東西兵法家の言ふところ、實に符節をあはせたやうである。

日露戦役後、ロシアのクロバトキン將軍は、日本戦勝の原因を日本固有の軍人精神「大和魂」に歸した。戦前、彼は親しく日本軍隊の軍制・訓練の程度を目撃し、日本與し易しと考へ、大和魂の存在に全く氣づかなかつた。これは彼れの大誤算の主因であつた。孫子の謂ふ「道」以上の軍人精神が日本戦勝の根本原因であつたからである。

(二) 天者。陰陽・寒暑・時制也。

孫子が一番重きを置いたのは寒暑である。冬は北國を征すべからず、夏は南國を攻むべからず、といふことを意味したのである。なんとすれば、中温に馴れた軍隊は、到底極寒・極暑に堪へ、その土に馴れきつた土人と兵を交へることはできないからである。漢の高祖はこの遺訓を守らず、雪中に匈奴を攻めて敗れ、後漢の馬援は極暑の時嶺南の夷を攻めて、これも敗北の歴史を遺した。蓋世の英傑ナポレオンと雖も、騎虎の勢に驅られて一八一二年ロシアの大雪に葬られた。出兵上天を顧みる必要が甚大なことは、前掲の實例によつて知られる。しかしながら、四季天候は自然であるから、これを作り出すことはできない。準備時代から開戦に移る時機において、四季寒暑、天候に注意し、これを利用することが、兵家の兵家たるところである。

しかしながら、私は天を單なる狭い時節といふ意味に限定するに忍びない。陰陽寒暑を顧慮して開戦することは、兵家の定石であるには相違ないが、定石は敵も味方もひとしく用ゐるところである。従つてこの定石を離れて、敵の意表に出るやうな戦機を把握することが、兵家の大をなす所以である。この臨機應變の機略に基づくところは、時の活用といはるべきものである。そこで私は孫子の天を廣く「時」と云ふ意味に解釋して見たい。

(三) 地者。遠近・險易・廣狹・死生也。

地の利を見て、兵の配置・運用を計ることである。廣く平かな土地に衆兵を用ゐるのはよい。狭く險阻な土地には寡兵を置くやうにしなければならぬ。しかしながら、いかによくこの理を知つたからとて、不知案内の敵國にあつては、我に有利な地形も効果を擧げないことがある。況んや、不利な地形にある時は、味方の蒙む損害は、實に慘めなものとなるであらう。だから準備時代において、豫め戦地を調査し、出来るだけ正確な地圖を得て、その上に未來の戦争を描寫することが、最も必要なことである。更に進んで重要な地點には、前以て防禦工事を施すことを忘れて

はならぬ。

(四) 將者。智・信・仁・勇・嚴也。

これは大將たるもの具ふべき五徳をいふのである。智とは、士卒の心理状態を洞察し、順境・逆境に應じていかに彼等を取り扱ふべきかを知ること、信とは賞罰明斷誤りなきこと、仁とは士卒と共に飢寒辛苦をわかち、常に彼等を赤子として待遇する氣持、勇とは所謂猪勇に走らず、小敵たりとも侮らず、しかも大敵たりとも恐れざる心、嚴とは軍律を嚴正にして、千人を動かすこと一人の如くすることである。ジヨミニは將軍の具ふべき性能を次のやうに述べてゐる。(『略略提要』)

(イ) 大決心をなすに足る高邁な道德的勇氣。

(ロ) 危険を恐れざる肉體的勇氣。

これは、大將として具ふべき徳を、唯一つの方面から見ただけ過ぎない。智なく、信なく、仁なく、嚴なくんば、いかに高邁な精神的勇氣、萬夫不當の勇があつても、決して人に將たることはできない。

(五) 法者。曲制・官道・主用也。

曲制とは、今日の言葉をもつてすれば、軍隊の編成・配備をいひ、官道とは、軍隊内の將士の階級を定める道を指す。すなはち、官道は服務年限によつて將士を昇進せしむべきか、或は、その才能を見て拔擢すべきかをいふのである。主用とは、用度を主るの課で、糧食・彈藥等を取り扱ふところの輜重をいふのである。

以上五者は、準備上最も肝要なことで、この理を十分に諒解し、これを實行するものは必ず勝ち、然らざるものは必ず敗北する。孫子も次のやうにいつてゐる。

凡此五者。將莫不聞。知<sub>レ</sub>之者勝。不<sub>レ</sub>知者不<sub>レ</sub>勝。勝敗の決は以上によつて明かに推察される。さて然らば、佛墮兩國いづれが五事を充足する軍隊を持つてゐたか、章を改めてこの問題を詳述しようと思ふ。

### 第一節 オーストリアの準備

#### 一、軍隊的精神（軍國的精神）

孫子の一道 即ち軍隊的精神は、果してオーストリアにひろがつてゐたかどうか。私が準備に關して最も注意を拂つた問題はこれだ。プロシヤについて、ナポレオンから拭ふべからざる大屈辱を蒙つたオーストリアは、フランスに對する敵愾心を燃やしてゐた。リネヴィール、カンポ・フォルミオ、プレスブルグの屈辱は遂に鬱積して、猛烈な一團の復讐心となつた。この復讐心は、プレスブルグ條約前におけるオーストリアの舊領全部を回復するのでなければ、到底満足することはできない。さうして、その手段は戦争以外にこれを求めることができない。識者は既にナポレオンに對する一大復讐戦を豫想し、國民一般に軍隊的精神を注入することに努力した。

ヨセフ・フォン・ホルマイルは、ハプスブルグ家が歴史的に偉大なことを説き、眠れるオーストリア人の心を覺醒した。一八〇七年、彼は『オーストリアのブルターク』を著述し、ハプスブルグ家の君主の傳記を載せた。この傳記に對して、フックス博士は評していふ。

この傳記は、科學的見地からみれば、完全無缺といふことはできないが、今の慘めな時にあたり昔の光輝ある人の手本を髣髴せしめた點において、まさしく成功したものである。（フックス著『自由戦争』）

ホルマイルは、さらに歴史・文學・藝術に關する著述を公けにして、オーストリア國民を精神的に鼓舞することに努力した。ヨハン大公は彼れに對する眞面目な援助者であつた。

一八〇七—八年、アウグスト・ウイヘルム・フォン・シュレーゲルは、ウィーンに滞在してゐたが、盛んに墮人の胸に秘められてゐた焰をかきたてることに成功した。その時彼れは次のやうにいつてゐた。

今や一般的の感激は、多くの人の間に起つた。私はその數を言ひ難いが、彼等がなにを考へてゐるかを言明することが出来る。思想家・詩人達の領域において種別のさまざまドイツ人は、彼等の間に一致點のあることを感じた。この感情は、我等の迷へる期待を賣いて、我等國民に不死の要求を起さしめた。（フックス著『自由戦争』）

また、オーストリア自由の歌が各所に歌はれ、ハインリヒ・フォン・コリンは『國防指導者』を作つて、フランスとの戦争を盛んに鼓吹した。フックスは言ふ、「オーストリアの自由詩とドイツのそれとは共鳴した」と。

炯眼なナポレオンは、早くもこれら自由詩人への監視を命じたが、驚くべきことには、オーストリア一般國民の間ばかりでなく、上流社會の間にも烈しい風が吹いてゐた。すなはちオーストリアの輿論は、この時フランスに戦争を要求してゐたのである。フランスの代理公使デュダン<sub>は</sub>次のやうに報告した。

一八〇五年においては、オーストリア政府獨りが戦争を（フランスに）欲してゐたが、軍隊や人民は共に戰意を持たなかつた。然るに一八〇九年においては、政府も軍隊も人民も、すべて戦争を希望してゐる。（フックス著

『自由戦争』）

ところが、一八〇八年におけるイスパニヤ人の對佛戦役は、萬能と信ぜられたナポレオンに、微かな疑問を投げかけたので、今までナポレオンの魔力を信じてゐたオーストリア人も、俄かに覺醒されて來た結果、そこに具體的な力強い軍隊的精神を喚び起すことができた。しかしながら、それを完全な結晶とするためには、まだまだ幾多の歳月を要することであつた。ロレーヌ・ベートルは、この消息を十分に洞察して次のやうにいつてゐる。

オーストリア人の愛國心は、僅かに最近の發生に過ぎなかつたが、佛人が獨り全ヨーロッパに反抗した時代の精神をまだ失つてはゐなかつた……塙軍は些々たる戦勝の傳説をもつてゐるのみで、絶對的の信頼を託し得る指導者をもたなかつた。(『ナポレオンとカール』)

また彼れはいつてゐる。

オーストリア軍人は、敵を刺戟するに足る大勝を決然と獲得するよりも、寧ろ戦敗を避けようとする考へに汲々たる有様であつた。(『ナポレオンとカール』)

彼等はカール大公が、フランスの雄將モロー、ジュルダン、マッセナに勝つた事實を何時までも記憶してゐたが、自國の宿將ボーリユー、マラー、マツクを小兒扱ひにしてしまつたナポレオンを、數等の上手と信じないわけにはいかなかつた。従つて彼等は、ナポレオンを打倒するといふ自信はなく、ただ負けさへしなければよいといふ保守的な考へ方に陥つてゐた。軍隊一般の空氣はさうであつたけれども、スタディオンやメツテルニヒ等に制せられて、遂に開戦の決意を餘儀なくされるに至つたのである。

しかしながら、彼等のフランスに對する敵愾心は、これがために、少しも減殺されることはなかつた。いざとなれば、窮鼠かへつて猫を嚙む底の力は、十分に潜在してゐたのである。この熾烈なる敵愾心が、一八〇五年以來、オーストリア人殊に塙國軍隊中に養はれてゐたことは、我等の最も注意すべきところである。

## 二、時

孫子の「天」とは、陰陽・寒暑の時制をいつたものである。获生徂來は、陰陽・寒暑中、寒暑をもつて骨子とし、私が先きに述べたやうな、いろいろの證據を掲げた。しかしながら、孫子の言葉に駄句がある筈はない。陰陽も寒暑に劣らないことは、私がこの節において力説しようとするところのものである。

陰陽とは、日取・時取・方角等を指すと、徂來の註にある。これはいかにも迷信的な末節に拘泥したもので、餘りにも偏狭な説である。私は孫子の「天」を「時」と同じ意味に考へて見たい。ナポレオンは戰略の基礎を時間と空間とに置き、時間をもつて空間以上のものとした。この時間こそ、私がこの節において、特に論じようとするものである。開戦の時機は、確かに兵家にとつて最も重要な事項の一つである。そこでオーストリアも軍備を急ぎつつ、この時機の到來を待つてゐた。彼等の理想からいへば、その時機は、勿論彼等の軍隊があらゆる點において、佛軍隊に比して優越な條件をもつ場合のことである。

注意ぶかいカールは、一意専心軍備を急ぎながら、この時機を待つてゐたが、その時機は容易に到着しさうにも見えなかつた。敗殘のオーストリアが、ヨーロッパ全土に匹敵するに足るナポレオンの軍隊に對抗しようといふのは、なかなか及びもつかぬことであつた。ところが、たまたまイスパニヤに大一揆が起つて、ナポレオンは、いやいやながら、二十五萬の精兵をイスパニヤの山中に閉ぢ込められるに至つた。さうして、後に殘つた軍隊は三十萬に足らず軍隊の素質はイスパニヤ遠征軍に比して、遙かに劣等なものであつた。そればかりか、塙軍に對抗する必要上、兵數

の僅少なを憂へて、一八一〇年度の新兵を募集して、これに俄か訓練を施し、僅かに三十萬の軍隊を編成したに過ぎなかつた。だから、かやうな機會は、オーストリアにとつては、實に千載一遇の好機である。そこで、ベルンハルデイの言を引用する。

敵國の武力が優勢であつても、内憂または外患に苦しむ時にあたつては、國家はこの好機を利用し、以てその政略的目的を實現しなければならぬ。もし比較的少ない犠牲をもつて、大なる効果をあげるに十分な望みのある時には、戰爭の危険をも冒すことは容易である。(ドイツと次の戰爭)

スタディオンは、早くもこのことに氣付き、頻りに皇帝を説き、カールに開戦を強ひようとした。ところが、戰備の完整に没頭したカールは、スタディオン以上に軍隊の内情に精通してゐただけに、自國の軍隊が依然として佛軍隊の敵ではないことを自覺し、開戦尙早論を唱へ、猛烈な反對運動を試みた。彼れの考へも一理がないわけではないが、冷靜な頭腦をもつものは、カールが遠視眼的であつたことを責めざるを得ない。なんとすれば、もし彼れのやうに、永く機會を待つて軍備の完成を得たとしても、イスパニヤ遠征が終つてナポレオンの二十五萬の精兵が歸國すれば、オーストリアがどんなに努力したとしても、所詮抵抗は覺束なくなるであらう。そればかりか、一八〇九年の初めにおいて、オーストリアに向けたナポレオンの軍隊は各所に散在してゐたのである。それ故に、オーストリアはこれを個々に撃破すべき絶好の機會を持つてゐたのである。ドナウ河を渡つて先づダヴの軍を屠り、騎虎の勢をもつて一舉にパリに向つたならば、フランスの運命は頗る危険な状態に陥つたであらう。ところが、オーストリアはなかなか開戦の運びに至らず、徒らに「時」の過ぎるのを願ひなかつたが、スタディオンの説は遂にカールに打ち勝ち、一八〇九年二月八日開戦に決定した。

しかしながら、直ちに開戦するだけの決心がつかないで、四月まで逡巡躊躇してゐたため、ナポレオンをして次第に軍を集中せしめる機會を與へた。加ふるに、カールは初めボヘミヤを経てダヴを粉碎する戦略であつたが、これを中止し、鋒先を轉じてバヴァリアにむかつたため、そこに若干の日子を空費した。ナポレオンは塙軍が或は四月十五日頃には戦端を開くであらうと恐れてゐたが、オーストリアはたうとうその日まで遅延してゐた。これは言ふまでもなく塙軍の運動力の不敏活に起因するところである。即ちオーストリア軍は、生來の不決斷と運動遲鈍とのため、戰爭に最も必要な「時」を支配することができなかつた。カールは明かに「兵聞拙速。未觀功之久也。」と喝破した孫子の兵法に違反する行動をとつた。加ふるに、塙軍生來の遲鈍によつて貴重な「時」を利用することができなかつた結果、ナポレオンに意外の幸運を與へたのである。一體攻撃の利とするところは、勝手に適當な時機を選定し得ることである。然るに、勇ましくもナポレオンに對して攻撃をとつたカールが、適當にこの時機を選定しなかつたため、忽にして攻勢から防勢に轉ずるの止むなきに至つたのは、實に惜しんで餘りある次第である。

### 三、地理

天の利と共に地の利を制することは、良將の常に注目すべき點である。さうして、地の利を占めるためには、先づ地形を熟知しなければならぬ。孫子は次のやうにこれを戒めてゐる。

地形者兵助也。料敵制勝。計險阨遠近。上將之道也。

それ故に、主將たるものは、開戦前にあらゆる手段をつくして、豫定作戦場の地形を探究することを忘れてはならぬ。今オーストリア軍が、一大勇猛心を起して、國境を出て攻勢をとるには、未來の戦場はバヴァリアの平原でなけ

ればならぬ。なんとすれば、バヴァリアはオーストリアとフランスとの間に介在する當然川中島といふべきものであつて、先づオーストリアがここを占領することは、敵の死命を制する道である。ところで、地圖を開いてバヴァリアの地形を見れば、初學者と雖も、直ちにそこに河川戦闘が行はれることを納得するだらう。バヴァリアの地勢をいへば、その中央部はドナウ河の本流によつて貫かれ、その支流のレッテ、イザール、イン等の諸河川が平行して流れてゐる。この平行支流は、いはづれも正確にオーストリア軍の戦線に平行するやうに流れてゐるから、防禦戦においては特に有利である。それ故に、カールは防禦といふことを念頭におくならば、これらの河川を利用して、さまざまな防禦設備を施さなければならぬ筈である。然るに彼れは主力をもつて、河川のないバヴァリアの北部に出る考へであつたから、これらの河川を等閑に附し、防禦工事を施すことをしなかつた。

私はカールがかやうに攻勢に走つて、防禦の考へがなかつたのは、彼れの用心深い日頃の遣り口から見て、甚だ不思議な感じをうけるのである。が、後に詳述するやうに、カールは最初ボヘミヤから進出する戦略であつたのが、中途においてバヴァリア(ドナウ河以南)に出る考へを起した事實を見れば、バヴァリアの河川の利用を怠つた経路は、これを理解するに難くない。しかしながらカールが、これがために、バヴァリアの役を十分に利用し得なかつた大缺陷を生じたことは、彼れが未來の戰場を豫想し、そこに地形の利用をなし得なかつた罪に歸せられなければならぬ。

次にドナウ河は、その性質上西方より侵入する敵にとつて甚だ有利である。

ロレーヌ・ペートルはいつてゐる。

西方から来る侵入者に對して、ドナウ河は、殆んど計るべからざる價値を與へる。(少くとも一八〇九年において) なんとすれば、侵入者はドナウ河を保有する間、河をもつて食糧・彈藥、その他百般の物資を供給すべき最良の

手段となし得るからである。(ナポレオンとカール)

それ故に、フランス軍にドナウ河を委することは、オーストリアに取つては、由々しい大事である。眞先にこの河を制することは、塙軍のまさに取るべき方策であつた。しかしながら、これをなすべく、塙軍は既に時機を失つてゐた。さうして、甚だ興味あることには、塙軍がこの貴重な時機を失つたのは、反面から觀察する時は、カールがドナウ河の價値を十分理解してゐなかつた結果ともいへるであらう。

なんとすれば、もしカールにして、ロレーヌ・ペートルがいつたやうに、ドナウ河の價値を理解したならば、どうしてむざむざ敵にこの河を與へるやうな拙策に出ることができよう。もし果して、彼れがドナウ河を味方の手にをさめる意志をもつてゐたならば、是が否でも開戦の時機を早め、佛軍の不意に出る策をとり、佛軍を全くバヴァリアから驅逐し、完全にドナウ河の線を確認したであらう。右の點において、カールが地利の先制を忘れた失敗の事情をわれらは理解することができる。

#### 四、將

主將の有すべき五徳として、孫子は智・信・仁・勇・嚴を擧げてゐるが、これらの徳を兼備する人は容易に求められさうもない。大將たるものは、少くとも戰略眼と戰術眼とをもち、勇猛果斷、事に臨んで躊躇することなく、能く部下の力量を認識し、よくこれを使ひ得るものでなければならぬ。日本の典令にしても、或ひは西洋の戰術書にしても、斷乎たる決斷心を指揮官に要求してゐるが、抑も決斷心なるものは、單なる勇氣から湧きでるものではない。勇に伴ふに、明らかなる智力をもつてしななければ、正確な決斷心は到底求められない。また部下に對して賞罰を正しく



し、苦樂を共にするところの考へがなければ、彼等から上官のために水火をも厭はぬ忠實な赤誠を期待することは到底できるものでない。

さて、オーストリアには、果してかやうな良將があつたか。カール大公は、確かにオーストリアにおいて始めて見られた良將であり、ナポレオンが一八〇九年までに始めて見た武將であつた。彼れはマツクの教育を受けたのであるが、マツクを遙かに凌駕する戰略眼と戰術眼をもつてゐた。また、勇氣の點においても、マツク以上であつた。しかしながら、惜しいことには大事の場合に臨み、時々決斷心を缺くやうな性向を持つてゐた。それかといつて決して勇氣のない人ではなかつた。いな、むしろ猪勇といはれたほどに、勇氣のありあまる人であつた。アスペルン、ワグラムの陣頭で、軍の先頭に立ち、雨と降る彈丸をもともせず、ひるめる味方を勵ました彼れの勇氣は、ロデイ河を渡つたナポレオンや、ルビコン河に楯を投じたケーザルにも比較されるべきものである。しかしながら、一大決戦において、彼れが躊躇逡巡してゐたのは、不思議の感なきを得ない。さりとして彼れに智力が足らぬのでは勿論ない。實は、彼れの健康があまりよくなかつたためでもあつたらう。ロレーヌ・ベートルは、カールを次のやうに評してゐる。

カールに對する聲價は、次の事でききてゐる。すなはち彼れは、舊式の枷を脱し、フランス革命軍に實證され、またナポレオンによつて完成された原則を同化する點において、當時のオーストリア、プロシヤの殆んどすべての將軍等に優つてゐた。しかしながら、彼れは少年時代の訓練の羈絆から全く脱却することはできなかつた。

實際の彼れは、マツクよりも偉大な武將であつたけれども、なほ彼れの精神のどこかにマツクの像が残つてゐた。萬全を計るために却つて決心がにぶり、思はぬ失敗を招く彼れの保守的精神が、明らかにそれであつた。

彼れによつて都合のよくないことが、さらに一つ二つ存在してゐた。ロレーヌ・ベートルの評したやうに、「カール

ルは徹頭徹尾軍人であつた。政治家として彼れに見るべきところは甚だ少なかつた。」カールはナポレオンのやうに政略的手腕を振ふことはできなかつた。のみならず、時とすると、スタディオンの政治家から制肘をうけることもあつた。従つて、純粹に獨斷的行動をとる上において、不便を感じる場合が少なくなかつた。最後に、彼れは主將として、當然有すべき「嚴」を持つることができない境遇におかれてゐた。ヨハン、ルイ、フェルディナンド等の兄弟は、何れもカールの配下に一方の指揮官となつてゐたが、兄弟であつたために、却つて時々兄の命令を顧みない、我儘な場合があつた。また將軍ヒラーは、カールを尊敬する考へがなく、常に專横な態度を示してゐた。

かやうに、配下の將が尊大であつて命令を奉じない以上、主將の號令が全軍に徹底する筈はなかつた。炯眼なカールが開戦前にかうした消息を看破しないわけではない。それにも拘らず、彼等を斥けることができないで、不本意ながら彼等を配下に留めたのは、彼れの勢力がオーストリア軍隊を左右する全權をもたなかつた證據ではなからうか。カールが既にさうである。彼れの配下には、將才のある將軍は殆んど一人もゐなかつた。ヨハン大公は、まだ年若く、戰場の経験はなく、戰略・戰術に關しては、殆んどなんらの理解をもたなかつたにも拘らず、時としては、途方もない大膽な計畫を斷行するやうな人であつた。ルイにしても、實戰の経験はなく、ただ運動の遲鈍をもつて有名になるやうな、全然取るに足らぬ人であつた。

ヒラーは、ヨハンやルイのやうな凡將ではなかつた。けれども、バヴァリアからウィーンへ退却する時の彼れの行動を見れば、やはり大した將軍とは思へない。そればかりか、カールに對する不平から、ワグラム戰鬪の前に、健康勝れざるを口實として、俄かに自分の職務を擲つたのは、カールを踏みつけた不義者であると同時に、國家を思はざる不忠者の所業である。コロウラート、ベレガルデは、取り得のない遲鈍の將軍であるにすぎなかつた。

ただ、注意を要するのは、ラデツキー、ウアンブアン、ブリュンネの存在である。ラデツキーは一個の若者に過ぎなかつたが、後年イタリアで嚇々たる名聲をあげただけであつて、この時既に將軍となるべき素質を示してゐた。それでも、未だ乳臭の若者であつたから、餘り重要な位置に用ゐられなかつた。ウアンブアン、ブリュンネは、共に參謀としてカールの幕下に屈してゐた。勿論、深謀遠慮のある模範的參謀とは言ひ難いが、なかなか奇策縦横の手腕をもつてゐた。要するに、オーストリアには、カールのほかにこれぞといふ指揮官は居らなかつたのである。この事は一八〇九年戦役におけるカールの大きな悩みの一つであつた。

五、法

最後に墺軍は、「法」の上から見て、何程の成績をあげてゐたかを説かう。一八〇五年マツクがウルムに大失態を演じた後、墺帝フランツはカール大公にオーストリア陸軍改造の全權を與へた。それ以來カール大公の陸軍改造は、目覺しいものとなつてあらはれた。その成績を列擧して見れば、大略次の通りである。

(イ) 編成

これよりさき、カールはマツクの下に致々として軍制の改良を企て、フランスの軍制を採用して徴兵制度とした。フランスは、一七九三年外國軍が侵入して國家危險に陥つた時、カルノーの計畫に基づき、徴兵制度の基礎を開き、ナポレオン時代においては、全國皆兵主義から生み出された多數の兵士を、惜しげなく決戦點に集中して、一擧に勝を制するといふ新戰略を編み出した。賢明なカールは、夙もこの點に着眼してゐたが、遂に傭兵制を廢して徴兵制

を採用した。傭兵制は兵士等に與へる給料が莫大なるところから、これによつて多數の軍隊を組織することは、國家經濟の許さぬところである。それゆゑに、オーストリアは、フランス以外の他のヨーロッパ諸國と同じく、常に一兵一卒を惜しむのあまり、その戰略は保守的に傾き、思ひ切つた決戦をすることができないので、結局大損害を蒙むることを免れなかつた。

そこで、カールは多數の兵士を得るために、徴兵制が一番適切であることを看破し、斷然從來の傭兵制を棄ててしまつた。その初めは、大分國民の反感を買つたやうだが、一八〇五年以來、フランスに對する敵愾心が國民一般の間に勃興し、次いで猛烈な愛國心となり、さらに軍隊的精神の普及となるや、國民は徴兵を嫌はぬやうになつて來た。この民心を洞察し抜いたカールの徴兵制は見事に成功して、一八〇九年には、佛軍に劣らない兵數を獲ることができた。さうして開戦までに次の兵力を得た。

(一) ドイツ軍 (カール大公)		ポヘミア方面	
	[歩兵]	[騎兵]	[計]
第一軍團(ベレガルデ)	二二・六〇〇	二・一〇〇	二五・七〇〇
第二軍團(コロウラート)	二〇・六〇〇	二・七〇〇	二三・三〇〇
計	四四・二〇〇	四・八〇〇	四九・〇〇〇
			一三六

ドナウ河以南

ただ、注意を要するのは、ラデツキー、ウアンブアン、ブリュンネの存在である。ラデツキーは一個の若者に過ぎなかつたが、後年イタリアで嚇々たる名聲をあげただけあつて、この時既に將軍となるべき素質を示してゐた。それでも、未だ乳臭の若者であつたから、餘り重要な位置に用ゐられなかつた。ウアンブアン、ブリュンネは、共に參謀としてカールの幕下に屈してゐた。勿論、深謀遠慮のある模範的參謀とは言ひ難いが、なかなか奇策縦横の手腕をもつてゐた。要するに、オーストリアには、カールのほかにこれぞといふ指揮官は居らなかつたのである。この事は一八〇九年戦役におけるカールの大きな悩みの一つであつた。

五、法

最後に塙軍は、「法」の上から見て、何程の成績をあげてゐたかを説かう。一八〇五年マツクがウルムに大失態を演じた後、塙帝フランツはカール大公にオーストリア陸軍改造の全權を與へた。それ以來カール大公の陸軍改造は、目覺しいものとなつてあらはれた。その成績を列擧して見れば、大略次の通りである。

(イ) 編成

これよりさき、カールはマツクの下に致々として軍制の改良を企て、フランスの軍制を採用して徴兵制度とした。フランスは、一七九三年外國軍が侵入して國家危險に陥つた時、カルノーの計畫に基づき、徴兵制度の基礎を開き、ナポレオン時代においては、全國皆兵主義から生み出された多數の兵士を、惜しげなく決戦點に集中して、一舉に勝を制するといふ新戰略を編み出した。賢明なカールは、夙もこの點に着眼してゐたが、遂に傭兵制を廢して徴兵制

を採用した。傭兵制は兵士等に與へる給料が莫大なるところから、これによつて多數の軍隊を組織することは、國家經濟の許さぬところである。それゆゑに、オーストリアは、フランス以外の他のヨーロッパ諸國と同じく、常に一兵一卒を惜しむのあまり、その戰略は保守的に傾き、思ひ切つた決戦をすることができないので、結局大損害を蒙むることを免れなかつた。

そこで、カールは多數の兵士を得るために、徴兵制が一番適切であることを看破し、斷然從來の傭兵制を棄ててしまつた。その初めは、大分國民の反感を買つたやうだが、一八〇五年以來、フランスに對する敵愾心が國民一般の間に勃興し、次いで猛烈な愛國心となり、さらに軍隊的精神の普及となるや、國民は徴兵を嫌はぬやうになつて來た。この民心を洞察し抜いたカールの徴兵制は見事に成功して、一八〇九年には、佛軍に劣らない兵數を獲ることができた。さうして開戦までに次の兵力を得た。

(一) ドイツ軍 (カール大公)		ポヘミア方面	
		[歩兵]	[騎兵]
第一軍團(ベレガルド)	二一三・六〇〇	一一・一〇〇	二五・七〇〇
第二軍團(コロウラート)	二一〇・六〇〇	二・七〇〇	一一三・三〇〇
計	四四・二〇〇	四・八〇〇	四九・〇〇〇
			[計]
			[大砲]
			六八
			六八
			一三六

ドナウ河以南

本論 ナポレオンの政戦兩略

一三八

第三軍團(ホーエンツォルレン)	二二・九〇三	一〇・一〇	二四・九一三	九六
第四軍團(ローゼンベルグ)	一九・〇二〇	一・八六九	二〇・八八九	六八
ゲエシー旅團(第二軍團から派遣)	五・八九四	一・〇二五	六・九一九	六八
第五軍團(ルイ大公)	二四・三八三	二・〇四二	二六・四二五	六八
第六軍團(ヒラー)	二二・三七四	二・一八九	二五・五六三	八〇
第一豫備軍團(リヒテンスタイン)	一一・九九八	二・五六六	一五・五六四	三四
第二豫備軍團(キーンマイヤー)	六・九五〇	二・四六〇	九・四一〇	二〇
計	一一・六五二二	一三・一六一	一二九・六八三	三六六

ミュンヘン方面

ジュラシー軍(第六軍團から)	九・九六二	一・〇三九	一一・〇〇一	一六
小計	一七〇・六八四	一九・〇〇〇	一八九・六八四	五一八

(二) イダリヤ軍 (ヨハン大公)

第八軍團(カストラ)	一八・二五〇	一・九四二	二〇・一九二	六二
第九軍團(クロアチヤのギウライ軍)	二四・三四八	二・七五八	二七・一〇六	八六
チロール軍(第八軍團の一部)	九・八〇〇	三七〇	一〇・一七〇	一七
ダルマチヤ軍	七・〇〇〇	三〇〇	七・三〇〇	一四
計	五九・三九八	五・三七〇	六四・七六八	一七九

(三) ガリチヤ軍

第七軍團(フェルディナンド大公)	三〇・二〇〇	五・二〇〇	三五・四〇〇	九四
總計	二六〇・二八二	二九・五七〇	二八九・八五二	七九一

〔註〕 砲兵二二・八〇〇人を加へて、總數三〇二・六五二人であつた。

(四) 豫備軍

國防軍その他	一八八・五二五	三・三一八	一九一・八四三	—
ハンガリー一揆軍	二〇・八一〇	一五・二〇七	三六・〇一七	—
クロアチヤ一揆軍	九・七六〇	一・六二七	一一・三八七	—
スロヴァニヤ一揆軍	五・〇〇〇	—	五・〇〇〇	—
計	二二四・〇九五	二〇・一五二	二四四・二四七	—

すなはち、カールは三十餘萬人から成る正規軍を編成し、それらを九個の軍團と二個の豫備軍團とにわけた。しかしながら彼れはなほ兵數の不足を感じ、危急の場合の豫備として、國防軍を編成することを皇帝に請願して、一八〇八年六月八日皇帝の裁可を得、約六萬人を編成することとなつた。その翌日各州においても國防軍を組織することになり、約二十萬の兵士を募ることができた。それに、ハンガリー、クロアチヤ等の一揆軍を加へて、大約二十四萬の數字を示すやうになつた。

ところが、ガリチヤにおいては、どうしても國防軍を編成募集することができなかつた。その理由は、ロレーヌ・

べートルが「何故なれば、ガリチャにおいては、一般に次のやうな希望を懐いてゐた。ナポレオンの勝利は、即ちポーランド王國の再興を意味する。」と説いた通りである。

要するに、ナポレオンの力によつて自國の復興を夢想してゐたポーランド人と、ナポレオンを倒して權勢を昔に歸さうと考へた奥國人とが、根本的に利害を異にしてゐた結果にほかならない。それゆゑにロレーヌ・べートルが「ナポレオンとの戦争において、ハプスブルグ家が唯一の依頼とするに足るものは、ドイツ種の臣民だけであつた」といつたやうに、オーストリアが眞の味方とするものは、ドイツ系の臣民以外にはなかつたのである。實際、ガリチャの如きは、少しも頼むに足らないばかりでなく、却つて舊ポーランドに合併される希望を持つてゐたから、開戦後においては、奥軍の危険の種となるに過ぎなかつた。

さて、オーストリア正規軍は、一軍團をもつて戦略單位としたが、一軍團に二十乃至三十の歩兵大隊、十六乃至二十四の騎兵中隊をもつて編成された。砲兵は著しく優勢となり、全軍團で七百九十一門の砲數を有するに至つたことは、大いに注意すべき點である。

### (ロ) 訓練

孫子の所謂七計なるものうちに、「兵衆何強」「士卒何練」といふ句があるが、前述のやうに、七計を五事に包含せしめる關係上、私はこの二句を法のうちに入れ、「訓練」といふ語によつて、説明を試みることにした。カールは上述のやうに、既に三十餘萬人の正規軍と二十餘萬人の國防軍を集めることができたが、これらに對してどんな訓練を施してゐたか。彼れの訓練はフランスのそれの模倣であつた。

### 歩兵

歩兵の訓練としては、フランスの散兵戰術から範を採つたものであつた。ナポレオンが散兵戰術を用ゐ、よく地形地物を利用し、運動を輕便にしたことは、カールの注意を惹くところとなり、遂に散兵の訓練となつて實現された。

### 砲兵

ナポレオンは、砲兵士官の出身であつたために、特に砲兵の價値を重要視し、戦の場合には砲兵に重要な役割を與へた。砲の偉力によつて、歩兵を前進せしめ、要所を突破し、虚に乗じて勝を一舉に決するものが、ナポレオンの得意の戰術であつた。この實際を見せられたカールは、砲兵の價値を十分に認め、さてこそ七百九十一門といふ意外に多數の砲を整へ、一時は佛軍に對して優勢を示すほどであつた。それほどのカールであるから、砲兵の訓練を怠る筈はない。フックスが「以前は砲の射撃に經驗のない歩兵をもつて、砲撃にあたらしめることがあつたが、カールは今や砲兵の擲弾兵中隊を組織して、これに専任せしめた。」(「自由戦争」)と記した通りである。詳しくいへば、従前はあまりに歩兵に重きを置いて砲兵を輕視し、歩兵をもつて大砲を操縦せしめるやうな非常識を敢てしたのであつたが、カールは斷然この舊習を打破して、擲弾兵中隊のやうなものを組織し新式の砲術を研究せしめたといふのである。だが、訓練はなほ日が浅く、到底フランス砲兵の精銳に比較することはできなかつた。そこで、ロレーヌ・べートルは批評していふ、「その砲兵の組織は良好であつた。しかしながら、目下のところオーストリアの高級指揮官は、砲兵を適當に整頓し、これを速かに戰場に導けるやうに十分の訓練をしてゐなかつた。」

### 騎兵

精銳なる騎兵を養成するために、カールは騎兵學校をウィーンに設置して、士官・下士官をそこに送り、騎馬術を

十分に練習せしめてから原隊に歸し、下士官の馬術を教育せしめる方針を取つた。さうして、その効果は着々としてあがつて来たが、まだまだフランスの騎兵には及ばなかつた。加ふるに、オーストリア騎兵にとつての一大缺陷は馬匹の不足であつた。

かやうにして組織されたオーストリア軍隊は、一八〇五年の軍隊に比しては、比較にならぬほどの精良なる軍隊になつてゐた。そこでロレーヌ・ベートルは次のやうにいつてゐる。

オーストリア軍人はフランス軍人と同じ程度に訓練された。物質上から見たら、少くとも佛軍隊ほどの良好な軍隊となつた。オーストリア軍隊の組織は、佛軍に比して遜色を見なかつた。また兩軍共にその武力において相選ぶところがなかつた。(『ナポレオンとカール』)

この批評はオーストリア軍を高く評價しすぎたやうな嫌ひがないが、ひるがへつて一八〇九年役に用ゐられた佛軍隊の本質を考へれば、滿更過言とも見られない。固よりカールが、いかに熱心に訓練に當つたとしても、常勝と稱された佛軍隊の精銳にオーストリア軍を比肩せしめることはできない。だが、度々説くやうに、一八〇九年に用ゐられた佛軍が、従前に比して遙かに質の劣つた軍隊であつたことを思へば、ベートルの説は正鵠をはずれてはゐなかつたであらう。カールはまた國防軍の訓練を怠らなかつた。退職の將校をして日曜日毎に國防軍に射撃の練習を指導せしめた。

要するに、カールは訓練において最善をつくし、僅か数年のうちに獲得し得られるだけの効果を擷むことができたやうである。唯一つの缺陷として擧げらるべきものは、オーストリア軍の固疾であつた運動力の遲鈍を矯正すること

ができなかつた點である。運動力の遲速が、戦略・戰術に與へる影響は甚大である。必要に臨んで、猛烈な強行軍を敢てし得る軍隊でなければ、到底破天荒の勝利を獲得することはできない。ところが塙軍の假想敵たる佛軍は、運動力の敏速において當時歐洲第一位を占めてゐた。従つてカールとしてはこの數年間にわたり屢々行軍・強行軍を實行して、遲鈍な軍隊を輕捷な軍隊とすることに努力すべき筈である。また、運動を敏捷にするためには、數學的知識に基づき通信機關を完全にして、命令を迅速確實に普及せしめることが必要である。カールも、この點には夙に注意してゐた。彼れは通信の迅速をもつてフランス軍隊優秀の一原因とし、これらを自分の軍隊に取り入れることを考へてゐたが、遂に十分の効果を擧げることができなかつた。

#### (ハ) 將士登用法

老朽を去り、新進有爲の材を拔擢して、昇進の途を開くことは、軍隊に熾烈なる活氣を與へる。そこで、ナポレオンは早くもこの點に着目し、眠れるフランス軍人に新進氣鋭の精神を與へるために、大いに士卒昇進の途を開き、才能あるものには、一兵卒からでも大將になる機會を與へた。さうして、彼れはこれによつて戰勝の一原因を作ることができた。然るに多くの點において、佛軍隊の長所を取り入れたカールも、かうした「活氣ある拔擢」を實行することができなかつた。將校となることを許されたものは、僅かに門閥の出身者であつた。ルイ、ヨハン、フェルディナンド等は、若年で戰爭には無經驗であつたにも拘らず、大公であつたために軍團長といふ榮職を與へられた。その他の軍團長もまた名門の出身者ばかりであつた。そこでロレーヌ・ベートルはいふ、一族登用は一八〇九年のオーストリア軍隊において著しかつたが、殊にカールの兄弟であるルイ、ヨハン、フェルディナンドのやうな無能者の登

用をもつて最とする」

それゆゑに、上下士卒の間には努力の精神が認められなかつた。名門の出身者は努力することなしに將校の地位を得、旨くゆけば軍團長になることもできるが、身分の低い一兵卒はいかに努力しても到底將校になる見込みはなかつた。従つて、兵卒は少しも努力する考をもたなかつた。また將校と兵卒との間に劃然たる分界線があるので、その間に打ち解け難い溝ができてゐた。兵卒の心理状態を大して理解しない將校は、一概に兵卒を賤しいものとして、輕蔑の眼をもつて臨み、兵卒はまた將校の同情のない尊大と慢心とを憤ると共に、猜疑心をもつて、將校から遠ざからうとしてゐた。だから、將卒の間に美くしい心の融合を望むことは不可能だつた。この事實は、オーストリア軍隊における見逃すべからざる缺陷であつた。

### (ニ) 軍資品の準備

カールは既に着々として諸般の準備を急ぎ、糧食・彈藥の準備を怠ることがなかつた。さうして、彼れは軍需品を未來の戰場たるバヴァリヤに送るために、ドナウ河を利用することができた。かくして、彼れは戰略上重要と思はれる地點には倉庫を設けて、そこに糧食・彈藥を貯へることにした。これは戰爭を繼續する上において、極めて適切な處置であつた。

次にカールは、「戰爭は自給自足を必要とする」といふフランスの遣り口に模して、バヴァリヤで糧食を徵發することを企ててゐた。そこでフックスはいつてゐる、「給養法においてカール大公はフランスの強制徵發法を採用するに決した」と。これは孫子の兵法にある「糧に敵による」と同一の考へ方である。

ナポレオンは、フランスの財政を苦しめ、フランス人の人望を失ふことを恐れて、常に糧食を敵地に取り、甚しきに至つては、戰勝後敵から取る償金をもつて第二次戰爭の準備金と考へてゐた。

カールの考へは、まだそこまでは進んでゐなかつたが、戰敗後のオーストリアを救ふためには、出来るだけその財政を痛めない方針を取らうとして、ナポレオンに模倣し、この自給主義を實行しようと思つたのであつた。しかるにカールにとつて都合なことは、バヴァリヤ人は國王及びフランスに對して、烈しい惡感情をもつてゐたため、却つて深い同情と信頼とをオーストリアに感じてゐた折柄であるから、バヴァリヤで糧食の補給をうけるのは、さして難事ではなかつた。

## 第二節 フランスの準備

### 一、軍隊的精神

新興オーストリアの軍隊精神が、復讐の念の上に築かれたものであるとすれば、フランスの軍隊精神はまさに「常勝」といふ華々しい信念からなりあがつたものである。オーストリアのそれは、一八〇五年以來俄かに勃興したものであるから、スタディオ、カールその他の愛國者がいかに多くの刺戟を與へたとしても、僅々數年來の精神的準備であるから、まだ完全の域に達する筈はなかつた。

これに對して、フランスの軍隊精神なるものは、既に長年月の準備時代を經過して來た。フランス革命の初期、外

國軍がフランス國境を越えて内地に侵入しようとした際は、もとより感情的なフランス人の精神を大に刺戟し、そこに猛烈な愛國心を惹き起した。さうして、さらに愛國心を楯とする熾烈な軍隊精神を喚び起し、國內に侵入した聯合軍を國境外に驅逐することができたのであつた。

この熾烈な愛國心から養はれたフランス軍隊は、ナポレオン・ボナパルトといふ不世出の將才を戴き、或はイタリアに、或はオーストリアに、或はプロシヤに、或はアウステルリッツを白眉とする幾多の戰鬪に、未曾有の大勝利を得た結果、遂にナポレオンを常勝將軍、勝利の神と信じ、彼れの下に戦へば必ず光輝ある戰勝が得られるといふ一種の信念を持つてゐた。

嘗つてオルレヤンの少女を神の使なりと叫び、彼女の鞭の指すところ水火のなかも辭せず、毫も死を惜しむことを知らなかつたフランス人である。時代は異なるが、やはり、その佛人の血は流れてゐた。ただ昔は、ジャンヌ・ダルクの下に盲目的に神を信じたフランス人は、今や眞に將才あるナポレオンを頭上に戴き、さらに一層合理的に常勝を信ずるに至つたのである。ロレーヌ・ベートルは次のやうに述べてゐる。

フランスの軍人は、永く續いた成功の上に打ち建てられた戰捷の傳説を擁してゐた。將兵が大指導者ナポレオンの常勝を信ずるの念は、依然として不動のものがあつた。

實際ナポレオンの軍隊は、今なほ必勝不敗の傳説を信じ、ナポレオンの下にある間は、永くこの福利を享樂し得るものと考へてゐた。それゆゑに、ナポレオンの魔力の失はれない間は、常勝といふ偉大なる精神力を疑ふことができなかった。イスパニヤにおけるナポレオンの失墜は、まだまだフランス人をしてナポレオンの魔力に疑念を挟ましめる餘地を與へなかつた。局外にあるプロシヤ人、オーストリア人は、この時早くもナポレオンの力を絶對でないと考

へはじめたが、深くナポレオンに心酔してゐたフランス人は、僅かに鴻毛の一瑣事として見てゐたので、これがために、俄かに悲觀に陥るには、餘りに自尊心が高かつた。加ふるに、軍隊一般の思潮を洞察したナポレオンは、この尙ぶべき精神を利用しつつ、この精神を確保し、さらにこれを向上させる大手腕をもつてゐた。或はロデイ河に先頭渡河を斷行し、或はアイラウ陣前において、自己は皇帝の位にありながら、兵卒と同様に藁小屋に寢床を設け、或る時は熱烈なる雄辯を試みて、將兵の精神を激勵し、以て士卒の忠誠を盛んにすることができた。

かくして、將兵の心はナポレオンの心となり、ナポレオンの心は將兵の心となり、そこに理想的に融合した軍隊的精神を顯現した。孫子が「道」において述べた精神は、實に遺憾なくナポレオンに實行されたのである。この精神力において、オーストリアはまだ到底ナポレオンに拮抗する資格を具へてゐなかつた。

しかしながら、ここに注意すべきは、かくの如く理想的にナポレオンと融合し得る軍隊は、一八〇九年の征虜役には、或る部分しか見られなかつたことである。訓練日なほ浅い新軍隊がそのうちに混在し、時に恐慌を起し、全軍の志氣に影響を及ぼすやうな悪質をまじへてゐたことを忘れてはならない。要するに、一八〇九年戰役における佛軍の軍隊精神は、決してアウステルリッツ、イェナ時代のそれとは、比較することができなかつたのである。

## 二、時

ナポレオンは「時」においては、確かにカールに一籌を輸せざるを得なかつた。イスパニヤ事件に齟齬するうち、カールから明瞭な開戦の意志を見せられたことは、彼れにとつて名狀し難い痛手であつた。イスパニヤといふ頑強極りない敵を前に控へながら、さらに背後に新銳のオーストリアを敵とするのは、さすがの彼れに取つても苦痛であつ



た。冷酷な「時」は、彼れにイスパニヤを征服するだけの餘裕を與へなかつた。それゆゑに、まづイスパニヤを全部的に壓倒してから、全勢力を背後のオーストリアに傾注するのは不可能であつた。

しかしながら、偉人の偉人たるところは、かやうな逆境においてあらはれる。彼れはこの時明かにオーストリアに對して戰意をもたなかつた。既に一八〇八年十月十四日の書簡をもつて、堯帝に激しい威嚇を加へ、別にロシアをしてオーストリアの背後を脅威せしめて、開戦の時機を一刻も延ばさうとしたが、それが實行され難いと見るや、一八〇九年一月十五日、既にヴァリヤドリドにおいて戰備をはじめた。さうして一月十六日同地を去り、二月十六日パリに歸つた。彼れが未決のイスパニヤを放擲して俄かに歸國したのは、オーストリアに對する戰備が主なる原因をなしてゐるが、同時にタレーラン、フーシェー等の陰謀を未發に鎮壓するためでもあつた。

實にこの時ほど英雄ナポレオンが困難を感じたことはなかつた。二十五萬の精兵はイスパニヤに閉塞され、オーストリアは新式の兵備を擁してフランスの國境を目指してゐるといふ危機に、フランスの内部にはタレーラン等の陰謀が胚胎してゐたのである。然るにかうした内憂外患とも至るの時に、機を見るに敏なのはナポレオンである。彼れはこの餘裕なき時機に一條の活路を見出すことができた。彼れはこの時炯眼をもつてオーストリアの遲鈍を見破つてゐた。彼れはパリに到着すると直ぐに、ユージエヌに宛てて、大略次のやうな書簡を送つた。

オーストリアは我等の想像してゐたやうに動いてゐない。だが我等は、これに對して警戒するところがなくてはならぬ。(ランフレール著「ナポレオン傳」)

「想像してゐたやうな行動」とは、「オーストリアは速かに開戦をする」といふことを意味したのであらう。彼れは既にオーストリアの行動を監視せしめてゐた。彼れは『ハブスブルグ通報』の記者に六千フランといふ多額の

給與を授けてゐたが、それからほゞ次のやうな報告をうけてゐた。

オーストリアは開戦準備をなしつつある。オーストリアのあらゆる物資を集收してこれを運搬すべき命令は既に發せられた。私はフランス政府にむかつてこの特別事項を告げるとともに、オーストリアに對して警戒を加へ防禦の手段を取るべきことを暗示するのである。(ブリュンヌの「覺書」)

ナポレオンは一時この記事を信じ、オーストリアが「想像してゐたやうな行動」を取りつつあるものと考へたが、パリに歸つて種々の情報を得た結果、まだまだ開戦が切迫してゐないことを知つた。さうして、バヴァリア王を説いて、十萬の兵を獲ることに成功し、ダヴーをして南下してオーストリアに備へしめ、同時にウディノにはアウグスブルグに至ることを命じた後、兵數の不足を補ふために、一八一〇年度の新兵八萬を募り、開戦に至るまで猛烈に速成訓練を施すことを計畫した。

これを以て見れば、實にナポレオンは「知彼知己」底の將軍であつた。さうして、オーストリアは彼れが想像した通りのオーストリアであつた。ナポレオンの窮狀に乗じて疾風迅雷の如くパリを襲ふ計畫を實行するの勇氣なく、遂にこの恐るべき蛟龍に雲霧を提供する機會を與へてしまつた。

オーストリアのこの數ヶ月の躊躇・油斷から、ナポレオンは實に思ひ掛けぬ寶物をひろつたわけである。然るにフルニエは、この消息を理解することができないで、次のやうなことを述べてゐる。

我等がオーストリアを攻撃者だと見ることは、ナポレオンに取つて二重の重要なる意味を持つてゐた。即ちこれによつて彼れは約束の如くロシアの援助を要求し得る權利を獲たばかりでなく、フランス人をして再び止むなく戦争の渦中に投ぜしめた。(フルニエ著「ナポレオン傳」)

これはフルニエの一大早見である。彼れはナポレオンの間接的に目を馳せて、その眞目的を看破するの明はなかつた。なんとすれば、ナポレオンの眞目的たる對英政略を考へ、地中海・エジプト・印度を制するために遠くトルコに眼を配り、トルコに對するロシアの壟斷的制壓を許さなかつた事實、フィンランドに對するロシアの遠征に援助を與へる誠意がなかつた事實、これらから類推し、歸納すれば、ナポレオンの對露政略は、芳烈なる香料を露人の鼻先に突きつけ、彼等をその香に酔はしめ、その虚に乗じて、オーストリアを一舉に破らうとする計畫であつて、眞にロシアを恐れ、ロシアのためにわざわざ貴重な時を空費し、不利益な防勢に立つたとは、到底解釋することができないからである。現在の危急に際して、ナポレオンが好んで防勢に立つべき道理はない。すなはち、彼れが防勢に立つたのは、準備の時期を得るためにほかならなかつた。

ナポレオンはその後數ヶ月の間出來得る限りの準備を整へた。ナポレオンが一度はオーストリアの手に壟斷された「時」を、幾分なりとも奪回することに成功した點において、私は滿腔の敬意を惜しまないものである。プリエンヌはその『覺書』のなかで次のやうに述べてゐる。

一八〇九年役中殊にその當初におけるナポレオンの行動は、一八〇五年戦役のそれよりも更らに迅速であつた。實にナポレオンの如き人をこそ、時の征服者といふべきではなからうか。

### 三、地 理

ナポレオンが未來の戰場と考へたバヴァリアとオーストリアとは、決して未知の土地ではなかつた。一八〇五年ウラムを陥れて長驅ウイーンを突破した經驗は、まさまさと彼れの記憶に残つてゐた。

ドナウ河を利用し、上流から下流にむけて安々と物資を運搬することは、一八〇五年戦役の戦略を助けたことが莫大であつた。ナポレオンのやうに、西方から進撃するものにとつて、ドナウ河がいかにも多くの利益を與へるかは、前章ロレーヌ・ベートルの説を掲げて説明した通りである。そこでナポレオンは、一八〇九年戦役では、第一にこのドナウ河に着眼し、諸種の物資を輸送することを計畫してゐた。然るにバヴァリア、オーストリアの地勢についていへば、ドナウ河がその中央部を貫通し、それから數多くの支流が分岐してゐる。即ち主なる支流は、イルラー、レッヒ、イザール、イン、トラン、エンス、ラーブ等であり、小支流としては、パール、イルム、アベンス、大ラバー、小ラバー、ファイルス等がある。従つて、それらの河川の間には軍隊の通過を妨害する沼澤地を有することは必然的である。さうして、第一の戰場と目されてゐたイザール、レッヒ兩河間の谿谷において、良好と稱されるべき街道は、僅かに五道(ロレーヌ・ベートルの記載)に過ぎなかつた。

- (一) ラチスボン——ストランピング
- (二) アベンスブルグ——ストランピング
- (三) アベンスブルグ——ランツフット
- (四) ミュンヘン——ランジフット
- (五) ミュンヘン——インゴルスタット

その他は言ふに足らぬ里道で、やつと歩兵の通過を許すあはれな道路に過ぎなかつた。またドナウ河の北部はどうであつたかといふに、ロレーヌ・ベートルの説明してゐるやうに、「ドナウ河の北部は、南方に比して、その道は遙に險惡であつた。」

南北既にこんな風であるとすれば、その中間にあるドナウといふ水路を利用するのは、理の當然である。ナポレオンは幸にして上帝から與へられたドナウ河の恩恵を利用することに着眼してゐた。彼れがいかにドナウの本線に目を注いでゐたかは、一八〇九年三月一日附の彼れの書類を見れば明かである。

パッサウは重要な一地點である。殊に攻撃者に取つては極めて重要である。オーストリアに進軍するためには、何者と雖もドナウ河を辿るほど有利であるものはない。……ドナウ河を占領する以上、軍隊は糧食彈藥の缺乏を見ることなく、意の如く行動することが出来る。(ベートル著「ナポレオンとカール」)

のみならず、ドナウ河を利用することは、彼れの希望としたウィーン直進を断行する點において、限りなく裨益を與へるのである。ナポレオンがドナウ河に着眼して飽くまでこれを利用しようとした計畫に對して、われらは敬意を表せざるを得ない。

#### 四、將

オーストリアにおいては、智・信・仁・勇・嚴の五徳を具へた將は、殆んど見出されなかつた。ただ主將カールにおいて、僅かにその一面を窺ひ得るに過ぎなかつた。フランスにおいても同様で、ナポレオンを除いては、さうした完全なる良將は求められなかつた。が、ナポレオンの下にあつて、彼れの意志を實行する手足となるに申分ない大將は少くなかつた。

それなら、ナポレオンとその麾下の將軍との性格はどうであつたか、以下これを調べてみよう。

#### (イ) 主將 ナポレオン

ナポレオンは主將としては殆んど完全に近い性能を具へてゐた。彼れはその特有の數學的頭腦によつて紛紛混屯たる雜多な内容から猶豫なく一條の主脈を發見することができた。彼れが事に臨んで惑はず、斷乎として自己の所信を實行し得る能力は、この數學的頭腦に負ふところが大であつた。従つて、彼れの戰略は「多數の兵力を迅速に戰場の要點に集中する」に盡き、また彼れの戰術は敵の弱點を突破して大勢を決するといふところにははつてゐる。この戰略戰術上の大本を行ふためには、固より様々の迂回路を取る必要があることは勿論であるが、それがために意外にも大道を忘れるといふことはなかつた。所謂小心にして大膽なるものである。カールは小心にして頭腦緻密、戰術家としては稀にみる好將軍であつたけれども、大局を掴む戰略家としては、到底ナポレオンの敵ではなかつた。ナポレオンは嘗つて、次のやうに語つてゐる。

歐洲に良將といはれるものは多いが、彼等は一時に餘り多くの事を看る缺點がある。これに反して、予は唯一のもの、即ち敵の主軍を見る。(『ナポレオンの心理』)

これは戰略家・戰術家として有すべき主要なる性格をそのままに發表したものである。ナポレオンは、コルシカ人特有の熱烈なる精神と、フランス人特有の華々しい精神とを融合した攻撃的精神をもつて、常に攻勢に立ち、敵の機先を制し、電光の如く敏速に敵を攻撃して、勝を一舉に決した。また防勢に置かれても彼れはウエリントンに劣らぬ才能をもつてゐた。軍人として第一に有すべき疲憊・困難に堪へる不屈の精神は、生れながら彼れに具つてゐた。後年、ロバウ島における困難な防禦工事は、明かに彼れの防禦的才能を證據だてることができた。しかしながら、彼れは飽くまで攻撃の人であつた。止むなく、一時は防勢に立つても、機會を見て攻勢に轉

することを忘れなかつた。

彼れは臆勇においてブリュッヘルに共通した。アルプスの嶮難を冒した彼れの勇氣は、往年のハンニバルに比較され、ネルソンの眼をかすめてエジプトに上陸した彼れの大膽性は、後人の嘆賞するところである。従つてローズが、一八一三年戦役に至るまでのあらゆる戦闘において、ナポレオンはカール大公の戦術的熟練と、永き防禦に堪へるウエリントンの力と、ブリュッヘルの猛烈な好戦的勇氣とを、その一身に結びつけたところの長所を示した。

(『ナポレオンの性格』)

と評したのは正鵠にあつてゐる。しかしながら、ナポレオンは結局コルシカ人であつた。フランス皇帝となり、さらにフランス以上のものを望んでゐた時、彼れは生れかゝつたやうに、コルシカ人の偏狭なる精神を棄てようとしたが、まだまだ彼れの心から根底的にコルシカ魂の影を除き去ることはできなかつた。彼れは、完全な寛容の徳を具へてゐなかつた結果、動もすれば嚴になり過ぎる傾向を持つてゐた。この點において、彼れはケーザル、エバミノンダスに匹敵することができなかつた。然るに彼れは智力によつて仁の必要性を察してゐた。彼れの頭腦は望遠鏡のレンズのやうな清澄と明瞭さをもつてゐた。彼れはその頭腦をもつて士卒の心理状態を洞察することができた。さうして、フランス人の燃えるやうな名譽心に薪と火とを與へ、陣中にある彼等の苦勞に同感し、皇帝の榮位にありながらも、親しく士卒と同様の苦勞をわかち、彼等から盡忠の精神を購ふことができた。彼れは稀世の將軍であるとともに、立派な政治家であつた。彼れは皇帝として政治・軍事の權能を一身に兼ね、彼れ一人の專斷によつて戦争を遂行する權能をもつてゐた。

戦争が政略と密接不離の關係を有する以上、それが戰略・戰術のみによつて決せられることができないのは當然である。だから、政權を握り、非凡な政略的見識を有してゐたナポレオンは、確かにこの點においては、カールよりも數等有利なる地位に立つてゐたわけである。ジヨミニは次のやうに語つてゐる。

もしも一國の君主であつて、フリードリヒ大王、ベートル大帝、もしくはナポレオンのやうな天才を有するならば、彼自身でなし得る大事業(戦争)を、彼れの將軍に委任することはないであらう。(『戦争縮略』)

これは千古の名言である。軍事的才能をもたない君主が、戰場に立つて兵馬の權を握ることは、なんらの利益がなく、却つて有害なのであるが、ナポレオンのやうに、政略・戰略上の才能を一身に兼備した皇帝が戰場に立つといふことは、佛軍にとつて確かに千斤の鼎であつた。

次に一八〇九年役に参加した佛軍の將軍の性能はどうであつたかといふに、イスパニヤに多くの名將を閉塞されてゐたとしても、なほ幾多の將才を有してゐた。

(ロ) ベルチエ

いはゆる、伶俐と稱せらるべき彼れは、ナポレオンの意志を洞察して、機を逸せずこれを訓令・命令とする點においては、他の將軍に追隨を許さなかつた。が、大勢を見てこれに應ずる大手腕をふるふ技倆を彼れはもたなかつた。彼れは大參謀としての資格はなかつたが、ナポレオンの良好な秘書としてその價値を認められてゐた。すなはち彼れはナポレオンに従屬する單なる器械であり、ナポレオンを離れては、一個の人形に過ぎなかつた。それゆゑに、ナポレオンが開戦當時ベルチエをしてたとひ一時だつたといへば全權を握らしめ、兵力分散の暴舉を行はしめたのは、確かに一失策だつた。

(ハ) マッセナ

リヴオリ、チューリッヒ、ジェノアの名将として、マッセナの名は甚だ高かつた。殊に彼れが戦略眼を有する點において、ナポレオンの愛敬をうけてゐた。しかしながら、この時彼れは年齢が五十一で、普通の大將や元帥の年齢としては寧ろ若い方なのに、四十前後のものばかりだつた大將仲間では早くも老朽の段階に入つた方である。

(ニ) ダヴー

彼れは短身禿頭で、常に世人の嘲笑を買つてゐたが、アウステルリッツ、アウエルステットの兩戰鬪における彼れの勳功に對しては、何人も襟を正さざるを得なかつた。その戰略眼はマッセナに匹敵した。さうして常にナポレオンに獻策して、有力なる参考を與へるだけの能力を具へてゐた。加ふるに、その大膽と忍耐心とは、他の將軍を遙かに凌駕し、ナポレオンの手を離れて獨立行動を取り得る唯一人の將軍であつたといつてもよからう。

(ホ) ランヌ

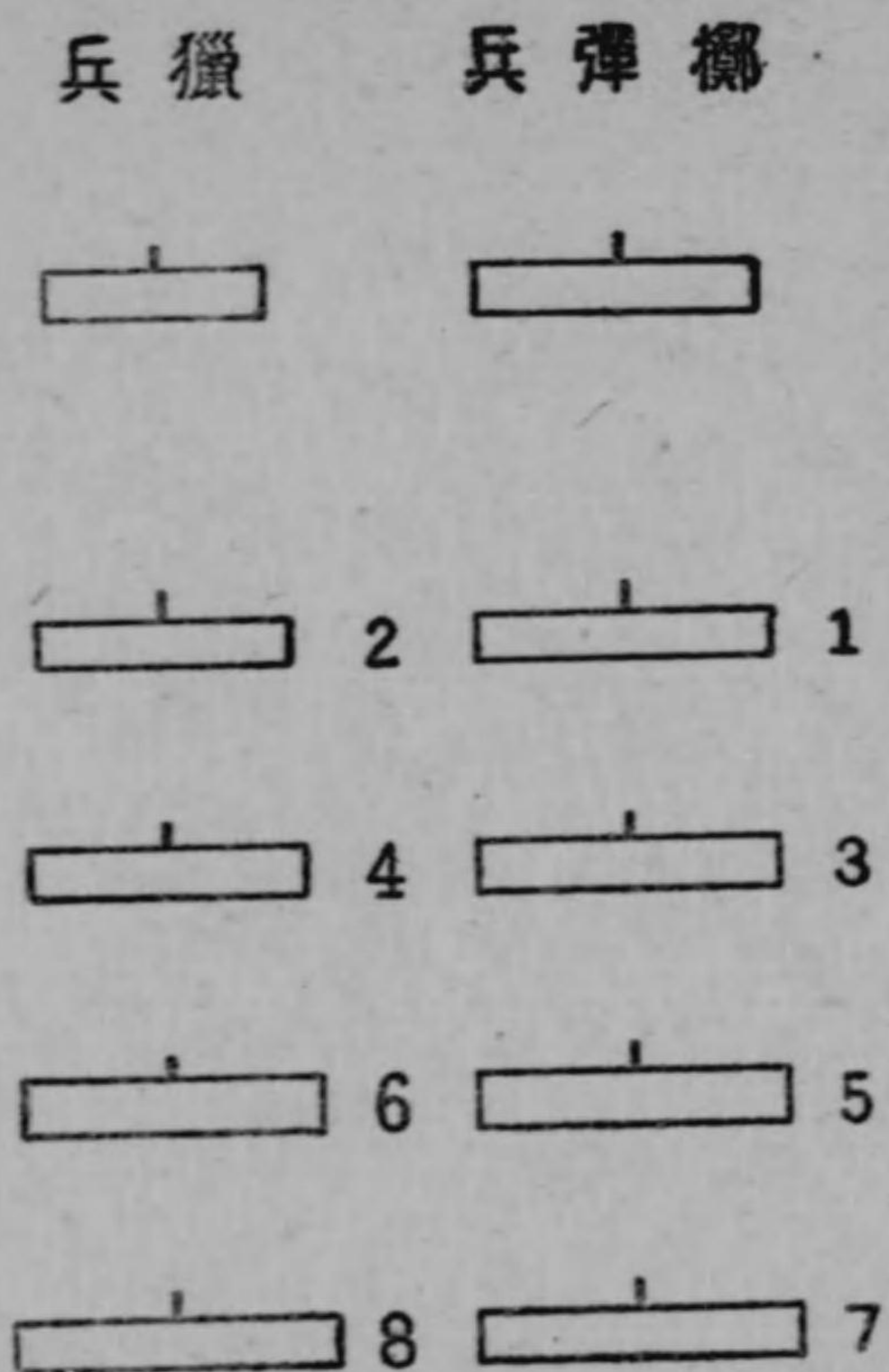
眇たる一染工の子であつたが、その大膽と勇敢とのために、ナポレオンの拔擢をうけて遂に將軍の地位を得た。さうして、直情徑行、皇帝ナポレオンに對しても常に友人のやうな無遠慮な態度を持してゐた。それにも拘らず、なほナポレオンの寵遇を持續してゐたのは、彼れに非凡な何ものかが存在してゐた證據でなければならぬ。次に彼れはダヴー、マッセナのやうな戰略眼をもたなかつたが、満身これ膽であり、死力を盡して戦ふ精神は、實に佛軍中稀れに見る將軍であつた。

以上を要するに、フランスの將軍は、オーストリアのそれには著しく優越性を示してゐた。

五、法

(イ) 編 成

一七七四年フランスに編成されたメモール・デュラン式の大隊は、革命時代を経て、ナポレオン時代に至つても、依然として戰術單位として殘されてゐた。



このデュラン式といふのは、由來各國軍隊が金科玉條として守つたところの横隊戰術に叛旗を掲げたもので、大隊縦隊といふ新隊形の案出であつて、戰鬪正面を短縮し、運動を容易にして、機を見て展開することのできる特殊な組織であつた。

その隊形を圖に示してみよう。

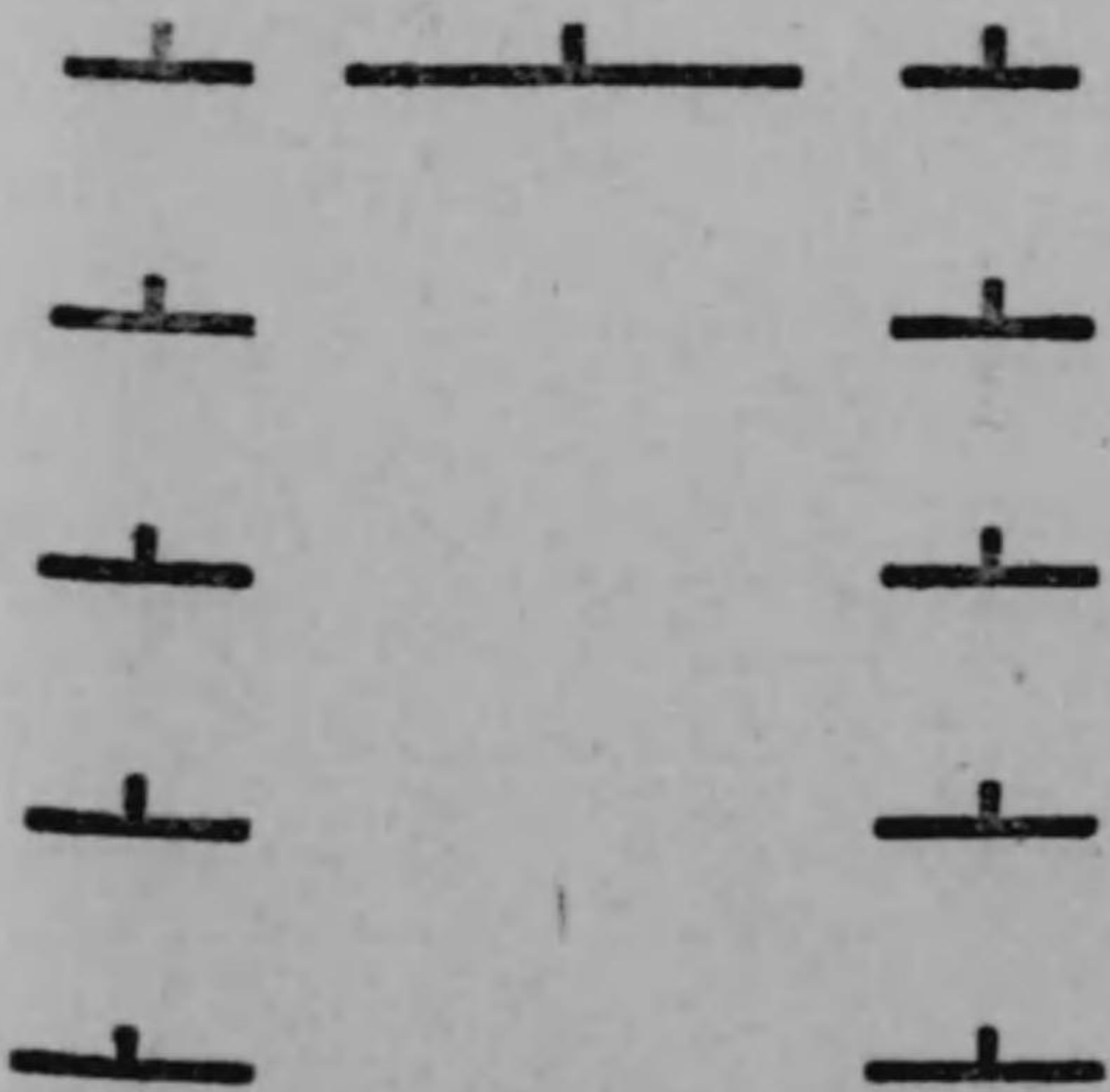
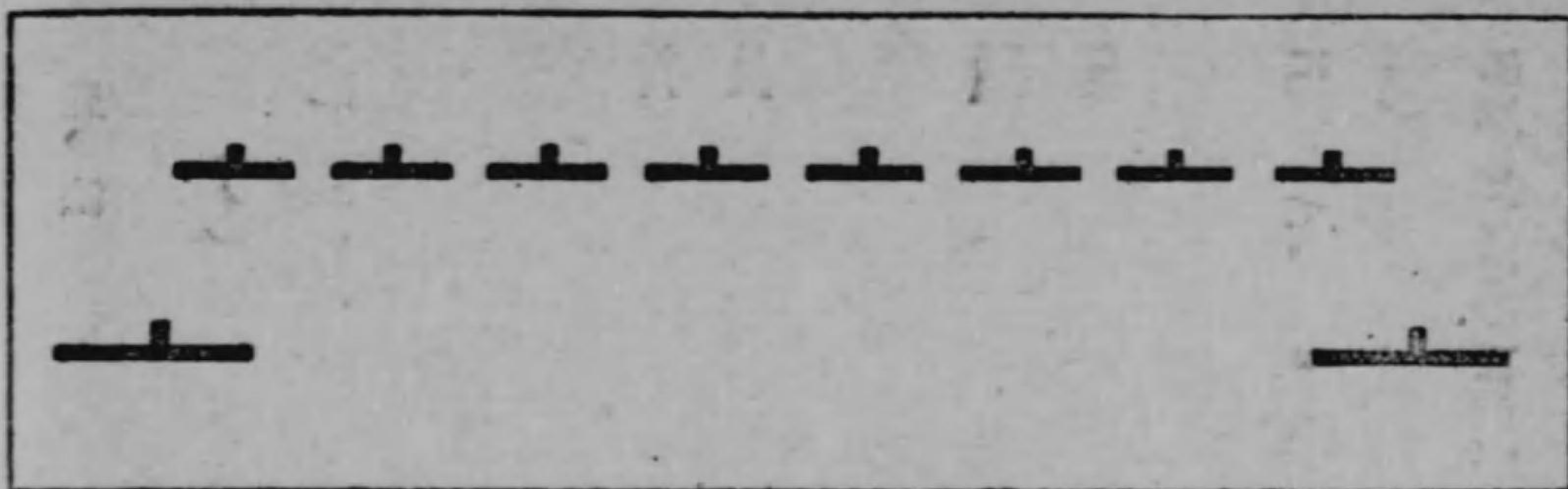
すなはち、獵兵・擲彈兵の二個中隊を先頭とし、他の八個中隊と共に十中隊から編成されてゐた。大隊縦隊の價値

に關して、ジョンストンはその著『戰術史』に述べてゐる。「大隊縦隊は僅小なる方向變換によつて敵の前線の同一部分にむかひ、選擇した敵の部分に對して不意に優勢なる兵力を集中することができる」加ふるに、大隊縦隊は横隊に比してその正面が狭小であるから、掌握に便利で、運動に都合がよく、行進方向を變換し、障礙物を越え、掩蔽物を利用するに適してゐる。それゆゑに、集合ならびに敵の有効射距離内に入る時には、被害を少くし、火器の配列を

便にし、散開を利するため、横隊を取る必要がある。デュランは展開隊形の利益を語つていふ「展開隊形は射撃に便であり、縦隊は運動と攻撃とに便である。我等はいかなる場合においても、その時の境遇に應じて最も便利なる隊形を取らねばならない」(前記「戦術史」)大隊横隊の形は上圖の通りである。

すなはち、八個中隊を前線に配列し、二個中隊を兩翼に少しさげて、豫備及び側面防備の用に供した。しかるに、フリードリヒの横隊戦術を謳歌する舊式軍人の反對に堪へ兼ねて、殆んど申し譯に横隊縦隊の折衷隊形を下記の形に編成した。この隊形はナポレオンのイタリヤ戦役時代まで行はれた。

ナポレオンは、士官學校生徒時代に、このメモール・デュラン式の訓練を受けてゐたが、早くもこの隊形の價値を認め、後來兵馬の全權を握るに當つては、革命時代に左程重要視されなかつたこの縦隊大隊を斷乎として採用した。殊に、我等が刮目して注意を拂ふべきは、散兵戦術の採用であつた。デュランは、始めて散兵を案出したのであるが、まだこれに十分の價値を置くことなく、單にこれを有用な補助と見るに過ぎなかつた。すなはち、縦隊が射距離



内に入り、もしくは横隊に展開するまで、敵眼を牽制するの用に供し、或は襲撃を斷行する前に一斉射撃をもつて敵の前線を射撃する必要があると認められた場合に採用されてゐた。

しかるに、ナポレオンは百尺竿頭さらに一步を進めて、散兵戦術を全部的のものとした。なんとすれば、散開隊形は敵前における運動には最も適當したもので、敵の火力を比較的になくすることができるばかりでなく、地物を利用して敵に肉薄し、全線を擧げて猛烈な射撃を敵にあびせかけることができるからである。殊に大軍を動かすところの大平野の戦鬪にあつては、散兵でなくては決して敵に接近することができないからである。散兵の發案はデュランにあつたけれども、これに實際的效果をあたへたナポレオンは、實に今日なほ玉條として貴ばれるところの散兵戦術(著者註、第一次世界大戦以後散兵戦術はすたれて疎開戦術を見るに至つた)の創始者と見らるべきである。

それなら一八〇九年におけるナポレオンの軍隊の編成はどうであつたか。ナポレオンの軍隊においては、大隊が依然として戦術單位をなし、聯隊毎に四個中隊編成の一大隊(補充部大隊)を加へて、糧食彈藥の補充にあてた。(一八〇八年二月八日計畫、一八〇九年七月實施)また各師團に砲八門を有する砲兵一個中隊を加へた。各軍團には、一中隊もしくは二中隊の工兵、砲兵部隊、兵站部隊、輸送部隊を配屬せしめた。さうして、特に注目すべきは、騎兵及び砲兵に重大な價値を置いたことであつた。彼れは騎兵師團を組織して、砲六門を有する騎砲兵中隊を附屬せしめ、且つ各軍團に砲兵集團を附屬した。もとより歩兵は戦鬪の主兵で、勝敗の運命を決定するものであるが、その速力は遙かに騎兵に及ばず、その破砕力と遠距離射撃とは到底砲兵に匹敵することはできない。騎兵は軍の耳目となり、搜索警戒の任を全うし、且つ卓越した速力の襲撃によつて敵の心膽を寒からしめ、砲兵はその強大な破壊力をもつて遠距離から敵の要所を攻撃し、歩兵の進軍を容易ならしめる性能を持つてゐる。

かやうに、歩騎兩兵種は物質價值を有すること萬々であるが、同時に偉大な精神的効果をあげ得るものである。それゆゑに、精神上の効果を特に重要視したナポレオンは、騎兵・砲兵の補助的位置を遙かに高めたのであつた。しかるに、イスパニヤ遠征のために貴重な大砲を失ふことが少くなかつた結果、一八〇九年戦役の初期において佛軍の砲數が塙軍のそれよりも遙かに劣勢であつたのは、ナポレオンに對する一大痛恨事であつた。

さて、ナポレオンはオーストリアに對してどの位の兵數を出すことができたかを次ぎに説くことにする。出征前彼自身は約四十萬を出し得ると公言したが、これは自國民を安堵せしめ、塙國人を威嚇せしめる彼れの慣用政略に過ぎなかつた。

開戦當時ナポレオンの有してゐた兵力

獨逸軍

	歩兵	騎兵	計	砲數
(1) 第二軍團(ウデイノ)	一六・〇〇五	五・二九三	二一・二九八	四二
(2) 第三軍團(ダグ)	五一・九六八	八・六二九	六〇・五九七	七五
(3) 第四軍團(マツセナ)	三四・八〇五	二・七六五	三七・五七〇	六六
(4) 第七軍團(ルフエーヴル) (バツアリヤ人)	二四・三三四	三・二六九	二七・六一三	七六
(5) ヴェルテンブルグ軍團(ヴァンダム)	一〇・〇二八	二・二二四	一二・二四二	一六
(六) ルーイエ師團(獨逸人)	三・八二〇	—	三・八二〇	六

(七) デュバ師團(佛人)	四・七一三	一・三七八	六・〇九一	一一
(八) ナンスーチー胸甲騎兵	—	五・〇八五	五・〇八五	一八
計	一四五・六七三	二八・六三三	一七四・三〇六	三一一

注 以上のうちデュバとルーイエとの二師團は、まだドナウ河に到着しなかつたから、初期の戦闘に参加したものは、十六萬四千人である。

このほか遠征軍に参加することができたもの

(一) サクソニヤにおいて	二〇・〇〇〇 (分遣隊)			
(二) ポーランドにおいて	一九・〇〇〇 (ポーランド人、ポニアトウスキの配下)			
(三) 下イタリヤにおいて	六八・〇〇〇 (ユーヅエーヌの配下)			
(四) マルマチャにおいて	一〇・五〇〇 (マルモンの配下)			
計	一一七・五〇〇			

それゆゑに、獨逸軍及びその他の全部を合すれば、二十九萬一千八百六人となるわけである。すなはち、塙軍とほぼ伯仲する勢力をもつてゐたわけである。このほか、ベルナドット配下の一萬人の兵は後になつて参加する都合になつてゐた。

さうして、ここに注意すべきは、二十九萬餘人から成る全軍中、八萬人は一八一〇年度に召集すべき新兵をナポレオンが強制召集して速成訓練を施したもので、それぞれ新設の補充部大隊に組織され、各軍團に分配されてゐたこと

である。

(ロ) 訓練

訓練は軍隊の實質を決定する。さうして、それは確かに量を凌ぐだけの効果を奏することができる。ナポレオンの二十九萬人の軍隊は、量においては確かに素晴らしいものであつたが質においては果してどんなものであつたらうか。ナポレオンは常に將卒の訓練を怠らなかつた。平時にあつては勿論であるが、彼れがそれまで経験した幾多の戦場は、實に生きた練兵所であつた。この練兵所で養成された精兵こそ、ナポレオンが最も信頼をかけたものであつたが、それらの多くはイスパニヤに埋没され、今の場合、彼れが眞に股肱と頼むことができたものは、僅かにダヴー及びウデイノ配下の士卒八萬で、その他は平々凡々たる雜兵に過ぎなかつた。そこでロレーヌ・ベートルが、ボンナール將軍の「疑もなく一八〇九年役におけるフランスの最良の軍隊は、嘗つてのそれに比して明かに劣等であつた」(『ナポレオンとカール』)といふ評言を引用したのは當然である。

殊に新徴集八萬の兵士は、まだ數ヶ月に過ぎない訓練を施されたものであるから、勿論これに兵士としての價値を求めるとは無理なのであつた。ナポレオンが彼等に彈藥・糧食の運搬の任を授けたのは、蓋しやむなきに出たものであらう。

軍隊の質を重んじたナポレオンが、取るに足らぬ八萬の兵を募集し、無理矢理に量を多くしようとしたのは、實によくよくの事で、彼れがいかに訓練の程度を悲觀してゐたかを物語るものであらう。

歩兵

歩兵の訓練は、アウステルリッツ、イェナにおけるそれに比しては、到底くらべものにならなかつた。殊に八萬の新兵の存在は、ナポレオンに取つては却つて足手まどひで、腫物に觸れるやうな取扱ひをしてゐたやうである。

ナポレオンがワグラム戰鬪の敵前において、マグドナルドの軍隊をして、八大隊の横隊前線に對して、六大隊乃至七大隊の多數を縦隊の密集隊形として側面におかしたものは、一見不思議の感なきを得ない。なんとすれば、敵の有効射距離内において密集隊形に配置するのが、味方にとつて夥しい損害となるからである。初心者でも直ぐにわかる筈であるからである。従つてロレーヌ・ベートルが、この時のナポレオンの心理状態を「ワグラムのフランス軍隊に對しては、大多數の緊密な連結は劣等な歩兵の動搖を維持する唯一の方法であつた」(『ナポレオンとカール』)といふ事實から想像したのは、無理もない次第である。

さらに、ワグラム戰勝後オーストリア側ヨハン大公の到着のために、佛軍の間に恐慌が起つた事實を思へば、マグドナルドのとつた密集隊形が無理ならぬものであつたことを知るであらう。精神的方面を重んじたナポレオンは、物質的損害を恐れるよりも精神的打撃をより多く恐れたのであつた。この事實は、フランス軍隊の訓練がいかに薄弱であつたかを明證するものである。

騎兵

軍の主兵たる歩兵の訓練が既にこの通りであるから、騎兵の訓練が良好である筈がない。三萬の騎兵を征填役に用ゐたことは、ナポレオンが騎兵をいかに重く見てゐたかを證明するものであるが、騎兵がまだ歩兵に對する補助的地位を出なかつた以上、歩兵以上の訓練を見る筈はなかつたのである。



騎兵は輕騎兵・重騎兵・龍騎兵・胸甲騎兵等にわかれてゐた。さうして、輕騎兵はフランス及びドイツの馬を用ゐたが、これは既に一八〇六―七年に使用されたもので、相當の訓練が施されてゐた。しかしながら、ノルマン及びフランドルの馬に跨つた重騎兵は、力強い馬の負擔力を利用することができたけれども、その速度が著しく敏活を缺いてゐたために、往々騎兵の性能を缺かねばならない程度であつた。エツクミュールにおいて、ながい襲撃の後に彼等が一步も行動ができなかつた事實を思へば、ほゞ馬の性能と訓練の程度とを察することができる。

次に騎兵の訓練上特に注意すべき一事は、搜索・通信に關する點である。騎兵は軍の耳目である以上、その機敏な行動によつて敵情を搜索し、その迅速な速度を利用して報告の任務を盡さなければならぬ。しかるに、一八〇九年の騎兵は、この訓練が十分に行き届いてゐなかつた。ナポレオンがロベウ島を越えアスペルン・エスリンゲンの線に出た時、フランスの龍騎兵は、敵が間近に押寄せてゐることを氣附かなかつた。これは訓練の不十分の結果にほかならない。しかしながら、それでも、まだオーストリア騎兵に對しては、優越な地位を占めることができたのである。

#### 砲兵

砲數において塙軍よりも著しく劣勢であつたフランスの砲兵は、その質においても良好であつたとはいはれない。砲車・前車・彈藥車の上に砲兵を乗せる設備がなく、ただ馭者によつて動かされてゐたに過ぎなかつた。従つて殆んどすべての砲兵は、徒歩して砲車の後を追ふことを餘儀なくされ、その運動は著しく敏活を缺いてゐたのである。

砲兵科出身のナポレオンが、砲兵の價値を輕視する筈は無論なかつたのだが、イスパニヤのことに多忙であつたために、俄かに改良する暇がなかつたものと見える。彼れが砲兵に十分の價値を見出してゐたことは、開戦前においてもその消息は窺はれるが、我等の注意すべきことは、開戦後においても、彼れが着々として改良を施したことであつた。

すなはち、戰場は彼れにとつて最良の訓練所であつた。

アスペルン・エスリンゲンの敗戦後において、敗因の一つを砲兵の不足に歸した彼れは、プロシヤの制度を應用して、俄かに聯隊砲を組織して、ワグラム戰鬪のために十分な訓練を施し、砲數において塙軍よりも優勢を占めることができた。

要するに、一八〇九年のフランス軍隊は、編成上整頓してゐたが、訓練はこれに伴はなかつた。しかしながら、それでも、カールの周到な訓練を受けた軍隊にくらべて、遜色があつたといふわけではない。しかるに、我等がフランス軍隊について惡評を放つのは、ナポレオンの所謂精兵なるものに較べて、その距離が遙かに遠いことを力説したいためなのである。腐つても鯛は鯛だ。未熟だといふものの、フランス兵はやはりフランス兵の特色をもつてゐた。訓練においては兎も角、彼等は依然としてフランス兵の精神を持つてゐた。

ナポレオンの常勝を信する彼等は、畢竟オーストリア軍を恐れる心がなく、結局はフランスの勝利に歸するものと信じてゐた。敵前において往々恐慌を起すのは、訓練の不足から起る一時的現象で、やがてフランス人だといふ自尊心を喚起するだけの精神力を具へてゐた。すなはち、私が佛塙兩國軍隊を比較するに當つて、その價値を前者におくのは、フランス軍隊がオーストリア軍隊に比して形而下的に優良であるといふよりも、むしろ佛軍が形而上的に塙軍に勝つてゐたといふ點を見た結果にほかならない。

#### (ハ) 將士登用法

將士の登用法は、ナポレオンが當時の歐洲諸國に對して、明らかに新記録を示した一つの實績である。從來の登用

法は門地によつて制限され、將校といふ名譽の椅子は、盡く名門出身の子弟に獨占されてゐた。それゆゑに、名門の子弟等は、求めずして將校の地位を得たために、天才でない限り將才を發揮する機會がなく、多くは老朽と無能ともつて軍務をおはる連中であつた。従つて、當然そこに潑刺とした生氣はなく、時代を劃する新戦術は生まれなかつた。しかるに、「名譽を愛するの念は、佛人の第六感である」と言ひきつたナポレオンは、早くもフランス人のこの功名心を利用して、生氣に満ちみちた新軍隊編成に着手した。その手段として、彼れは慾望の標的たる將校の門を佛人一般に開放し、その技倆次第で卒伍の身から元帥の位置をも贏ち得る新路を與へた。そこで、佛人の猛烈な競争・努力・修養が起つて來た。士を見るの明あるナポレオンは、このうちから才能ある者を抜擢して、それぞれ適材を適所に割りあてた。名門といふ一小區劃とフランス全體とは、その範圍において比較にならないと同様に、人間の數においても非常な差があつたために、必然の結果として多くの良將を養成することができた。

ナポレオンがフランス軍隊のなかに嘗て見なかつた新空氣を醸成することができたのは、確かにこの將士登用法に原因してゐる。

### (三) 軍資品の準備

「糧に敵による」といふ孫子の遺策は、最もよくナポレオンに應用された原則である。この法則の實行は、早くもイタリア戦役においてその鋭鋒をあらはしてゐた。彼れはイタリアに出征する前兵士等を集めて、「汝等の政府は、汝等に貧弱なる食糧と衣服と兵器とを與へたに過ぎない。しかしながら、汝等は失望する必要はない。豊饒なイタリアは、汝等に有り餘る糧食と衣服と兵器と彈藥とを供給するであらう。汝等は戦地において一大寶庫を有する富者と

なることができるであらう。」と演説して激動した後、イタリアに侵入し、この豫言を誤りなく實行することができた。由來彼れはこの方針を續行したのみならず、さらに敵を屈服して償金を奪ひ、これを將來の軍資金とし、軍資のためにフランスの財政を害するやうなことはなかつた。チュイルリーの金庫は、常に喜んでナポレオンの軍資金に應じ、當座の借金に不足を感じしめなかつた。

しかしながら、いかにナポレオンが「糧に敵による」の法則を活用する人であつたとしても、無手で敵地に入ることはできない。一八〇九年戦役において、彼れは先づバヴァリアを策源地と豫想し、そこに多くの軍需品を輸送することを怠らなかつた。が、後になつて彼れは、これらの物資をば、主としてドナウ河を利用し、軍隊の後を追うて輸送することを考へてゐた。さうして、遠征中軍隊をして物資・軍資に困難を感じしめることは極めて少かつた。

就中我等が特に注意すべきことは、ナポレオンが糧食を敵地に得るのみならず、諸般の軍需品を敵地から獲得し、これを活用するの才略を有する點であつた。

ウィーン攻略の後、そこを經濟上の策源地とし、糧食その他の物資を強制的に徵發したばかりでなく、そこに多くの材料を蒐集して、ロバウの架橋工事を完成し、エスリンゲンの敗戦に鑑み、周到なロバウの準備時代を過し、更にウィーンにおける多くの戦利品、殊に多數の大砲を利用して聯隊砲にあてたのは、ワグラム戦鬪におけるナポレオンが孫子の兵法の理想的な實行者であつた事實を物語る。

孫子は言つてゐる。「夫未戰而廟算。勝者得算多也。未戰而廟算。不勝者得算少也」私は『孫子』を讀んで、廟算なるものは、要するに五事七計の完全な實行によつて成立するものであると解釋した。さうして、この廟算を今の言葉にあてはめてみれば、「準備」の二字に最もよく表現されてゐるのではなからうか。ところで、佛墮兩軍

の開戦前の準備を前述の通り調査した結果、私は佛軍の準備が大體塙軍の上にあるのを發見し、佛軍は戦はざる前に既に塙軍に勝つべき運命をもつてゐたことを斷言して憚らないものである。なんとすれば、佛軍は準備において塙軍に優る以上、開戦後同等の條件におかれた場合には、當然勝たなければならぬ筈である。開戦後における戦術・戦術の巧拙は、勿論戦局の運命に影響すること大なるものであるが、これは主將によつて決定されるものであるから、主將が遙かに傑れてゐる佛軍は、決して戦術・戦術において塙軍に劣るべき筈はない。ただその後、我等の問題とすべきものは、偶然の機會である。

名將と雖も千慮に一失はある。若しもナポレオンがその一失を暴露したとするなら、ナポレオンは果してこの一失なきを保證し得るかどうか。カール大公はこれに乗ずることができずであらうかどうか。

さて、孫子の廟算なるものは、以上のやうな軍事上の準備のみに限られるのではなく、彼を知るの計策即ち七計即ち政略外交をも包含してゐたのである。ところが、戦術眼に留らず、政略眼を有するナポレオンは、開戦前において既に得意の政略を弄し、トルコ、フィンランドを好餌として、ロシアといふ大敵をオーストリアから分離し、或る程度までオーストリアに敵意を抱かせた。これに反して、オーストリアは、プロシヤ、ロシア兩國を味方とし、同盟の力によつてナポレオンを挫かうとした。しかしながら、普王の優柔と露帝の冷淡とのために、同盟を作る機會がなく、遂に獨力をもつて大ナポレオンに當らなければならなかつた。唯一つ政略上の成功と見るべきものは、フランスと不倶戴天の敵であつたイギリスの援助を藉り、軍資を得られる目算を作つたことであつた。

要するに、政略上の成功は、ナポレオンの手に歸した。軍事上孤立したオーストリアに對して、敗北を考へることのできないナポレオンが、政略上オーストリアを殆んど孤立の地位におくことができたのは、確かに彼れの政略上の

成功を意味するものである。

それゆゑに、私の謂ふ「準備」は、孫子の廟算、即ち戦術・政略兩要素を融合した極めて廣い意味にこれを解した。さうして、この政戦兩略が一八〇九年戦役中いかに進捗するかは、大に注意すべき問題であるから、われらは本戦役における各戦闘をとほして綿密な調査を試みるつもりである。

## 第四章 戦略と政略

既に述べたやうに、戦争は政略の産物である。さうすれば、戦争の目的を貫徹する手段であるところの戦略と政略との間に、密接不離の關係があるのは、必然の事項でなければならぬ。政略上攻勢に立つものが戦略上攻勢に立ち、政略上防勢に立つものが戦略上防勢に立つのは必然の歸趨である。そこで、フォン・デル・ゴルトは『國民皆兵論』のうちに次のやうに述べてゐる。

戦略上まづ攻勢及び防勢をとらしめるものは、政略的事情である。

それゆゑ、一戦役中においても、政略の變更は自然戦略の變更を促す。我等が往々にして單なる軍事眼をもつて、戦略の變更もしくは戦術の遂行にそはなない戦略に奇異の念を懐くのは、この消息を理解しないためなのである。クラウゼヴィッツは「戦争は敵を壓倒して、我が意志を貫徹するところの権力行爲である」（『戦争論』）と喝破したが、かうした意味の戦争目的を貫徹するためには、戦略上・政略上二個の中心點に着眼せねばならない。政略の中心は敵國の首都であり、戦略の中心は敵の主力軍である。

敵軍の主力を殲滅するのぞければ、到底、敵を降伏せしめることはできない。それゆゑに、我れの先づ全力を傾注すべきは、勿論敵軍の主力でなければならぬ。しかしながら、この目的を果すために政略上敵の首都を占領することは重要な手段であり、これがために常に敵軍とその首都との連絡線を切斷し、一舉敵都に肉迫するわけである。

すなはち戦略の眼は、軍に敵軍の上に注がれるばかりでなく、常に政略の眼を追うて敵都を視なければならぬ。

戦術は唯一つの戦場裡に踞踏するのであるが、戦略は戦場を越えて、遙か彼方の大目標を透視しなければならぬ。しかしながら、ここに注意すべきことは、敵の首都を略取しても、なほ敵の意志を屈服することができず、従つて我が戦争目的を達成することができない場合が往々にある。すなはち、この場合において、敵都占領は政略の貫徹に與らない。さうして、我れはさらに進んで敵の主力軍破砕を目的とせねばならぬやうな、一見戦略本位的傾向を生ずることが起つて来る。さうなると、政略と戦略とのいづれが優越的地位を占むべきかといふ問題、或は兩者をいかに巧みに渾一すべきかといふやうな興味ある問題が起つて来るが、それらについては、戦争の経過を取扱ふ場合にこれを詳述し、最後の結論において斷定を下したい考である。

戦略と政略との關係は、開戦後においても密接である。すなはち、政略は第三國の援助を企圖し、或はその嚴正なる中立を維持することに全力を盡し、以て戦略の進捗を補助することをやめないものである。若しも第三國の援助を企圖し、援兵を得る見込みがつけば、戦略に大きな影響を來すのは勿論のことであり、時としては防勢から轉じて、新たに攻勢を取ることでもできる。また或は第三國の援助を得ることができないまでも、少なくとも彼れをして嚴正なる中立を守らしめることができれば、我れは、開戦後に於ても、注文どほりわが戦略を斷行することができる。

以上は對外政略と戦略との關係であるが、戦略はさらに對内政略と緊密な關係を有することを忘れてはならない。開戦前におけるすべての準備は、盡く對内政略の産物である。さうして、この準備の如何によつて戦略の方針が決定されるのである。準備こそ實に戦略の根柢であり、所謂戦略はその必然的成果である。また對内政略は、開戦後においても引き続き戦略の補助となるものである。戦場にある我が軍隊を支持すべき物質上のすべての準備を完成しよう

とする努力、或は國民全般に對して熾烈な愛國心を喚起し、若しくは出征軍人に對して深き同情の念を抱かしめる等のことは、皆對内政略の賜物である。さうして、かうしたことは、大いに戰略の進捗に與つて力があるのである。

## 第五章 佛墮第一回の役

### 第一節 佛墮兩軍の戰略

#### 一、墮軍の戰略

カールは、最初第八軍團・第九軍團の兩軍團をして、イタリヤ、チロールに、第七軍團をしてガリチヤにおいてポーランドに備へしめ、第一軍團から第六軍團に至る六個軍團及び第一豫備軍團・第二豫備軍團を主力軍となし、カール自らこれらを引率して、エルベ河を越えて、ポヘミヤ西境に至り、ナポレオンの援軍の到着しないうちに、まづ佛軍の中樞たるライン軍、ダッ配下六萬を攻撃して、一舉にこれを粉碎する戰略を立てた。

この計畫は、三月三十一日における墮軍の位置を見れば、直ちにこれを窺ひ知ることが出来る。すなはち、それは次の通りである。

#### ポヘミヤ

第一軍團 (ベレガルデ配下)

ザーツ

第二軍團 (コロウラート)

ビルゼン

第三軍團 (ホーエンツォルレルン)

ブラーグ

#### 第五章 佛墮第一回の役

- 第四軍團 (ローゼンベルグ)
- 第五軍團 (ルイ大公)
- 第一豫備軍團 (リヒテンシュタイン)
- ビーゼク
- ブドワイス
- イグラウ

ドナウ河以南

- 第六軍團 (ヒラー)
- 第二豫備軍團 (キエンマイヤー)
- ウエルス
- エンス

この配備を圖上で一見すれば、直ちに第六軍團・第二豫備軍團のほかは、盡くドナウ河の北方ボヘミヤにあつて、ライン軍を直指してゐたことがわかる。

しかるに、ダヴのライン軍がラチスボンにむかつたといふ報知は、再びカールをして攻勢方向を轉換せしめるやうになつた。彼れは諸將を集めて、現在の配備で攻勢を續行するか、或は一先づドナウ河南方に引きさがり、新攻勢方向を取るかについて、その利害・得失を商量するところあつたが、結局ドナウ河の南から敵を攻撃することになつた。しかしながら、彼れの戦略の精神は依然として同一であつた。すなはち、攻撃方向は變つたけれども、まづダヴ一軍を殲滅しようとする根本方針は以前と同様であつた。かくして、四月九日における塙軍の配備は、次の通りになつた。

- (一) 第一及び第二軍團  
 タヒヤウIIフラウンベルグの線(以上ドナウ河以北)
- (二) ヴェシイの旅團(第二軍團からわかれたもの)  
 第一豫備軍團  
 第三・第四・第五・第六軍團  
 第二豫備軍團  
 シエルディングからブラウナウに至る線(イン河に添ふ)
- (三) エラキツクの師團(第六軍團に屬す)  
 ザルツブルグの方向に

四月十日イン河を渡つた塙軍は、遂に敵地に入り、佛軍既にドナウ河畔のドナウウエルト附近に近づきつつあることを知つて、ますます前進し、四月十五日夜次のやうな位置を取つた。

- 第一軍團 アンベルグ到着
- 第二軍團 シュワンドルフ到着
- ヴェシイの旅團 ブラットリングに近づく
- 第四軍團 デインゴルフィンク附近
- 第三・第五軍團・第一・第二豫備軍團 ランツフートに近づく
- 第六軍團 フィルス河を渡り、モースブルグに前進
- エラキツクの師團 ワツセルブルグIIミュンヘン路上、ミュンヘンを去る一日行程の位置にあつた。

四月十六日における位置

- 第一軍團 アンベルグ
- 第二軍團 シュワンドルフ、ブルグレンゲンフェルト間
- グエシイの旅團 ブラットリンゲン
- 第四軍團 デインゴルフィンゲン
- 第三・第五軍團 ランツフート
- 第一・第二豫備軍團
- エヲキッタ ミュンヘン占領
- 第六軍團 モースブルグ

四月十七日における位置は、大體同月十六日と同様であるが、唯第二軍團がニツテルナウから前進したことが一變動である。

四月十八日墺軍の位置

- 第一軍團 アンベルグ
- 第二軍團 ニツテルナウ
- 第四軍團 ロールの前面
- 第五軍團 ロール

- 第一豫備軍團 オイレンンバッハ
- 第二豫備軍團 ブエツフエンハウゼン
- 第六軍團 モースブルグ附近
- 第五軍團 ルマンズドルフ

以上の墺軍の運動から判断して見ると、カールの戦略的機動は、明かにランツフートを中心として主軍を動かさし、第一・第二兩軍團をしてボヘミヤからラチスボン方向に進んで来るダヴィの軍を牽制せしめ、カール自らは、進んでケルハイムでドナウ河を渡るつもりであつたらしい。四月十六日カールは皇帝フランツに送つた書簡に次のやうに記してゐる。「ランツフートは、イザール河上の鍵であります。臣等は既にバヴァリヤの大半を占領しました」(『自由戦争』)「臣は明朝各軍團をランツフート前面に合併したいと思ひます」(『ナポレオンとカール』)

これは明かにランツフートを中心とするカールの戦略を立證するものである。しかるに、一つの出来事が起つて、カールのこの方針に一大障碍を與へた。彼等は四月十八日午前六時半から七時に至る間において、第四軍團のローゼンベルグから次のやうな重要な報告をうけた。

- (一) モンブラン(佛軍)の斥候は、ストラウピング街道を徘徊す。
  - (二) レーゲン河上に砲聲及び銃聲を聞く。
  - (三) 捕虜の言によれば、十六日の夜ダヴィが三萬の歩兵と輕騎兵四個聯隊とを引率して、ラチスボンに進入せ
- 第五章 佛墺第一團の役

この報告は再びカールの戦略を破つた。ドナウ河を渡つてダヴィを粉碎しようといふ彼れの根本戦略は覆された。塹軍全體の機動力の不敏活と、ベレガルデ、コロウラート等の緩漫な行動とは、遂にダヴィをやすやすとラチスボンに入れてしまつた。そこで、カールは今やコロウラートをしてラチスボンを威嚇せしめ、自ら主軍をもつて南方からダヴィを攻撃する戦略を取ることに決心した。しかしながら、「時」はカールの手から逃げ去りつゝあつた。なんとすれば、この時既にルフエーヴル、ヴァンダム率ゐるフランス軍は、ノイスタットに、マッセナの軍はアウグスブルグに到着してゐた。そこで、カールは全軍を擧げてダヴィを粉碎する最初の方針を棄て、第五・第六兩軍團及び第二豫備軍團をもつて、ルフエーヴル、マッセナに備へしめ、殘餘の六萬六千五百人をもつてラチスボンを襲ふほかに仕方がなかつた。

ボンナール將軍はこれに對して次のやうに評を與へてゐる。

十八日當夜の位置こそ佛軍にとつて實に由々しい危険であつた。……ダヴィ、ルフエーヴルの兩軍を撃破した後カールはその殘兵をベレガルデ、コロウラート及びヴェシーに委し、鋒を轉じてマッセナに當ることができたことであらう。(ロレーヌ・ペートル著「ナポレオンとカール」)

しかしながら、ボンナールが塹軍にこの戦略を望むのは、小兒に對して大人のやうにあれと要求するものだ。なんとすれば、塹佛主客轉倒して、大人たる佛人が小兒たる塹人と地位を換へてこそ、はじめてボンナールの希望は遂げられるであらうと考へられるからである。

塹軍の貧弱な機動力をもつてしては、分離した三軍が、相一致して戦略の根本を貫徹するためには負擔が餘りに大きすぎた。要するに、カールの戦略は大體三段の變化をもつて進んだやうである。

- (一) ボヘミアからダヴィを襲はうとする戦略。
- (二) ランヅフート、ケルハイムを経、ドナウ河を越えてダヴィを襲はうとする戦略。
- (三) ロールを経てラチスボンにダヴィを襲はうとする戦略。

ダヴィを粉碎しようとする根本精神はいづれも同一であるが、戦略の根柢たる「機動」が三度とも一定の方向を示してゐなかつた。それがために、さらでだに貧弱な塹軍の機動力は、いやが上にも減少せられ、遂に龍頭蛇尾の戦略となりをはつたのである。

かくして、脱兎の如く出發をした戦略的攻勢は、次第に緊張の度を減じ、僅かに處女の如き攻勢を維持するに過ぎなくなつた。

## 二、佛軍の戦略

ナポレオンは、不幸な境遇のもとに、オーストリアに對して防勢といふ新經驗を覺悟しなければならなかつた。しかしながら、由來攻撃精神を本領とした彼れが、かの輕薄な塹人に對して防禦の屈辱に甘んずる筈はなく、一時止むを得ず防勢を取つたとしても、機會があれば直ちに攻勢に轉ずる考へを持つてゐたのである。この目的を達するため、彼れは第一にパッサウに眼を注いだ。三月一日ナポレオンは次のやうに語つてゐる。「パッサウは甚だ重要地點である。殊に攻勢においてさうである。オーストリアに侵入するためには、ドナウ河に添うて進軍するのが最も有利



である」(『ナポレオンとカール』)

實際、一度地圖を一瞥するものは、直ちにパッサウがオーストリアに對する戰略上の唯一據點であることを承認するであらう。なんとすれば、そこはバヴァリア東境の凸角に位し、ドナウ河の本流を制し、オーストリアの首都ウィーンを扼することが出来る絶好の地點であるからである。實にパッサウはオーストリアの心臓に擬せられた短剣そのものであつた。いかにオーストリアの機動力を輕蔑したナポレオンだからとて、塙軍を出し抜いてパッサウを策源地となし得るほかに、佛軍の機動力を信することはできなかった。そこで、彼れは遺憾ながらこの第一據點たるパッサウを棄て、ラチスボンに第二の據點にしようとして考へた。三月三十日附の彼れの日記は、明かにこの間の消息を示してゐる。予の意志は、予の本營をラチスボンに移し、そこに予の全軍を集中するにある」(『ナポレオンの日記』)のみならず、三月三十一日における佛軍の配置は、ナポレオンのこの意志を具體的に證據立ててゐる。

ベルナドット ドレスデン

ダヴィ バイロイト、ニュルンベルグ、アンベルグ、インゴルスタット

ルフエーヴル ミュンヘン、ランヅフート、ストラウピング

さうして、この時ナポレオンは、防禦者の常習手段として、敵の主攻撃點の方向について多大の憂慮を拂はねばならなかつた。

(一) 塙軍はボヘミヤから來るか。

(二) 塙軍はドナウ河の南から來るか。

(三) 塙軍はドナウ河の南北から來るか。

これらの問題は、確かにナポレオンの決心をかき亂したに違ひない。彼れは、大部分の軍團をドナウ河の北方に配置した敵の配備を見て、多く第一問題に心を傾けてゐたが、さらに萬全の策を取る必要上、どちらから來る敵に對しても應戦し得る位置を選ばなければならぬ運命にあつた。その位置は、ラチスボンを置いて他にこれを求めることはできない。そこで、彼れは遂にラチスボン集中を決意したらしい。

戰略上、兵力集中を第一法則と考へてゐたナポレオンがこの舉に出るのは、幾多の前例に徴してもあり得べき事である。しかるに、形勢は俄然として變つてゐた。ボヘミヤにあつた塙軍のカールの主力軍は、俄かに鋭鋒を轉じてドナウ河を渡り、四月九日イン河の線に近づき、同月十日遂にイン河を越え、バヴァリアに侵入した。これを見て、ナポレオンから全軍の指揮を委任された參謀總長ベルチェは、どんな態度に出たらうか。愚かにも、彼れは兵力集中が戰略上の鐵則であることに思ひ至らず、ナポレオンの訓令の眞意を悟ることができないで、軍を分散したままに放擲してゐた。すなはち、佛軍の當時の位置は次の通りである。

四月十五日佛軍の位置

ダ	ヴ	ー	ノイマルクト、ニュルンベルグ、ラチスボンの北、ヘマン、アルトミュール、インゴルスタット
ルフエーヴル			ミュンヘン、ランヅフート、ストラウピング、アーベンスベルグ
マツセナ			レッヒ河上

四月十七日佛軍の位置

ダ	ザ	イ	大部分ラチスボンに近づく
ル	フ	エ	ィブル
	ゲ	ル	スフェルド、フオーブルグ、インゴルスタット、ドナウウエルト
マ	ツ	セ	ナ
		レ	ッヒ河上

これは實に佛軍にとつて戰略上の一大危機であつた。若しも塙軍が敏速なる機動力と斷乎たる決斷心をもつてゐたならば、佛軍は確かに個々に粉碎されたに違ひない。さうして、佛軍がこの不幸を見るに至らなかつたのは、ただ僥倖といふほかはない。四月十七日ドナウウエルトに到着したナポレオンは、色を失ふまでに恐怖に襲はれたが、斷然たる決意を固め、直ちに全軍にむかつてドナウウエルトを中心として集中すべきことを命じた。さうして、マツセナは、ウルムからアウグスブルグにやつて來た。ダヴィはラチスボンに入城することになつた。しかしながら、時間の餘裕がなかつたために、ドナウウエルトへの集中戰略は、遂にこれを實行することができなかつた。しかるに、機を見るに敏なナポレオンは、カールのラチスボン攻撃を看破し、マツセナの軍をもつてカールの背後を襲はしめることに成功した。

以上を大觀すれば、ナポレオンの戰略も、カールのそれと同様に、三段の變化をして來たやうである。すなはち、彼れの戰略上の據點は、パッサウからラチスボンに移り、最後にドナウウエルトに移つた。さうして、全然不利の境遇におかれたにも拘らず、佛軍が破滅の悲運を免れたばかりでなく、却つて攻勢に轉ずることができたのは、偏へにナポレオンの將才と佛軍の迅速な機動力とに歸せらるべきである。

第二節 戰 闘

戰闘は四月十九日から二十三日まで五日間繼續した。ターン戰闘、アーベンスベルグ戰闘、エックミュール戰闘、ラチスボン戰闘がそれである。さうして、マツセナのランツフト迂回運動は、實に第一回役における主な戰闘であつた。しかしながら、我等はこの役を戰闘そのものゝ性質から見れば、これに大した興味を感ずることができない。そのうち實際戰闘そのものについては、アスペルン・エスリンゲン、ワグラムに比すべき決戦は見られなかつたが、ナポレオンがこの數個の戰闘を利用し、それらの間に巧妙精緻な戰略網を織り出したことについて、大なる意味を見出さなければならぬ。ナポレオンはセント・ヘレナで、次のやうに記してゐる。「アーベンスベルグの戰闘、ランツフトの機動、エックミュールの戰闘、これらは予の機動中、最も光輝あるさうして最も巧妙なるものであつた。」ナポレオンは光輝ある機動といつたけれども、決してこれを光輝ある戰闘とはいはなかつた。ロレーヌ・ベートルはナポレオンのこの言葉を、餘りに銜學的なものとして排斥したが、それは「機動」といふ意味を深く考へなかつた結果ではなからうか。

ナポレオンがセント・ヘレナに残骸を抱きながら、己れの經驗した數多くの戰闘を回想した時、いかにこのバヴァリアの谷間から、強ひて隠れたる名譽を探り出さうとしてゐたことであらうか。彼れの困憊した精神に、血の湧くやうな興奮を與へる戰闘は、バヴァリア以外に數知れずあつた。若しもナポレオンが銜學者であつたならば、バヴァリア以外で行はれた他の幾多の戰勝を誇張し、彼れの乾ける心を満足させたに違ひない。なんとすれば、バヴァリアの

諸戦闘は、戦闘そのものとしては、殆んど世人の一視一瞥を買ふことができない戦闘だからである。それにも拘らずナポレオンがそれらの小戦闘に對して、忘れ難い印象を刻んでゐたのは、實に戦闘の行はれた五日間における佛軍の機動そのものであつた。

ナポレオンはバヴァリアの沼澤地・森林地に良好な道路の不足を感じたにも拘らず、佛軍の卓越した機動力を利用し、或は小戦闘を利用しつつ、忽ちにして戰術的攻勢に立ち、遂には戰略的攻勢に立つことができたのである。すなはち、一八〇九年 ヴァリヤにおいての佛軍の卓越した機動力の光は、遍く第一回役に照り渡つてゐたのである。

これに反して、塙軍の機動・用兵は、實に貧弱極りないものであつた。これらの關係については、節を改めて、個々の戦闘を述べる際にこれを再説することにする。

### 第三節 ターン附近の戦闘 (四月十九日・第一日)

カールは最後の戰略としてラチスボン方面にダヴーを粉碎するの策をとつたが、この時すでにルフューヴルの軍團(バヴァリア軍)は、アーベンスベルグ、ジゲンスブルグに塙軍を睨んでゐたから、一部を割いてこれに備へる必要上全軍をダヴーに向けることができなかった。そこで彼等は、この戰略を實施する手段として、次のやうな三つの手段を取つた。

(一) 第三軍團をしてバヘル、グロツスマイス、ハウゼン、テンゲンを経て、アバツハ、パイシング方向に進撃せしめること。

(二) 第四軍團(第一豫備軍團、擲弾兵を附す)をしてラングクアイド、及びディンツリングを経て、ワイローエに向はしめること。(カールは第四軍團と一緒にゐた)第一豫備軍團及びリンデナウ師團(リヒテンスタイン配下)は、ラングクアイド、ライエンドルフ、シエルリング、オーベル・ザンディング、タールマツシング、ゲベルコーフェンを経て、ラチスボンに向ふこと。

(三) 第五軍團・第六軍團は、アーベンス河に至り、アーベンスベルグとラチスボンとの連絡を絶つこと。

チェリー將軍(第三師團に屬す)は、六千の兵を率ゐて、キルヒドルフ高地において、アーベンス方向の敵を監視し、第五軍團と連絡を保つこと。

(以上の命令は、十九日午前五時に發せられた)

かくして、塙軍は四月十九日午前六時にそれぞれ運動を開始した。一方佛軍のこれに對する態度は、果してどうであつたか。

ナポレオンは、ドナウウェルトを根據とした戰略を實行するために、十八日の夕方までに、ダヴーをノイスタットにウデイノの二師團とマツセナの三師團とをしてアツフエンホーフエンに赴き、ダヴーとルフューヴルとに連絡を保たしめることを命令し、ダヴーとルフューヴルとをしてカールの本軍に當らせ、マツセナ、ウデイノをして塙軍の左翼を攻め、これをラングフト方向に壓迫させようといふ策をとつたが、ベルチエの大誤算は、直ちに惡結果をあらはし、ダヴーの分散してゐる諸隊をノイスタットに誘導する餘裕を與へることができなかった。一方、マツセナ、ウデイノ等も、ナポレオンの希望通りにはならなかつた。辛うじて、十八日の夕方までに、ウデイノがシユレーベン

ハウゼンに到着し、マッセナはその半ばをもつてアイバツハに到着することができなかつた。それゆゑに、ナポレオンの希望たるドナウ河の凸角(ラチスボン)に敵を追ひつめる策は、一時實行されさうにもなかつた。しかしながら、兎に角ダヴーは十八日夕方には、全軍をもつてドナウ河を渡り、大佐クートラルをして、二千に足らぬ小勢をもつて、ラチスボン橋を固守し、北方から来るコロウラートに備へしめた。要するに、十八日夜における佛軍の位置は、ラチスボン、アーベンスベルグ、アウグスブルグの三地點に分散し、兵力集中を最も愛するナポレオンにとつては、實に不安な状態となつてゐた。

しかしながら、今や佛墮兩軍の衝突は目睫の間に迫つてゐた。やがて、タインを中心として小戦闘が開かれた。

先づ戦は墮軍の先鋒たるホーエンツォルレルン(第一軍團)とダヴーとの間に交換された。テンゲンとハウゼンとの間にある森林は、兩軍必死の争奪地點であつた。ホーエンツォルレルンは僅か一萬五千の兵士をもつてダヴーの優勢なる二萬五千(ダヴーの軍は總勢五萬であつたが、半数はこの戦に参加しなかつた)と對戦しなければならなかつた。しかしながら、敵に對して高い位置を利用することができたので、勇猛奮戦して一時は佛軍を驅逐することができた。午後三時頃に及んで、ホーエンツォルレルンはカールに援兵請求の手紙を書いてゐたが、再びダヴーの逆撃を蒙るに至り、遂にこの大切な森林を佛軍の手に委せざるを得なかつた。

この時、ローゼンベルグ(第四軍團)は、モーショルツ森において佛將モンブランの兵を破り、主將カールは手兵一萬二千を掲げて、ハウゼンから僅か二哩を距てたグループの高地にゐたが、ホーエンツォルレルンを救援しようとしなかつた。

リヒテンスタイン(第一豫備軍團)は約一萬五千の兵を引率して、午前六時ローンを出發し、殘敵の一兵とも遭遇することなく、ラングクアイド、エックミュールを通ずる良路を悠々と行軍し、ホーエンベルグとエックミュールとの間に宿營した。(行程十二哩半)彼れの行程から判斷すれば、正午頃には確かにグループから二哩不足の地點にゐたに相違ない。しかるに、彼れがハウゼン、ディンツリング方向に少しも注意を拂ふことなく、悠々閑々とラチスボン方向に進軍を續行したのは、命令遵奉以外になんら應變の處置を取らなかつた證據である。

アーベンス河方面はどうであつたか。墮將チェリーは約六千の兵をもつて午前六時キルヒドルフを出發し、八時頃ブルックホーフに至り、バヴァリア軍と戦つたが、利を失ひ、オッフエンステッテン方向に退却した。ルイ大公は、アーベンスベルグ方面攻撃の任務をもつて、午前六時ルドマンズドルフを出發(兵力二萬二千)正午、ジーンズブルグに到着した。ロレーヌ・ペートルがルイの緩慢を嘲つて、「ジーンズブルグに達した時は正午であつたから、軍團(ルイの第五軍團)は、六時間に四哩半ばかり行進したに過ぎない。」(『ナポレオンとカール』)といつたのは當然である。

若しこれを事實とすれば、その行軍の遅々たること全く想像のほかである。そればかりでない。ルイはさらにそれ以上の過失を犯した。彼れは自らベルカ高地に登つて、チェリーと佛軍との間に猛烈なる戦闘が行はれてゐるのを目撃したにも拘らず、援兵を送る考もなく、唯茫然と午後四時まで戦を傍觀してゐたのである。やうやく援兵が出された時は、チェリーが既に撃退されてしまつた後であるから、援軍の將ビアンキは自然孤立に陥り、一溜りもなく佛軍から撃退されてしまつた。午後五時頃ルイはシュテスク將軍に四中隊を與へて、ロール方面にあるチェリーの援兵としたが、時は既に遅かつた。加ふるに、午後七時、ルイはカールから、ロール、ラングクアイドを経て北進して、ダヴー攻撃に當ることを命ぜられたので、チェリーなどには構つてゐられなかつた。